

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	留学生と日本人学生の異文化コミュニケーションにおけるメディア使用の影響
Title(English)	The Influence of Media Usage on Intercultural Communication between International Students and Japanese Students
著者(和文)	叶少瑜
Author(English)	Shaoyu Ye
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第9910号, 授与年月日:2015年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:室田 真男,中川 正宣,武井 直紀,前川 眞一,中山 実
Citation(English)	Degree:., Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第9910号, Conferred date:2015/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Type(English)	Doctoral Thesis

平成 26 年度学位論文

留学生と日本人学生の異文化コミュニケーション
におけるメディア使用の影響

東京工業大学大学院社会理工学研究科

人間行動システム専攻

叶 少瑜

平成 27 年 2 月

目 次

第1章 序論.....	1
1.1 本研究の背景と目的.....	1
1.2 本研究における理論的背景と枠組み.....	4
1.2.1 異文化コミュニケーションの定義とその過程に付随する困難点.....	4
1.2.2 本研究に関する理論とその枠組み.....	7
1.3 コミュニケーションとメディアに関する先行研究.....	11
1.3.1 コミュニケーションとメディア.....	11
1.3.2 時代の変遷に伴うコミュニケーションメディアの変化.....	13
1.3.3 携帯メールの使用がもたらす影響.....	16
1.3.4 コミュニケーションメディア観を取り上げる重要性.....	24
1.3.5 留学生のコミュニケーションメディア使用とその影響.....	26
1.4 本研究の構成とデータソース.....	29
1.4.1 本研究の構成.....	29
1.4.2 本研究のデータソース.....	30
第2章 中国人留学生と日本人学生の異文化コミュニケーションにおけるケータイ使用の影響.....	33
2.1 本章の背景と目的.....	33
2.2 研究1:ケータイコミュニケーションにおける日本人学生の中国人留学生に対する印象形成.....	34

2.2.1	本研究の背景・目的及び仮説	34
2.2.2	方法	38
2.2.2.1	予備調査	38
2.2.2.2	本実験	38
2.2.3	結果	41
2.2.3.1	分析対象	41
2.2.3.2	群分けの同質性と群内分散の均等性	42
2.2.3.3	提示されたステレオタイプ項目に対する認知度	42
2.2.3.4	仮説①と仮説②に関する検討	43
2.2.3.5	仮説③に関する検討	46
2.2.3.6	仮説④に関する検討	51
2.2.4	考察	52
2.2.5	まとめと今後の課題	54
2.3	研究2：中国人留学生と日本人学生のケータイ使用に関する比較	55
2.3.1	目的	55
2.3.2	方法	55
2.3.2.1	日本人学生を対象にした調査	55
2.3.2.2	中国人留学生を対象にした調査	56
2.3.3	結果と考察	57
2.6	本章のまとめ	62

第3章 留学生のコミュニケーションメディア観と使用状況, 個人的要因との関係	64
3.1 本章の背景と目的	64
3.2 研究3: 留学生のコミュニケーションメディア観及びそれに影響を及ぼす諸要因	65
3.2.1 先行研究と仮説	65
3.2.2 方法	66
3.2.3 結果	67
3.2.3.1 調査協力者に関する情報	67
3.2.3.2 各コミュニケーションメディアの使用状況	68
3.2.3.3 日本語能力によるコミュニケーションメディア観の相違	72
3.2.3.4 コミュニケーションメディア観と使用状況・個人的要因との関係	76
3.2.4 考察	79
3.2.4.1 日本語能力によるコミュニケーションメディア観の相違について	79
3.2.4.2 コミュニケーションメディア観と使用状況・個人的要因との関係について	80
3.2.5 まとめと今後の課題	83
3.3 研究4: 留学生のメディアリテラシーに対する認識とコミュニケーションメディア使用の関係	84
3.3.1 目的と仮説	84
3.3.2 方法	85
3.3.3 結果	86
3.3.3.1 調査協力者に関する情報	86

3.3.3.2	各コミュニケーションメディアの使用状況	86
3.3.3.3	メディアリテラシーに対する認識の因子分析	88
3.3.3.4	メディアリテラシーに対する認識の特徴	89
3.3.3.5	メディアリテラシーに対する認識に係る 3 因子の特徴	91
3.3.3.6	メディアリテラシーに対する認識と各コミュニケーションメディアの 使用状況・個人的要因との関係	92
3.3.4	考察	94
3.3.4.1	留学生のケータイ・スマホ・PC の使用について	95
3.3.4.2	メディアリテラシーに対する認識と各コミュニケーションメディアの 使用状況・個人的要因との関係について	95
3.4	本章のまとめ	98
第 4 章	研究 5 : 留学生のコミュニケーションメディア使用が異文化適応状況に及ぼす 影響	99
4.1	本章の背景, 目的及び仮説	99
4.2	方法	101
4.3	結果	102
4.3.1	調査協力者に関する情報・各コミュニケーションメディアの使用状況 ..	102
4.3.2	異文化適応状況	103
4.3.3	諸変数の相関関係	104
4.3.4	SEM に関する検討	105
4.4	考察	107

4.5 本章のまとめ	111
第5章 結論	113
5.1 得られた成果	113
5.2 異文化コミュニケーションにおけるメディア使用の影響及びそれに基づいた提 言	118
5.3 残された課題	120
謝辞	123
本論文に関する研究発表	125
参考文献	130
付録	138

本研究における重要概念の定義

本論に入る前に、本研究における重要概念について述べておく。

メディアとは、音声通話やテキストの機能と関係なく、PCやケータイなどのデバイス自体を指す。

ケータイとは、電話、メール、インターネット使用などの機能による差異を考えず、スマートフォン（以降「スマホ」と略す）以外の携帯デバイスそのものを指す。

携帯メールとは、ケータイによる@docomo.co.jp, @softbank.ne.jp/i.softbank.jp, @ezweb.ne.jp, 等のキャリアメール（SMSも含む）を指す。

携帯電話とは、ケータイによる音声通話機能のみの場合を指す（ビデオ通話は含まない）。

携帯インターネットとは、ケータイによるインターネットへのアクセス使用を指す。

スマホとはスマートフォンの略語であり、従来のガラ携帯以外、iPhoneやAndroidを指す。

スマホメールとは、スマホを利用して、SMSを含めたメール機能を指す。

スマホ電話とは、スマホによる音声通話機能を指す。

スマホインターネットとは、スマホを使用して、インターネットにアクセスした場合を指す。

コミュニケーションメディアとは、未だに定説はないようだが、本研究では、PCやケータイのようなメディアと区別し、「携帯メール」「携帯電話」のような、デバイスと伝達方法の組み合わせを指す。また、先行研究（e.g., 都築・木村, 2000; 岡本・高橋, 2006）に沿って、「対面」も「コミュニケーションメディア」と称す。

第1章 序論

1.1 本研究の背景と目的

「グローバル戦略」展開の一環として、文部科学省、外務省、法務省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省の6省庁が2008年7月末、2020年を目途に留学生30万人の受入れを目指す政策を打ち出した。この政策は2007年5月に在籍する留学生数118,498（日本学生支援機構（JASSO），2007）を約3倍まで増やす壮大な計画であり、2008年度よりすでに実施されている。増加している留学生と日本人学生の関係に着目すると、日本人学生との交友関係は留学生の異文化適応においては重要な役割があると田中（2000）が示している。田中は、ホスト（日本人学生）を含む充実したネットワークの形成は、留学生が日本式のソーシャルスキルの習得に役立ち、その結果、在日生活への適応に有効だと示している。しかしながら、留学生らは全般的に留学・研究生活に対する満足度は高かったものの、日本人学生とのコミュニケーションに困難を感じている者が依然として多いことが報告されている（ライアン，2014）。

ところで、ここ二十年間、PCやケータイ、特にここ数年スマートフォン（以下「スマホ」と略す）の広範囲な普及・使用が、ユーザの対人関係に大きな影響をもたらしている。例えば、小林・池田（2007，2008）は日本人の携帯メールとPCメールの使用について検討した結果、PCメールの使用は異質な他者¹とのコミュニケーションへの媒介効果があり、社会的寛容性²にポジティブな効果があることを示している。一方、携帯メールの使用はユーザの個人的ネットワークの同質性を高めるため、社会的寛容性が低いことが示されている。この意味では、日本人学生が携帯メールを利用して、留学生と緊密な社会的ネットワークを形成するのは難しいと予想される。

金（2003）は留学生のケータイ使用と社会的ネットワーク（同言語話者・異言語話者の友人数、交流頻度）の関係について検討した結果、（留学生にとって）ケータイとは、主に母語話者との通話コミュニケーションメディアとして機能している傾向が見られ、相対的に日本人とのコミュニケーションを希薄化させている可能性が示唆された。つまり、ケータイの使用は、彼らの交友関係を同言語話者に限定することを助長している可能性がある、

¹異質な他者とは、「自分と異なる考えや価値観を持っている他者」である。

²社会的寛容性とは、「自らの意見や態度と異なる情報や他者との接触」である。

と報告している。また、馬場（2010）は留学生の ICT 使用について検討した結果、日本語能力の低い留学生にとって携帯メールは使い勝手等が悪いため、それは彼らのケータイコミュニケーションへの参加の障壁となっている、と指摘している。つまり、留学生にとって、携帯電話・携帯メールの使用は、日本人学生との異文化コミュニケーションの促進に繋がらない。

近年、ケータイの機能が進化し、通話機能・SMS を含めたメール機能のみならず、インターネットアクセスも一般的になっており、「手のひらの PC」と呼ばれるスマホでは、使用言語に制限がなく、留学生は母語による入力が可能だけでなく、多くのアプリケーションやメッセージングを随時に使用することができるのも特徴の 1 つである。これらの使用は、留学生同士のコミュニケーションを活発化させるが、日本人学生との交流の促進には寄与しないと考えられる。

また、PC は依然として広範囲で利用されている。PC 使用には言語制限がなく、近年 LINE、Facebook 等のメッセージング機能が PC でも使用できるようになっている。これらの使用は、日本にいる母語話者同士だけでなく、母国などにいる親族や友人と随時交流することを可能にしている。この意味では留学生の PC 使用も日本人学生との交流を促進する可能性は低いと考えられる。

更に、Epley & Kruger (2005) は非言語的の手がかりの有無の観点から、ヨーロッパ系アメリカ人がアフリカ/アジア系アメリカ人に対する印象を形成する際、電話（音声）に比べて、PC メール（テキスト）のほうがよりステレオタイプに沿ったものになったことを示している。携帯メールは非言語的の手がかりの欠如や時間・空間の制限がない面では PC と同様である。この点においては、非言語的の手がかりのあるコミュニケーションメディアに比べて、携帯メールによる異文化コミュニケーションをする際に、よりステレオタイプに影響されやすいことも考えられる。

このように、情報化社会の進化に伴い、多様なコミュニケーションメディアが使用されており、留学生と日本人学生の異文化コミュニケーションに影響を与えている。従って、どのメディアがどの面でいかに影響を及ぼすのかを明らかにすることが非常に重要である。

石井ほか（2003）によると、異文化コミュニケーションには、①言語的・非言語的メッセージを主な検討内容とする「メッセージ中心の理論」、②対人認知、特にステレオタイプや性格特性などに関する描写がいかに対人印象形成に影響を及ぼすのかを中心とする「対人関係中心の理論」、そして③日本人の海外適応と在日留学生の異文化適応を中心とする

「異文化接触中心の理論」、及び④集団凝集性や集団圧力、集団規範などを検討対象とする「集団・組織中心の理論」の4つがある。本研究では、①メッセージ、②対人関係、及び③異文化接触、という3つの理論に基づき、それぞれ①中国人留学生の日本語によるメッセージ、②日本人学生の中国人留学生に対する印象形成、③コミュニケーションメディア使用による留学生の異文化適応状況への影響、という3側面を取り上げ検討を行う。

図1-1に本研究で取り上げる諸側面と異文化コミュニケーションの関係を示す。図1-1では日本人学生と留学生がメッセージをやり取りしている様子を太い矢印で示している。本研究での言語的メッセージは日本語としている。日本人学生の日本語メッセージが留学生の印象形成にいかに関与を及ぼすのか大津(2013, 2014)が検討を行った。大津(2013)は留学生が日本人学生の会話行動のどの側面を好意的・非好意的に評価するのか、留学生の日本語口頭能力によって日本人学生の会話行動に対する評価の仕方がどう変わるのかについて、対面による中国人留学生と日本人学生の初対面会話について分析した。その結果、中級学習者は日本人学生が面白く語るために用いる様々な表現を好意的に評価しており、一方、上級学習者は、初対面会話で話される内容を重視し、双方向からのある程度の個人情報・意見の交換を適切と考え、それを促進する行動を好意的に評価していた、という特徴の違いが見られた。また、留学生の日本語能力と関係なく、日本人学生の「会話進行への関与」が評価の焦点となり、特に日本人学生の話題関与への消極性、不適切な話題への執着、などが留学生に非好意的に評価されたと大津(2014)が明らかにしている。これらることより、留学生の日本人学生に対する印象には、日本人学生の言語的部分だけでなく、話題関与の仕方などのような非言語的部分も大きな影響を与えたと示唆された。

本研究では、留学生の日本語によるメッセージがコミュニケーションメディアによっていかに異なるのか、日本人学生の留学生に対する印象形成にどう影響を与えるかについて検討する。特に、留学生の日本語の文法的誤用と言語行動様式(発話の丁寧さと適切さ)がコミュニケーションメディアによって異なるかどうか、日本人学生の印象形成にどのような媒介効果があるのかについても検討する。

図1-1の下部には各種コミュニケーションメディアに対する日本人学生と留学生によるコミュニケーションメディア観が存在していることを示している。ユーザのコミュニケーション行動とコミュニケーションメディア観が緊密に関係しており、それらの関係を究明することは非常に重要だとされている(e.g., 岡本・高橋, 2006)。図1-1の右側には異文化適応を示している。留学生の異文化適応問題は異文化コミュニケーションの最も重要な構

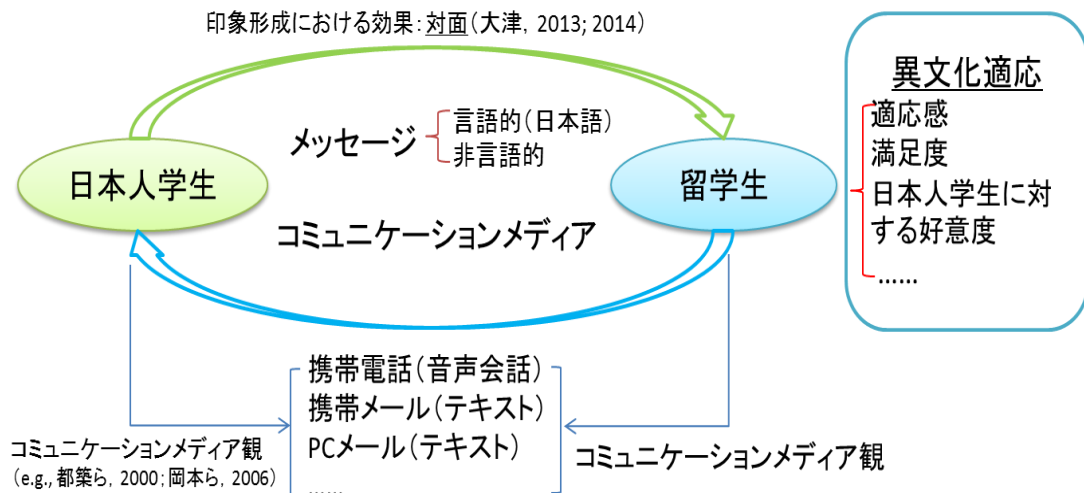


図 1-1 異文化コミュニケーションと対人印象形成・異文化適応等との関係

成部分であり（田中，2000），本研究では，留学生らの在日生活に対する適応感・満足度，及び一般的な日本人学生に対する好意度をとり上げ，コミュニケーションメディアの使用がいかに影響を及ぼすのかを検討する。

本研究の意義は，今後留学生の異文化適応状況の改善，日本人学生との異文化コミュニケーションの促進，将来的には日本社会の多文化共生社会の実現への一助とすることにあると考えられる。

1.2 本研究における理論的背景と枠組み

本節では，まず本研究における異文化コミュニケーションの定義を述べ，その過程に付随する困難点を明らかにする。そして，本研究が取り上げる，日本人学生の中国人留学生に対する印象形成，中国人留学生の日本語使用とその影響，及び留学生全般の異文化適応状況，という3側面に関する理論を整理し，全体の枠組みを示す。

1.2.1 異文化コミュニケーションの定義とその過程に付随する困難点

Rich & Ogawa (1972)は，異文化コミュニケーション（intercultural communication）を単に「異なる文化の人々間でのコミュニケーション」と定義し，ある人がある文化出身であり，もうひとりが別の文化出身である場合，そのコミュニケーションは異文化である，としている。また，Klopf & Park (1982)は，「人はメッセージを自分の文化的背景に基づいて符号化

し、それを自分の文化という枠組みで解説する」と述べ、Klopf (1998)は、異文化コミュニケーションを「異なる文化の人々間でのコミュニケーション……ある文化出身の人（もしくは人々）が別の文化の人と話す時におこる」と定義している。

従来は、比較文化的（cross-cultural）コミュニケーションと文化横断的（transcultural）コミュニケーションが異文化コミュニケーションと同義的に使用されているが、本研究では、異文化コミュニケーションの概念を上記の Klopf & Park (1982) による定義を使用する。文化間の類似性は人と人とのコミュニケーションを容易にさせるものであるが、異文化コミュニケーションにおいては、互いに異なる自文化の影響を強く受けている参加者が様々な困難を経験する活動である。石井ほか (1997) は、この異文化コミュニケーションの過程を図 1-2 のモデルで説明している。左側の円形は、日本で生まれ成長することによって日本文化を習得した鈴木氏を示し、右側の正方形は、韓国文化を背景とする韓国人の金氏である。なお、円形と正方形は、両者の文化の相違を明らかにするためのものであり、形自体は特別な意味を持たないとされている。

最初に鈴木氏は、日本文化の一部として習得した価値観・判断、思考と感情の様式、言語及び非言語記号等の影響を受けながら、自分の情報・考え・感情等を記号に変換する。その際、相手の金氏の個人特性と韓国文化の一般的特徴、2人がおかれた社会・文化コンテキスト等を考慮しながら、伝えるべき内容の取捨選択と配列を行い、同時に使用すべき言語記号と顔の表情・ジェスチャー等の非言語記号を選ばなければならない。このようにして送り出された鈴木氏のメッセージは、内容や構成・記号の面で日本文化の影響を受け

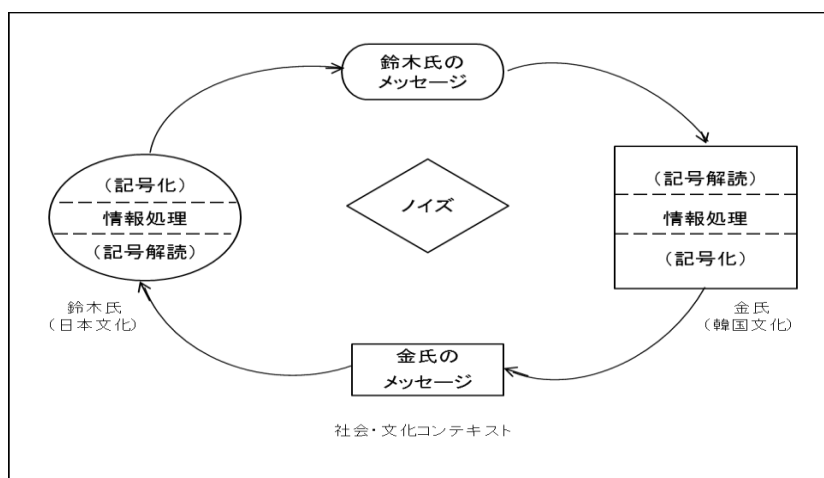


図 1-2 異文化コミュニケーション・モデル (出典：石井ほか, 1997)

ている。メッセージが楕円形になっているのは、鈴木氏のメッセージが日本文化の影響を必然的に受けていることを意味するとされている。

それに対して、金氏は、韓国文化の一部として習得した価値観・判断、思考と感情の様式、言語・非言語記号に基づいて、コンテキストとの関連で鈴木氏のメッセージを知覚し、そして記号解読をする。続けて金氏は、韓国文化の影響を受けながら、蓄積された経験や記憶を整理即ち情報処理し、鈴木氏に伝えるべき自分の情報・考え・感情を記号化しなければならない。その際に金氏は、鈴木氏が日本文化の影響を受けながら記号化活動をしたのと同様に、コンテキストを考慮しながら韓国文化に基づいて一連の記号化を進める。そして金氏のメッセージの内容・構成や記号が韓国文化の影響を受けているのは当然である。メッセージが長方形に囲まれているのは、その影響を示すためだとされている。鈴木氏は、日本社会における自分の経験と日本文化に基づいて、コンテキストを無意識に考慮しながら、金氏のメッセージを知覚そして記号解読し、整理・記憶の情報処理をする。鈴木氏と金氏の記号化と記号解読が括弧内に入れられているのは、それぞれが情報処理活動の一部とも考えられることを意味する。このようにして鈴木氏と金氏の異文化コミュニケーションは進展すると期待されるが、実際には各段階において予想と意識されないような文化の相違による種々の誤解と困難が生じるのである。

この異文化コミュニケーションの過程から、活動の各段階に文化の相違による困難点が存在し、それらが参加者には殆ど意識されないと指摘されている。そして、前述したように、参加者の文化的背景が類似し、過去の経験に共通点が多ければ多いほど、コミュニケーションは容易で相互の理解度が高い。逆に両者の文化の相違が大きい場合には、コミュニケーションに様々な誤解と困難が内在し、多大の注意と努力が必要である。

上記の理論とモデルは、対面によるコミュニケーションに基づいたものであった。現代社会において、人々は携帯メールなどの「パーソナル」なもののみならず、Facebook や Twitter のようなソーシャルメディアも盛んに使用している。これらの使用は更にユーザの対人関係、特に社会的ネットワークの構築と拡張に影響を及ぼすとされている（河井，2014）。コミュニケーションメディアの形態によって、文化背景に伴う情報処理や記号に対する知覚・解読能力が異なり、それに由来して対人関係に及ぼす影響も異なるため、異文化コミュニケーションに必要な能力も異なってくると考えられる。

1.2.2 本研究に関する理論とその枠組み

石井ほか（2003）によると、異文化コミュニケーション活動は、人類が原始的社会集団を形成して他の社会集団と接触した時に始まり、その後現在に至るまで長い歴史をもっている。特に異民族間の接触、通商、交流、紛争等が絶えず活発に展開されてきた中国、インド、中近東、そしてヨーロッパなどでは、長い歴史を通じて得られた異文化コミュニケーションに関する大量の情報と経験が蓄積されている。日本においても、古くは弥生時代以来多くの日本人は朝鮮半島や中国大陸の「先進文化」と長年にわたり接触、通商、交流、紛争等を繰り返し、加えて近世以降は西洋文化との肯定的又は否定的な関係を深めながら現在に至っている。異文化コミュニケーション活動が長い歴史をもっているのに対して、異文化コミュニケーションの体系的な研究は、第2次大戦直後にアメリカ連邦政府による戦後の対外政策の一環として始められたものであり、比較的歴史が短いと言える。

異文化コミュニケーション研究は文化をもつ極めて多面的で複雑な生物（人間）を対象にするため、心理学や言語学、社会学、社会心理学、文化人類学等学際的性格をもっている（石井ほか，2003）。異文化コミュニケーション研究は一般コミュニケーション研究の延長・応用であるため、いずれも個人内（intrapersonal）、対人間（interpersonal）、集団・組織、公的などといったレベルで行われたコミュニケーションを対象にしている。それゆえ、異文化コミュニケーションに関する主要理論も一般対人コミュニケーション研究から発展してきており、主なものは、(1) メッセージ中心の理論、(2) 対人関係中心の理論、(3) 集団・組織中心の理論、と(4) 異文化接触中心の理論、の4つである。図1-3は、4つの理論とそれぞれの代表的なものを示す。以下、4つの主要理論について概略し、本研究と最も関連する理論について説明する。

(1) **メッセージ中心の理論**について、ここの「メッセージ」とは、①人間の思考過程を通して形成され、②人間にとって意味をもたらすサインの集合であり、③人間はこの記号化されたメッセージの授受によって象徴的（サインやシンボルを用いての）相互作用を行い、互いを変化させる、という3つの条件全てを満足させなければならない。メッセージとは、「言語的メッセージ」と「非言語的メッセージ」の2つがある。この理論の代表的なものはレトリック（Rhetoric）理論、線形理論（直線型モデルと円環型モデル）と意味協応調整理論が挙げられるが、線形理論はコミュニケーションという複雑な現象の主要構成要素を特定し、それらの相互関係を説明する「モデル化」にしようとするものである。

線形理論とは、簡単な直線型モデル、円形型モデル及び螺旋型モデルなどが挙げられる。

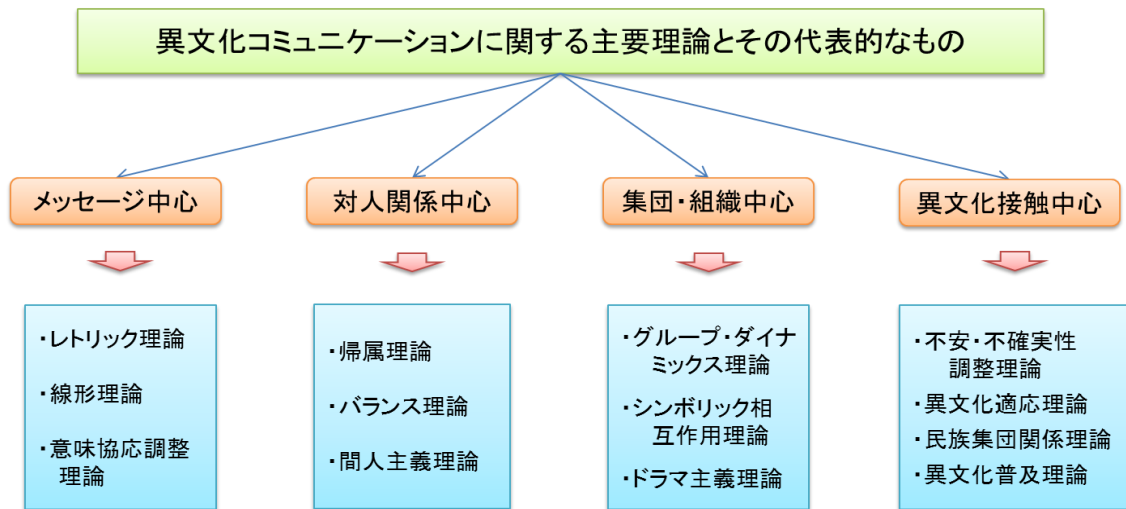


図 1-3 異文化コミュニケーションの主要理論（石井ほか（2003）に基づき筆者が作成）

直線型のモデルは、送信から受信までの「理想図」を素描したものである。円環型モデルは、対話・情報処理を行う送受信者によってメッセージが単層的・連続的に順序だてて交換される構図を描いており、コミュニケーションの双方向性を示唆した点で研究史上の意義が大きいとされている。実際に、図 1-2 に示す異文化コミュニケーション・モデルはこの円環型モデルから発展したものである。螺旋型モデルは空間性と時間性の両方がコミュニケーションに存在することを示したが、3 次元的理想化された空間世界すなわち「理想図」であり、現実の複雑な現象を記述したものではないとされている。

(2) **対人関係中心の理論**について、2人が直接に対面して意味を伝え合う対人コミュニケーションの前提は対人関係である。他者とのかかわりで最初に意識することは相手がどんな人物で、いかなるパーソナリティ特性をもっているかなどで、これらを対人認知という。対人認知に利用される情報としては視覚的外見・行動、言語使用、それに対する評価、相手の行動的・感情的反応などがある。このようなものは「スキーマ」と呼ばれ、特にステレオタイプの影響と性格特性に関する知識（記述）が影響を及ぼすとされている。そして、人々は様々な手がかりを用いて相手に対する印象を形成し、対人関係を築いていく。対人関係中心理論の代表的なものとして、「帰属理論」「バランス理論」と「間人主義理論」があり、対人認知（印象形成）と最も関連するのは「帰属理論」である。

帰属理論とは、人が様々な出来事、あるいは、自己や他者の行為について、その原因を推論し、特定の判断に達する過程を指す。また、ハイダーなど多くの研究者が明らかにしているように、人々が他者に対しては内的帰属を、自己については外的帰属を行いやすい

という帰属バイアスがある。例えば、「会議に遅れた」ということに対して、遅れたのが他者であった場合はその人の性格のためだと理由づけ、遅れたのが自己である場合は道が込んでいたなどの外的理由のためと考える傾向がある。これは異文化背景をもつ他者に対してはより起こりやすいと考えられる。

(3) **集団・組織中心の理論**について、主に社会学や社会心理学で研究されてきたが、1970年代以降、スピーチ・コミュニケーション研究者らが注意を払い始めた。コミュニケーション学における「集団」の定義は以下の4つをすべて含める：①メンバー間の相互的なコミュニケーションが豊富で、②メンバー各自が少なくとも1つの役割をもち、③コンフリクト行動と規範的行動がバランスよく配合され、④十分な統一性を保つ。

「組織」とは、コミュニケーション学では、「組織活動」(organizing)として捉え、基本的な考えとして、いかなる組織においても、人々は、その行動が連結された形で活動する。つまり、ある人の行動は別の人の行動に随伴するものであり、その積み重ねによって組織活動が行われる。この理論の代表的なものは、グループ・ダイナミックス理論、シンボリック相互作用理論、及びドラマ主義理論がある。

(4) **異文化接触中心の理論**について、まず「文化」とは、端的に述べると、人間がものごとの解釈や行動において拠り所となる「判断基準」であり、それらは個々の状況で暗黙に了解されていることであり、法律のように文章で記されているわけではない。つまり、文化は特定の状況に対して人々が殆ど無意識に使う「暗黙のルール」であり、生活上の諸問題の解決に向かう行動において「司令塔」の役割を果たしている。この視点からみれば、人々がコミュニケーション行動に従事する時に、その行動は文化によって大きな影響を受け、また、文化は日常のコミュニケーション行動を限りなく繰り返し、その集積結果として生まれたものだとされている。つまり、文化とコミュニケーションには密接な関連があることが推測される。

異文化接触が起こるのは、時代の政治的・経済的な条件が背景にあることが多いが、当事者である個人が異文化圏で直面する心理的反応の問題は、カルチャーショックや適応/不適応の問題として1960年代以降、多くの分野で検討されてきた。この理論の代表的なものは①不安・不確実性調整理論、②異文化適応理論、③民族集団関係理論、及び④異文化普及理論などが挙げられるが、日本では最も検討されているのは異文化適応理論と言っても過言ではない。

異文化適応 (intercultural adaptation) 理論について、これまでは主として海外からアメリ

かにやってきた人々、たとえば移民や難民、留学生、ビジネスマンなどがアメリカ社会でどのような過程を経て適応しているのか、その適応にどのような要因がかかわっているかを説明しようとするものである。この理論は主として心理的適応過程と社会的・文化的な適応過程の2つがあり、前者はカルチャーショック、後者は社会環境、個人の態度・性格・コミュニケーションなどが影響を及ぼすとされている。カルチャーショックとは、端的に言えば、人が「異文化環境に入った時に受けた衝撃」であり、「生活のあらゆる面であらゆる拒絶反応」であるとされている。しかし、これらは常に否定的な意味合いをもつとは限らず、人は様々な経験を経て、異文化理解や自文化理解が可能になり、それと共に自己の経験する諸現象を文化相対的に見ることができるようになるとされている。また、長期的な異文化適応のプロセスとして、初期の適応、葛藤期、再適応の段階があるとするU字型曲線、およびその延長線で、自文化への復帰時に再び危機が訪れ、やがて回復するというW字型曲線などの適応曲線があるとされていたが、未だに完全に実証されたわけではない。

以上、異文化コミュニケーションに関する4つの主要理論及びそれぞれの代表的なものについて述べてきたが、これらは明確に分けられるものではなく、互いに緊密に関係していると考えられる。例えば、メッセージ中心理論の核となる「メッセージ」（言語的・非言語的）の使用が、対人関係中心の理論の対人印象形成、集団・組織中心の理論にあるメンバーたちとの関係にも影響すると思われる。また、異文化接触中心の理論の1つである異文化適応理論においても、個人と他者の関係は多様でダイナミックなものであり、個人内要因や、置かれた環境だけでなく、社会的ネットワークの形成は対人関係、集団・組織のメンバーたちとも深く関係すると考えられる。この観点から、本研究では主として、メッセージ中心の理論、対人関係中心の理論、及び異文化接触中心の理論に基づき、「留学生の日本語使用」、「日本人学生の留学生に対する印象形成」及び「留学生の異文化適応状況」という3つの側面を取り上げ、検討を行う。

また、前述した理論は殆どアメリカで開発・発表されたものであるため、近年、以下の面で問題視されている（石井ほか、2003）。

①これまでの理論がいわゆる白人主流文化の個人主義と実証主義の価値観に基づいたもので、普遍的ではない。

②PC やケータイに代表される新しいメディアによるコミュニケーションの急激な変化をどの程度に考慮しているか。

③これまでの理論開発に必要な新しい思考の枠組み即ちパラダイムが喪失しているため

に、今後は主に東洋文化に基づく理論研究上の貢献が不可欠だ。

これらのことより、異文化コミュニケーションに関する検討では、東洋文化の視点を含め、PCやケータイなどのメディア使用の影響を検討する必要性が示唆されている。

以上の諸理論を踏まえて、本研究では以下のような側面から取り上げ、検討を行う。

(1) 留学生の日本語によるメッセージが、コミュニケーションメディアによって異なるかどうか。日本人学生との異文化コミュニケーションにどのように影響を及ぼすのか。

(2) 日本人学生の留学生に対する印象形成が、使用するコミュニケーションメディアによって異なるかどうか。特に先行情報として提示された外集団に対するステレオタイプが存在する場合、その影響がコミュニケーションメディアによって異なるかどうか。

(3) 留学生らの様々なコミュニケーションメディアの使用が、どのように在日生活における異文化適応状況に影響を及ぼすのか。

本研究は、日本にいる留学生を対象に、彼らのコミュニケーションメディア使用が、日本人学生との異文化コミュニケーションにおける影響を明らかにするものであり、また、日本にいる留学生の9割以上がアジア系であるため、アジア系文化という視点も加えられ、今後当該分野における新しい理論の構築に貢献できると考えられる。

1.3 コミュニケーションとメディアに関する先行研究

本節ではコミュニケーションとメディア、そして、時代の変遷に伴うコミュニケーションメディアの変化、とりわけ携帯メールの使用がユーザの対人関係に及ぼす影響、及びコミュニケーション行動を規定する心理的要因であるコミュニケーションメディア観について述べる。そのうえ、留学生のコミュニケーションメディア使用と社会的ネットワーク・異文化適応に関する先行研究をレビューし、諸問題点を明らかにする。

1.3.1 コミュニケーションとメディア

コミュニケーションを行うには、何らかの関係を持った複数の当事者が、場を共有して、その場で使用可能なチャンネル³を用いなければならない。対人コミュニケーションの構造

³ チャンネルとは、メッセージが通過する経路としての感覚器官のことである。例えば、対面によるコミュニケーションは、①音声的一聴覚的チャンネル、②身振りの一視覚的チャンネル、③化学的一嗅覚的チャンネル、④皮膚感覚的一触覚的チャンネルといった複数のチャンネルが同時に使用される（深田，2007. p.21）。

は、送り手と受け手である個人的要因と使用可能なメディア、対人関係や目標等を含めた場面としての状況の要因とに分けられる（図 1-4、大坊，1993）。

対面場面では、言語的、非言語的手段を自発的に使用可能であるのに対して、ビデオ通話やテレビ会議など以外の非対面場面では、非言語的の手がかりを用いることはできず、さらに加えられる条件によって身体動作や音声手段の制約がある。このことは、異なるメデ

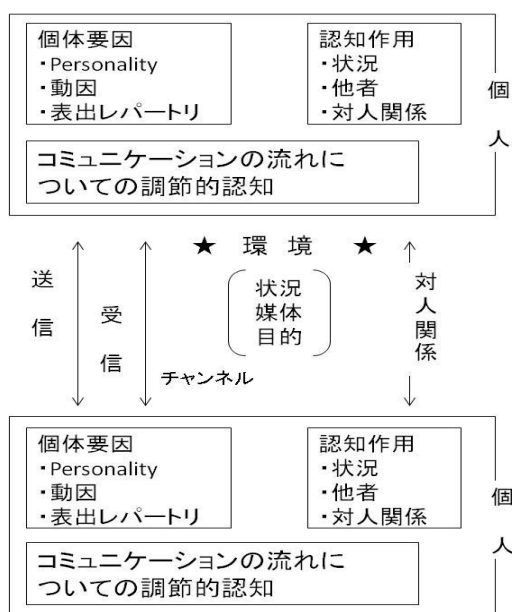


図 1-4 コミュニケーションとメディアに関するモデル（出典：大坊，1993）

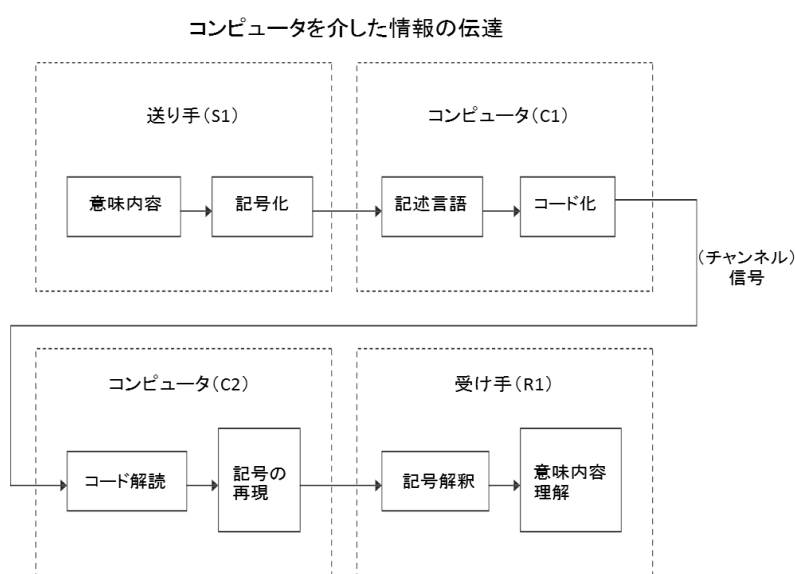


図 1-5 CMC によるコミュニケーション・モデル（出典：Dai，2003）

ィアによって相互作用の様式、機能、伝達結果が異なることを示している（大坊，1993）。

例えば，PC を介した情報を伝達した場合（図 1-5），送り手からのメッセージが記号化され，PC でコード化された後そのコードの解読が求められ，記号が再現できた後記号として解釈され，受け手による意味内容の理解が初めてできるというプロセスである。現実には，PC 等を利用しての異文化コミュニケーションは，このようなプロセスが図 1-2 に示した異文化コミュニケーションのモデルと相まったものであり，非言語的手がかりの有無・対人関係の親密度・地理的距離に加え，送り手の意図する意味内容は受け手によって記号に対する解釈や意味内容の理解が異なると考えられる。この意味では，様々なメディアを用いた異文化コミュニケーションの本当の困難点はここにあると言える。

1.3.2 時代の変遷に伴うコミュニケーションメディアの変化

オング（1991）はメディア史を振り返り，「文字の文化」と「声の文化」について考察し，中世から近代にかけて成立した「一次的な文字の文化」を基盤にした「二次的な声の文化」の存在を指摘した。オングは，対面コミュニケーションを「一次的な声の文化」（primary oral culture，つまり，まったく書くことを知らない文化）とし，手紙や新聞などを「一次的な文字の文化」（所謂紙ベースの書きことば）と考えている。そして，固定電話，テレビ，ラジオ等のような，機械を介して聞こえる音声を「二次的な音声の文化」として挙げており，「一次的な声の文化」とは一線を画している，と述べている。松下（2012）はこの様な捉え方に基づき，ケータイ・メール⁴は「二次的な声の文化」を前提としたうえで成立した「二次的な文字の文化」と位置付けることができるとしている（表 1-1）。

ケータイは過去二十数年ほどの間にビジネスマンを中心に次第に利用度が上昇してきた（三宅，2000；中村，2001a）。ケータイが注目されはじめたのは前世紀 90 年代の半ばからで，それに関する研究が盛んに行われてきたのはここ十五年間ほどである。中村（2001a）によると，ケータイは 1979 年に自動車電話の形でスタートしたが，急速に普及してきたのは 1995 年以降である。その要因としては，1995 年以降，ケータイのコスト（売り切り制の導入），中でも利用開始時にかかる費用が急激に減少したことに加え，文字メッセージもできるようになったことが挙げられている（三宅，2000）。また，ケータイは災害や事故など

⁴ 松下（2012）では，スマホも含めてケータイと称したが，本研究では，スマホとケータイの違いを含め，機能によって区別している。

表 1-1 時代によるメディアの展開（出典：松下（2012））

時代区分	口承・手書き 文字時代 (中世以前)	印刷時代 (中世～近代)	アナログ・メ ディア時代 (19～20世紀)	デジタル・メ ディア時代 (20～21世紀)
分類	一次的な 声の文化	一次的な 文字の文化	二次的な声 の文化	二次的な文字 の文化
対人コミュニケーションの具体例	対 面	手 紙	電 話	ケータイ・メール

いざという時に役に立つという期待感も増加したことから普及が進んだ。それゆえ、1995年という年は、ケータイの歴史上には重要な意味を持つとされている（中村，1997）。

ケータイの普及段階について、中村（2001b）は「業務期」（1979～1995年）、「パーソナル期」（1995～1999年）、「高度利用期」（1999以降）と呼んでいる。ケータイ利用の初期は業務用が中心で、会社幹部・専門職・職人などが中心的利用者層であった。そして、第二のパーソナル期では、中年会社員の利用も多かったが、若年層が利用者として増え始めた。このときの利用は主として私用電話となり、機器の特徴としては小型化し、ストラップや着メロなどアクセサリ化・ガジェット化が進んだ。公共の場での利用が迷惑だとする「悪者イメージ」が定着した時代である。更に、1999年2月にNTTドコモがiモードサービスを開始して以来、ケータイは高度利用期に入った。このときから、電子メールや各種のネットサービスが可能となり、ケータイはもはや音声の会話機ではなくなったのである。新サービスの利用は若者が中心であったが、ケータイ利用者自体は老若男女一般に広がっていった。その意味では大衆化の側面もあった。そして、ケータイはIT革命の中心として経済界で騒がれるようになった（中村 2001b, p.52）。それゆえ、この3段階において、様々な社会的反応が出てきており、ケータイがもたらす影響も議論されている。

ケータイが人々のコミュニケーションをどう変えたかについて、三宅（2000）は以下のようにまとめている：

第一に、ケータイは、従来の固定電話にあった話し手の行動範囲の制限を開放し、モバイルであることで、「いつでも」「どこでも」コミュニケーションできる環境を作り出した。

第二に、一人が一台使うパーソナル所有物であることで、目的の人物と即座につながる「誰にでも」のコミュニケーションを可能にした。

第三に、親しい友人と、異なる空間にしながら、ケータイで精神的空間を共有できることは、相互の親密度や共感を高めることにつながる。ケータイが個人使用であるため、密

室の対話と類似した空間を実現することができ、コミュニケーションの深まりとして捉えることができるかもしれない。ただし、逆に、ケータイを使うことで、物理的な空間を共有する人たちとのコミュニケーションが同様に深まるかどうかについては疑問が残る。

第四に、ケータイを通して、ケータイの利便性を利用するだけでなく、創造的な言語的工夫や表現豊かなコミュニケーションも展開している。

ケータイは携帯電話として電話の延長線にあるメディアにもかかわらず、ケータイ利用においてはメールの方がそれ以上に使われている。それは、通話は公共空間において互いに相手の振る舞いに関心を示さない「儀礼的無関心」や「不関与の規範」を乱すものとして特に日本においては忌避されるが、メールは着信音さえ消してしまえば、公共空間の規範を乱すものではない（松下，2012）。こうした特徴は、メール・コミュニケーションに矛盾した性格を与えることとなった。すなわち、メールは後であるいは選択的に見たり、返信したりすることができるなど非同期性が高い一方、着信音やボタン音を消してしまえば完全に無音になるため、声を発せる通話が問題となるような公共空間においてもリアルタイムな、同期性の高いコミュニケーションメディアとして利用可能である。

日本人がメールによるコミュニケーションを好んだのは、ケータイが登場するずっと以前から始まった（松下，2012；三宅，2000）。例えば1980年代半ばから90年代にかけて広がっていたPC通信、ポケベル、PHS、ファックス等様々なメディアによる文字コミュニケーションの系譜上にあると言える。

ところで、日本では2008年7月半ばにiPhone 3Gが発売され、それ以降スマホの普及率が急速に上昇し、各年齢層の間に高い人気を呼んでいる。例えば、総務省の調査結果によると、2010年末、スマホの世代普及率は1割であったが、2012年末は5割になっている（総務省，2013）。スマホの普及率増加傾向は今後も続くと思込まれている。

ケータイとスマホの違いについて、藤川（2012）は「ケータイが電話機から発展したものであるのに対して、スマホがパソコンから発展したものであるという点にある」としている。それゆえ、両者は使用できる機能や操作方法等において多くの相違点が存在する。例えば、ケータイと同様に、キャリアメールを使用するだけでなく、google, yahoo, hotmailなどのウェブサイトにも自由アクセスし、FacebookやTwitterに随時参加し、LINEやFacetimeを自由に使用することもできる。この意味では、スマホは、従来の携帯メール・携帯電話使用にある「パーソナル」な面と、PC等を介しての「ソーシャル」コミュニティ参加という2つの面を同時に兼ねて、「パーソナル」なコミュニケーションメディアと「ソーシャル」

メディアとの間の境界線を曖昧にしたと言える。このような異なる特徴から、PCやケータイに比べて、スマホの使用は留学生の対人コミュニケーションにも大きな影響を与えると考えられる。例えば、留学生らはスマホメールに加え、SkypeやLINE、Facebookのチャット機能を利用して、日本国内の友人や、母国にいる家族や友人と母語によるコミュニケーションが随時にできるだけだけでなく、緊急性に応じて、SkypeやLINE、Facetimeの通話機能を使用することもできる。これらの使用は、留学生らの在日生活における不安や孤独感がある程度低減することができると思われる。同時に、FacebookやTwitterなどのソーシャルメディアも随時に利用し、コミュニティの一員として参加し、情報収集・情報発信することができるだけでなく、日本人学生を含めた多くの他者と社会的ネットワークを形成・維持することもできる。このように、コミュニケーションメディアの機能が変化することにより、その使用が留学生の対人コミュニケーション、異文化適応に及ぼす影響も検討すべきだと考えられる。

本項では、ケータイを中心に、PC・スマホの機能を時代の変遷と共に見てきた。次項では、本論文と最も関連する「携帯メール」を中心に、その使用がいかによりユーザの対人関係に影響を及ぼすのか、日本人を対象にした先行研究をレビューしていく。本研究は主として留学生を対象とするが、これまで留学生のケータイ特に携帯メールに関する検討が少ないため、日本人を対象にしたこれまでの知見が本研究の参考になると考えられる。

1.3.3 携帯メールの使用がもたらす影響

コミュニケーションメディアが対人関係に果たす役割を探る試みには、CMCの特徴や効果を調べる研究系譜と、メディアの利用適性や効用を調べる研究系譜があるとされている。前者は「効果研究」、後者は「メディア選択研究」と呼ばれる（小寺，2012）。

日本では、この2つの視点から最もよく取り上げられ、検討されてきたコミュニケーションメディアは携帯メールだと言っても過言ではない。中村（2001a）によると、現在、携帯メールの用途としては、用件連絡、現状報告、感情表出、相談、身の回りの話題、一般的话题、チェーンメールであるとしている。そして、携帯メールの内容としては、①音声に比べてメールでは、おしゃべり的な内容、すなわちコンサマリー（自己従足性）な内容が多い、②待ち合わせなどの用件伝達に用いられる、といったものである。また、三宅（2001）はポケベルと携帯メール、携帯電話を取り上げ、方向性、着信の即時性、送信の同期性、

記録性、距離感、密接性、拘束性、通信の長さなどの面から比較した。その結果、携帯メールの特性がポケベルに近く、音声の携帯電話に比べてコミュニケーション上不備な点が多いように見えるが、それにもかかわらず、利用が増えているのは、文字メディアが若者にとって快適な何らかの要素を備えているからであるとしている。この「何らかの要素」とは、近況報告やとりとめない話をする「気軽さ」と、自分や相手の場所や都合に左右されないという「便利性」（密室性とも関係する）などが挙げられている。更に、若者の携帯メール利用の背景には、「会話に際しての配慮」と「対人距離のとり方」という2つのコミュニケーション上の特徴があるとされている。この2つは有機的につながっており、現代日本の人間関係の難しさへと収斂しているのではないかと指摘されている。そういう意味では、携帯メールの多用が日本人には必然なことだと言えるだろう。

携帯メールは非言語的の手がかりが少ないため、人々は文字だけでなく、絵文字や顔文字も常に使用している。その使用について、ポジティブな効果とネガティブの効果があるとされ、それぞれは以下のようにまとめる。

まず、ポジティブな効果については、加藤ほか（2006a；2006b）、荒川・鈴木（2004）、高橋ほか（2005）、Katoほか（2008）などが挙げられる。加藤ほか（2006a）は携帯メールを使ったコミュニケーションにおける感情について、2つの調査を行い検討した。その結果、教師を送信相手とする場合、丁寧語や敬語を用い、誠実さを大事にするのに対して、友人を送信相手とする場合は、話しことばで顔文字を用いるなど親しみを大切にする可能性が示された。そして、逆にそれぞれの立場から届いた携帯メールに対して生じた感情について、教師の送信した携帯メールでは、誠実さが示されており、友人の送信した携帯メールでは、親しみが示され、受信者はよりポジティブな感情を高めて、より不快な感情を抑えられることが示唆された。

荒川・鈴木（2004）は28人の女子短大生を対象に、顔文字の感情価を実験で検討した結果、謝罪のしぐさの絵文字がある方が、顔文字なしのものと比べて、受け手の怒りが有意に治まっていた。このことから、顔文字が単に感情の表出にとどまらず、相手の感情を変えるのに意味があると荒川・鈴木が言っている。

高橋ほか（2005）は携帯メールにおける送り手の顔文字が受け手の不安にどう影響を及ぼすか、大学生及び院生を対象に検討を行った。その結果、送り手の絵文字付与が受け手の不安状態を低減したことが見られ、この効果は特に特性不安高群の女性には著しかった。また、顔文字なしのメールが特性不安低群の男性に効果を及ぼしたことも見られた。これ

らのことから、携帯メールにおける顔文字の有無による効果は受け手の性別とパーソナリティ（特性不安）によって異なるかもしれないとされている。そのほか、顔文字の使用は相手との親しさによって異なることも明らかになった（Kato et al., 2008）。

携帯メールは顔文字以外に、文字数によって相手に対する感情の帰属も異なったことが明らかになっている。加藤ほか（2006b）は携帯メールにおける顔文字の有無、及び短文・長文の効果について調査を行った結果、顔文字の有無以上に短文で書かれた携帯メールの場合、受け手は「悲しみ」や「怒り」をより感じ、「嬉しさ」をより抑える傾向があり、短文かどうかの要因が感情により影響を持つことが示唆されたとしている。

一方、ネガティブな効果について、中丸（2002）は絵文字が文章の信頼度・感情度・評価度に及ぼす影響を評定尺度法で検討した結果、文章と顔文字の意味が不一致の場合には誤解を生じさせる可能性が高く、不一致の組み合わせを用いる場合には、相手との関係を考慮して使用する必要がある、と指摘している。

五十嵐・糸井（2004）は絵文字の有無、及び受け手の身分が絵文字・顔文字の使用に影響を与えるかどうかを質問紙法で検討した。その結果、①携帯メールの絵文字・顔文字は謝罪の場面においても使用されているが、「絵文字は謝罪メールにふさわしくない」という多数の意見から、日常的には多く使わないだろうと指摘している。②教員宛と友人宛のメールでの絵文字使用状況には歴然とした差があり、相手によって絵文字を使い分けていることがわかった。③絵文字に与えられるメッセージは送信者、受信者によって異なることがわかった。これらの結果から、感情や誠意の伝え方、解釈の違いがあるため、状況によっては誤解を生む原因となってしまうと指摘している。

このように、携帯メールが対人関係に及ぼす影響は絵文字・顔文字の使用から、短文・長文の効果まで広まっている。こういった影響は、他のコミュニケーションメディアと比べて、携帯メールは非言語的の手がかりがないという性質に由来するとされている。なぜならば、非言語的の手がかりが少ないため、どう解釈するかは受け手のおかれた状況やメールのやり取りをする人との関係などによって異なるだけでなく、携帯メールの使用自体に対する受け止め方もそれと関係しているからである。

日本人学生の携帯メール使用が対人関係、特に友人関係に及ぼす影響に関する研究が盛んに行われてきた。メール依存（木村，2002）、携帯メール中毒（甘佐ら，2004）、つながり不安（辻，2006）など、様々な表現が使われている。それに関連して、虚構的な心理状態がつながり不安や中毒の原因となり、また、虚構的になったのは、携帯メールの受け止

め方は人によって大きく異なっていることにあるとも言える。ここでは携帯メールのこの性質に由来して、様々な対人関係に及ぼす影響を以下のように整理する。

まず、この虚構的心理状態が友人関係との深さに影響を及ぼすことがある。例えば、尾上（2007）は110名の女子大学生を対象に、携帯メールの使用と友人関係、自己隠蔽の程度について質問紙法で検討した。その結果、多くの女子学生が携帯メール（SMSも含め）を積極的に利用し、新たな出会いにも繋げていることが明らかになった。それは対人関係を広げる役割を持っていることを示唆しているとされている。また、学校生活における友人関係よりも、学校以外の友人関係の方が人数も多く、友人に対する信頼度も高かったが、自己隠蔽傾向の高い人ほど携帯メールの使用時間が長く、自己開示に関するリスクを感じる人ほど友人と一緒に過ごす時間を大切に感じない傾向があったことも明らかになった。

若年層の社会化過程における携帯メール利用の効果について、パーソナル・ネットワークの同質性・異質性と社会的寛容性に注目して研究がなされている。小林・池田（2007）は高校生を対象に検討した結果、携帯メールの利用が個人のネットワークに同質性を高めるポジティブな効果があり、異質性にはネガティブな効果があることを明らかにしている。このようなことは逆に他者に対する社会的寛容性にネガティブな効果をもたらすと示された。すなわち、携帯メールの利用が学生に自分と同質な人をコミュニケーション相手として選択させ、その結果、彼らのパーソナル・ネットワークに同質性バイアスをもたらし、このバイアスは、自分と異なった他者との接触するチャンスを低減するため、社会化過程における社会的寛容性の醸成にネガティブな効果になることが示された。

以上のように、携帯メールの利用がネガティブな影響が多いようであるが、ポジティブな効果もあることがいくつか示されている。例えば、川浦ほか（2004）は12名の参加者を対象に、携帯メールによるメーリングリストを用いて在宅介護者の自助グループを構成し、コミュニケーション過程の分析を行った。その結果、「サポート提供」と「自己開示」を主体とするグループⅠと、「自己開示」中心のグループⅡの間に、デモグラフィック属性と心理的特性にほとんど差がなかったが、メールの内容にはグループによる差が見られた。すなわち、グループⅡが当事者に対して自己開示したことにより、自助サポートが得られた、ということである。

以上は携帯メールの顔文字・絵文字を含めて、その使用の対人関係に及ぼす様々な影響を述べたが、以下は非言語的の手がかりの有無という観点から、対面・携帯電話・PCメールとの比較で得られた知見を見ていく。

非言語的手がかりが最も豊かな「対面」によるコミュニケーションとの相違点は社会的ネットワークの構成や孤独感の低減効果などが挙げられる。例えば、北村（2005）は大学生を対象に検討した結果、対面と比べて、携帯メールによる社会的ネットワークのサイズと孤独感の相関関係が弱かった。しかし、社交性の高い人には、対面による社会的ネットワークのサイズが孤独感の低減に有効であるのに対して、社交性の低い人にはそういう効果が見られなかった。逆に、社交性の低い人には、孤独感が高ければ高いほど携帯メールによる社会的ネットワークのサイズが大きかったが、社交性の高い人にはそういった効果は認められなかった。これらの結果から、孤独感には社交性と社会的ネットワークの交互作用が示されたと言える。

古谷ほか（2005）は 102 名の学生を対象に、親密度の増大・減少によって対面と携帯メールの自己開示がどのように増大・減少するかという点と、対面とメールの自己開示がどのようなプロセスでその後の親密度の知覚と関連を持つかという点を縦断調査で検討し、その結果、親密度が高くなると、対面では将来の目標や悩み事に関する開示が増加するのに対して、携帯メールではうわさ話が増加した。一方、親密度が変化しない、もしくは下がっても、携帯メールの開示量は変化しなかった。更にパス解析の結果から、対面での開示が行われることが前提となって、携帯メールによる自己開示を多く行うほど、親密度が高くなった。これらのことから、携帯メールは①相手との最低限の関係を維持し、②対面の開示が土台となって親密度に影響を及ぼすという可能性を示したとされている。

洞澤（2005）は 105 名の大学生を対象に、①対面と携帯メールによるコミュニケーション空間はどのような関係にあるのか、②携帯メールに見られる「表出的コミュニケーション」とはどのようなものなのか、の 2 点について質問紙法で検討を行い、実際被調査者の送受信したメールを分析した。「メール空間」と「対面空間」の関係性について、論理的には「一部重複型」、「完全一致型」、「内包型」（メール空間が対面空間の中に内包される）、「逆内包型」（対面空間がメール空間に内包される）、及び「分離型」（メル友）という 5 つがあると想定されたが、分析した結果、「逆内包型」は存在していなく、「分離型」はわずか 1 人だったことが明らかになった。「逆内包型」が存在しない理由としては、メール空間は対面空間の一部より親密な相手によって構成される特別なコミュニケーション空間であるからだと指摘している。また、若者の携帯メールの「表出的コミュニケーション」は大きく 4 つの特徴があるとしている。すなわち、a. 一日の出来事の報告；b. 現状報告；c. 意味のない問い合わせ；d. 遊戯性のあるものである。

その他、隅田・島谷（2008）は思春期の女子学生 323 名を対象に、グループの友人への欲求及び対面の友人関係との関連から、携帯メールがどう影響を及ぼすかを質問紙法で検討した。その結果、①84.2%の学生がケータイを所持しており、グループの友人と携帯メールのやりとりをした、②友人に携帯メールを送った時、対面時のグループメンバーとの関係及び彼らはメールの内容によって不安や楽しさを経験した、③携帯メールを通じて形成した個々人の関係がグループにいる対面の友人関係とリンクされている。彼らの行動は親密関係行動と最も解釈されると示されている。

上記のような、携帯メールと対面以外、携帯電話との比較もしばしば行われている。例えば、北村（2006）は丁寧さの観点から、対面、携帯電話・携帯メールという 3 つのコミュニケーションメディアを取り上げ、要求の伝達においてどう異なるかについて 2 つの研究を行い検討を行った。その結果、①最も丁寧だと評定されたのは対面コミュニケーションで、最も丁寧ではないと評定されたのは携帯メールであり、②要求の伝達における手段の選択は相手の年齢が影響を及ぼすことが示された。これらの結果から、対人コミュニケーションメディアの選択において、コミュニケーションメディアの象徴的意味を考慮する重要性が示されたとしている。

児玉ら（2004）は対面、携帯電話、携帯メールという 3 つのコミュニケーションメディアを取り上げ、それぞれ相手との親密度によって自己開示にどう影響を及ぼすかを実験で検討した。その結果、コミュニケーションメディアの種類を問わず、高親密度条件の方が低親密度条件に比べて自己開示量が最も多かった。そして、高親密度条件では、対面条件において自己開示が最も多かった。しかし、低親密度条件では、高親密度条件と同様に、対面条件で自己開示量が最も多かった。これらのことから、相手への自己開示量は親密度と関係なく、対面条件が最も行いやすいことが示された。

上記の研究から、非言語的手がかりが最も豊かなコミュニケーションメディアである対面、及びそれに次いだ聴覚のみの携帯電話と比べて（スマホが普及される以前のものであったため）、非言語的手がかりが最も少ない携帯メールは孤独感の低減、友人への自己開示と親密度の関係、グループメンバーの構成、コミュニケーションメディアの選択などの面において異なっていたことが明らかになった。これらのことから、ケータイの 2 つの側面である携帯メールと携帯電話が様々な面において異なる性質を持っており、対人関係に及ぼす影響も異なることが窺えた。

対面や携帯電話のような非言語的手がかりのあるコミュニケーションメディアのみなら

ず、非言語的手がかりの少ない従来の CMC との比較も、携帯メールに関する研究の一部である。例えば、最もよく取り上げられているのは PC インターネット・PC メールである。まず、携帯メールと PC メールの使用状況について、若者は前者の使用頻度が後者より随分高いとされている（橋元，2001；田中，2001）。そして、携帯メールと PC メールとは、親密度や中身などの面においても異なっていると田中（2001）は明らかにしている。例えば、ケータイとパソコンのいずれが「手紙・ハガキ」と似ているとされたが、PC メールは「手紙・ハガキ」と似ており、携帯メールは「メモ」に似ているという結果になった。そのため、携帯メールが気軽に送受信でき、より親密な関係になりやすいという結果になった。

Kato ら(2008) は携帯メールと PC メールを取り上げ、返信速度や文の長さが受信者の怒りに影響を及ぼすかどうかを比較、分析している。その結果、PCメールの返事が遅れてもあまり怒りを感じなかったが、携帯メールの場合は返事が遅れると怒りがより喚起された。そのほか、感情などを含めたメールと比べて、短い文で構成されたメールの方がより悲しく、怒りっぽい感情を起こしたことも明らかになった。これらの結果から、同じ CMC としての PC メールと携帯メールでも、返信時間の遅れに対する受信者の態度が異なることや、テキストによるコミュニケーションにおいて、短いメールが感情に強い影響を及ぼすことが示されたとしている。

吉澤（2006）は PC メール、携帯メールを取り上げ、ソーシャルスキルとの関連から検討を行っている。吉澤は、ソーシャルスキルの高低が PC メール、携帯メールの適切な使い分け、及び公共の場での節度ある使用などについて、134 名の高校生を対象に質問紙調査を行った。その結果、ソーシャルスキルの高い高校生は対面と PC メール、携帯メールを適度に使い分けることが示されたが、相手からのメールが返ってこないことに対する不安感については、ソーシャルスキルの高低によって差が見られなかった。また、公共の場でのケータイ利用については、ソーシャルスキルの低い高校生が映画館の中では電源を切る傾向が高いことが示唆された。このような結果から、今後、情報教育の課題としては、道徳教育などのみならず、規範意識とコミュニケーションをどう取り扱うべきかを検討すべきと指摘している。

その他、佐々木・石川（2006）は PC メールと携帯メールで作成されたレポートの文章を取り上げ、比較をしたところ、PC とケータイでは固有の機能上の特徴からキー入力操作や遂行に違いが生じ、それが端的さや理解しやすさなど文章・文脈スタイルに影響していることなどが分かった。

さらに、PC メールと携帯メールの利用が社会的寛容性に及ぼす影響、特に異質な他者とのコミュニケーションの媒介効果に注目し比較する研究も見られている。小林・池田 (2008) は山梨県で 20~65 歳の人々を対象に、二段階確率比例抽出法によるランダムサンプリング留置調査を行った。その結果、携帯メールと比べて、PC メールの利用が異質な他者とのコミュニケーションの媒介効果を有するため、社会的寛容性にはポジティブな効果が見られた。また、携帯メールの交換は同質な他者に限っているのに対して、PC メールは通信した際、態度や考え方を共感するための長いメッセージを送受信することができるので、異質な他者とのコミュニケーションを促進することもできる。これらのことから、技術的な面では互換性の高い PC メール利用と携帯メール利用は、対人環境の同質性・異質性に対しては逆の効果をもたらす、それが結果的に社会的寛容性に対して対照的な効果をもたらすことが示唆されたと小林・池田 (2008) は指摘している。

上記の先行研究は様々な角度から論じているが、それらを整理してみると、以下の点が見てとれる：

(1) 対面や携帯電話などのような非言語的の手がかりのあるコミュニケーションメディアに比べて、社会的ネットワークと孤独感の低減、友人への自己開示量と親密度の関係、などにおいては異なる性質を持っている。例えば、社交性の高い人には対面による社会的ネットワークが孤独感の低減に効果があるが、社交性の低い人には携帯メールによる社会的ネットワークが孤独感の低減に有効であった。また、相手への自己開示量は親密度と関係なく、対面によるコミュニケーションが前提となっている。

(2) 同じ CMC としての PC メールに比べて、携帯メールは異質な他者に対する社会的寛容性が低く、文章表現が短く、相手に対する返信が遅れると怒りが喚起されやすい、などの特性がある。

ここでは、主としては CMC としての携帯メールを中心に、対面・携帯電話・PC メール・PC インターネットとの比較を取り上げ、各コミュニケーションメディアの特徴及びその効果を見てきた。しかし、コミュニケーションメディアの使用はコミュニケーションタスク・話題の緊急性だけでなく、そのコミュニケーションメディアに対する心理的認識とも深く関わっている。そこで次に、この心理的・感情的要因としての「コミュニケーションメディア観」を取り上げた研究についてレビューし、本研究では留学生のコミュニケーションメディア観を取り上げ、検討する必要性を述べる。

1.3.4 コミュニケーションメディア観を取り上げる重要性

コミュニケーションメディアの選択、及び実際の対人コミュニケーション行動がユーザのコミュニケーションメディア観と深く関連することはいくつかの研究に示されている。例えば、原田（1993a, 1997）は、対面とテレビ電話の対象に調べた結果、コミュニケーションをする際の手掛かりとして、視覚情報と聴覚情報の両方が利用可能であり、伝達可能な情報量は変化しない。それにもかかわらず、対面とテレビ電話に対するコミュニケーションメディア観（話しやすさの評価）が異なっていたことが分かった。それだけでなく、原田（1993b, 1997）は、テレビ電話について、受話器の有無によるコミュニケーションメディア観の差異を検討した。その結果、コミュニケーションメディア観と実際に観察されたコミュニケーション行動の両方が、受話器の有無によって異なることを見出した。具体的には、会話の主観的評定では、受話器有の群が「話しやすい」とする傾向が見られたが、行動評価では実験中の落ち着きの無さが高かった。また会話中のジェスチャーは受話器無群に多く、発話上の問題は受話器無条件が多い傾向が示された。さらに、記憶テストで視覚記憶・聴覚記憶として得点したところ、受話器無群において視覚的記憶が優れていた。また会話時の視線をビデオで分析した結果、受話器有のほうがモニターから視線を外している時間が長く、発話の時間分析からも、受話器有の群では話者交替が明示的であることが示された。この結果についても、伝達可能な情報量という物理的特性によって説明することはできない。なぜなら、テレビ電話では、受話器の有無と関係なく視覚情報と聴覚情報の両方が利用できるため、伝達可能な情報量は変わらないからだとされている。従って、原田（1993b, 1997）におけるコミュニケーション行動の変化は、伝達可能な情報量という物理的特性ではなく、何らかの心理的要因に影響された結果だと推測される。

コミュニケーションメディア観は、コミュニケーション当事者が持っているコミュニケーションの受け止め方を測定するものであり、心理的要因を反映している測度である。そのため、ユーザのコミュニケーションメディア観を明らかにすることで、対人コミュニケーション行動を規定する心理的要因を解明できる可能性がある。言い換えれば、非対面という物理的特性と同様に、コミュニケーションメディア観に着目することが重要だとされている（岡本・高橋, 2006）。

コミュニケーションメディア観について、話しやすさの感情的評価（コンサマトリー性）に関する要因と、道具としての使いやすさ（目的性）に関する要因が存在すると示唆された（池田, 1990；宮田, 1993；原田, 1993a, 1997）。そして、木村・都築（1998）は、話し

やすさの感情的評価の一種として、対人緊張（対人圧力）という因子が存在することを見出した。ただし、これらのコミュニケーションメディア観は有線電話、テレビ電話、PCによるインターネット通信を対象にしていたもので、携帯メールや携帯電話に関しては測定されなかった。

2000年以降、携帯メールの使用が本格的に普及され、コミュニケーションメディア観の検討対象も携帯メールや携帯電話、対面などに広がっている。そこで、都築・木村（2000）は対面、携帯電話、携帯メール、PCメールという4つのコミュニケーションメディアに共通したコミュニケーションメディア観として、3つの因子を見出した。具体的には、話しやすさの感情的評価としての肯定的側面である親和感情（情緒性）、否定的側面である「対人緊張」（対人圧力）、意思伝達が素早い「道具」としての使いやすさの評価としての「情報伝達」（目的性）という3つの尺度である。そして、対面・携帯電話・携帯メール・電子メールという4つのコミュニケーションメディアにおいて、3因子の評価得点が異なることが明らかになっている。

岡本・江川（2003）は大学生347名を対象に質問紙調査を行い、携帯電話と携帯メールに対するコミュニケーションメディア観の相違と大学生の友人関係態度との関連について検討したところ、①携帯電話と携帯メールに対するコミュニケーションメディア観が異なっていた；②友人関係態度の違いによって、コミュニケーションメディア形態の違いによる影響は異なる傾向があることを示した。

岡本・高橋（2006）はコミュニケーション相手との親密度の高低によって、対面、携帯電話、携帯メールという3種類のコミュニケーション形態が異なるかどうかについて質問紙法で検討した。その結果、(1) コミュニケーションメディア観の因子構造は対人緊張、親和感情、情報伝達という3因子の存在は確認できたが、対人緊張と親和感情の間に強い相関が認められたことから、この2つの因子は、話しやすさの感情的評価という一つの要因に還元できる可能性がある。(2) 各コミュニケーション形態の親密度の違いによる差は一樣ではなく、親密度高群においてもコミュニケーション形態の違いによる差が一樣ではない。(3) 親密度高群において最も重要な因子は親和感情因子であるのに対して、親密度低群において最も重要な因子は対人緊張因子である、ことが明らかになっている。

Connell et al. (2001) はCMC（電子メールとチャット）、電話と対面を取り上げ、人々のこれらに対する認識が彼らの集団・組織における対人関係にどう影響を及ぼすかを検討した結果、CMCと対面に比べて、電話による相互作用が最も自然で、満足度も最も高かった、

といっている。それはおそらく、電話が自然な振る舞い、満足のいく相互作用、及びメディアの豊かさ (richness) の間に、最適なブレンドを提供することができるからだとしている。また、コミュニケーションメディア観の対人関係に及ぼす影響が文化によって異なることも指摘されている (Zhang, 2007)。

以上の知見より、①コミュニケーションメディア観はコミュニケーションメディアによって異なっている；②コミュニケーションメディア使用の対人関係に及ぼす影響は、コミュニケーションメディア観と連動し、文化によって異なる、ことが示唆された。前述したように、スマホでは、キャリアメールだけでなく、ウェブサイトアクセスして従来の PC メールを使用することができるため、これまでの PC メールと携帯メールに対する異なった認識がスマホの場合はどうなるのかを検討する必要があると考えられる。そこで、本研究ではスマホも取り上げ、PC とケータイ使用との比較をしながら検討を行う。

加えて、本研究では、留学生のコミュニケーションメディア使用頻度・状況とコミュニケーションメディア観の関係についても検討する。都築・木村 (2000) は日本人大学生を対象に検討した結果では、コミュニケーションメディア観がコミュニケーションメディア、特に携帯メールと PC メールの使用頻度を規定することを明らかにしている。しかし、時代とともに、現在様々なコミュニケーションメディアが手軽に使用でき、ユーザらはそれらを使用しているうちに、コミュニケーションメディア観が生まれることも考えられる。また、留学生の場合は日本語能力に伴い、日本語による入力熟練度や日本語で話す流暢さなどによって異なると思われる。つまり、留学生のデモグラフィック属性と日本語能力・滞日歴・日本語学習歴などの個人的要因、諸コミュニケーションメディアの使用頻度が彼らのコミュニケーションメディア観に影響を及ぼすと予測される。

1.3.5 留学生のコミュニケーションメディア使用とその影響

現在、日本人学生だけでなく、留学生らも様々なコミュニケーションメディアを用いて、他者とコミュニケーションを行なっている。それに関連して、留学生の社会的ネットワーク・異文化適応に関する検討も、コミュニケーションメディア使用の影響を取り上げるようになってきている。まだ少数ではあるが、管見の限りでは以下のようなものが挙げられる。

金 (2003) は首都圏の 12 校に在籍する留学生を対象に、ケータイ利用と彼らの社会的ネットワーク (同言語話者と異言語話者の友人数、交流頻度等) への影響、及び異文化適応

(精神的適応・親和的適応・脱自文化固執的適応・生活文化的適応)との関係について検討を行った。485名を対象に分析した結果、(留学生にとって)ケータイとは、主に母語話者との通話コミュニケーションメディアとして機能している傾向が見られ、相対的に日本人とのコミュニケーションを希薄化させている可能性が示唆された。つまり、ケータイの利用は、彼らの交友関係を同言語話者に限定することを助長している可能性があり、ケータイを持っている留学生のほうが異文化適応度が低い、と報告している。

湯(2004)は横浜市立大学に在籍する中国人留学生66名を対象に、対人関係の形成という観点から、対面・メール・電話・手紙などの使用が異文化適応(学習・研究、心身の健康、対人関係、住居・経済、文化という5つの領域を含む日本の留学生用「異文化適応度」と成人用の「主観的幸福感」)にいかに関与を及ぼすか、「寂しい時」「悩みがある時」「助けを求める時」「連絡のため」という4つの対人場面を設定し、検討を行った。結果、以下のことを明らかにしている。(1)いずれの対人場面でも、電話は母国の家族に対して最も使われており、母国にいる人や日本にいる中国人留学生に対してもメール⁵より電話の方が多く使われていた。(2)「寂しい時」のみ、半数以上の人が、母国にいる知人・友人に対してメールを利用していた。(3)「日本人の知人・友人」と「先生」に対してはメールが多く使われていた。そして、異文化適応度を高・低両群に分けて比較したところ、異文化適応度の高い人は、「寂しい時」「悩みがある時」「助けを求める時」といった対人場面において、いずれも多様なコミュニケーションメディアを利用して、より幅広い対人ネットワーク範囲で相談していた。

馬場・福田(2010)は留学生のICT使用とコミュニケーションの実態について、PCとケータイを取り上げて検討した結果、日本人学生に比べて、留学生らは携帯電話を多用していたが、携帯メールはあまり使用していなかった。このような相違は留学生らの地域活動への参加、日本人(学生)と友人になる数、在日生活における満足度などに影響を及ぼしたことが分かった。とりわけ、日本語能力の低い留学生にとっては携帯メール(テキスト)は使い勝手等が悪い等の理由から、ケータイコミュニケーションへの参加への障壁となっており、一方、携帯メールの使用が、付き合いを広げ、親しい日本人を増やすことにつながり、留学生の満足度を高める可能性もある、と馬場(2010)が明らかにしている。これ

⁵ 湯(2004)では単なる「インターネット」「メール」という表現を用いたが、「メール」とは携帯メールなのか、それともPCメールなのか、もしくは両者を含むかは判断できない。なお、調査が行われた時期を考えると、主としてはPCメールだと思われる。

らのことより、携帯メールは留学生にとってメリットとデメリットの両方が存在するコミュニケーションメディアであることが示唆された。

馬場（2010）と馬場・福田（2010）の検討対象は日本語能力の低い⁶留学生に関する結果で、金（2003）と湯（2004）は留学生らの自己評価を用いたが、具体的な分布は明らかになっていない。また、金（2003）、湯（2004）、馬場・福田（2010）と馬場（2010）はいずれも質問紙調査による自己報告の結果であり、留学生らが実際にケータイを用いて日本人学生とコミュニケーションをする際、その使用がどのような影響を及ぼすのかに関しては検討されていない。

そこで、本研究では、中上級日本語能力を有する留学生を対象に、携帯メールと携帯電話がいかに彼らの日本人学生とのコミュニケーションに影響を及ぼすのか、その日本語使用にどのような特徴があるのか、日本人学生の印象形成に媒介効果を与えるかどうかを明らかにするため、実験法を用いて検討を行う。

加えて、本研究では以下の点についても検討する。

留学生のケータイとりわけ携帯メールの使用は、年齢や言語（日本語・英語）能力、入力の熟練度などといった個人的要因と大きく関わっていると思われるため、留学生のコミュニケーションメディア使用を検討する際に、このような要因も考慮する。

湯（2004）、馬場・福田（2010）と馬場（2010）では、インターネットの使用はケータイとPCの両者を区別せずに検討が行われた。しかし、この2つのメディアは利便性やユビキタ性が異なるため、インターネットの使用状況とその影響を検討するには、ケータイとPCに分けて行うべきだと言えよう。

また、スマホの普及率が急速に高くなり、ケータイに比べてよりインターネットにアクセスしやすい利便性がある。そこで、本研究ではケータイとPCに加え、スマホに関する使用も取り上げ、ケータイとPCの影響の相違点についても比較・分析する。

前述したように、コミュニケーションメディア使用の影響を検討する際に、コミュニケーションメディア観を取り上げる必要がある。そこで、本研究では、留学生らがどのようなコミュニケーションメディア観をもっているのかについても検討する。

⁶ 半数ほどは日本語能力試験 2 級で、日本語能力試験 1 級に合格していた者が極少数であった。

1.4 本研究の構成とデータソース

1.4.1 本研究の構成

本研究の構成について述べる。

第1章では、本研究の背景と目的について述べ、本研究の理論的枠組みを示し、関連領域の先行研究をレビューし、本論文の構成について論じ、データソースを示す。

第2章では、研究1は対人関係中心の理論とメッセージ中心の理論に基づき、日中学生の異文化コミュニケーションにおけるケータイ使用の影響を明らかにする。研究2では日中学生のケータイ使用の実態を調べ、諸使用上における相違点を比較・分析する。それとともに、個人的要因がそれぞれの使用における効果の有無についても比較・分析する。

第3章は、ユーザのコミュニケーション行動と緊密に関連するコミュニケーションメディア観に着目し、研究3では日本語能力によって留学生の携帯メール・携帯電話・PCメールの使用状況、それに伴いそれぞれのコミュニケーションメディア観がどのように異なるのか、それらに影響を及ぼす要因は何なのかについて検討を行う。研究4では、留学生のコミュニケーションメディア観をメディアリテラシーに対する認識まで広げて、ケータイとPCに加え、スマホも取り上げ、それぞれの使用によって、留学生のコミュニケーションメディアリテラシーに対する認識と諸コミュニケーションメディア使用との関係が異なるかどうかを検討する。

第4章では異文化接触中心の理論に基づき、留学生全般を対象に、様々なコミュニケーションメディアの使用が異文化適応状況の向上にどのように寄与しているかを明らかにする。同時に、デモグラフィック属性とともに、滞日歴・日本語学習歴・日本語能力を含めた個人的要因も取り上げ、コミュニケーションメディア使用と異文化適応状況における効果を検討する。

これらの結果をもとに、第5章では、本研究の結論をまとめ、異文化コミュニケーションの3つの理論とメディア使用の観点から、留学生と日本人学生の異文化コミュニケーションをする際の3側面における影響を明らかにし、それに基づいた提言を行い、残された課題を述べる。

本研究の構成をまとめると、図1-6の通りである。

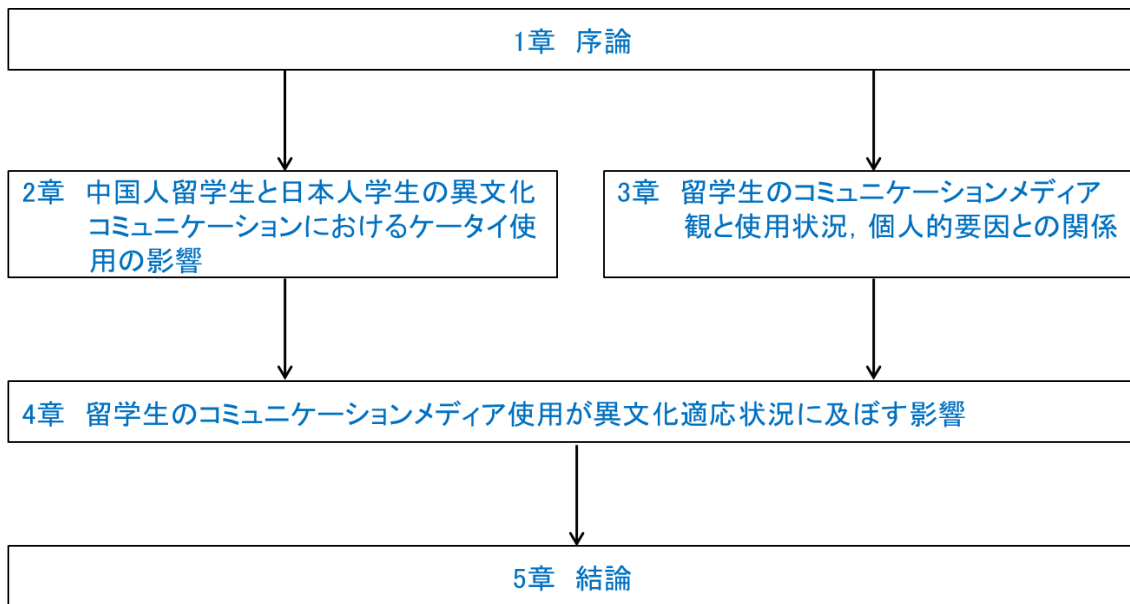


図 1-6 本研究の構成

1.4.2 本研究のデータソース

本研究では、3つのデータソースを使用した（表 1-2 を参照）。以下に各データソースの概要を示す。実験・調査の内容・構成，分析に使用した尺度における対象者の特徴に関する詳細は各章で示す。いずれのデータにおいても，欠損値はあったが，データソースに掲載している数字は実験・調査協力者の人数である。また，分析の目的によって対象者の中から分析対象者を選抜している場合もあるため，対象者と分析対象者の人数が異なることがある点に留意されたい。

(1) 調査+実験について

本データは，予備調査，実験及び調査で得られたデータである。

①対象者

予備調査はお茶の水女子大学，東京大学，東京学芸大学及び日本女子大学に在籍している日本人学生を対象に実施したものであり，実験と調査はお茶の水女子大学と東京大学に在籍している中国人留学生と日本人学生である。

②方法

予備調査はお茶の水女子大学「心理学基礎」科目を履修する学部2・3年生であり，他の3大学は知り合いの教員を通じて，在学している日本人学生を対象に調査協力を依頼した。協力者の同意を得た上で，各大学の教室で質問紙調査を行った。回収調査票計 342 名，有

表 1-2 本研究のデータソース

	調査+実験	横断調査 I	横断調査 II
方 法	質問紙調査+実験	質問紙	質問紙
対 象	調査：大学生 342 名 実験：日中学生各 40 名	留学生 518 名	留学生 66 名
実施時期	調査：2008 年 10 月 実験：2008 年 11 月下旬 ～2009 年 2 月上旬	2011 年 6 月中上旬	2012 年 1 月中旬 ～2 月上旬
メディア	ケータイ	ケータイ・PC	ケータイ・PC・スマホ

効回答率は 84.2%であった。

実験（調査も含む）はお茶の水女子大学と東京大学に在籍する日本人学生と中国人留学生であった。お茶の水女子大学では「心理学基礎」を履修する学生らが、実験等に協力する代わりに、1 単位をもらうことができる。本実験・調査はこの制度を利用した。東京大学の学生らには、知り合いを通じて、参加を呼びかけた。最終的に日本人学生 40 名、中国人留学生 40 名が実験に参加し、分析対象になったのは日本語能力が条件を満たさなかった留学生 5 名を除いた 35 名、及び彼らとペアになった日本人学生 35 名計 70 名であった。

③時期

予備調査の実施時期は 2008 年 10 月下旬で、本実験と調査は 2008 年 11 月下旬～2009 年 2 月上旬であった。

(2) 横断調査 I について

本データは埼玉大学に在籍している留学生を対象に実施された横断調査のデータである。

①対象者

埼玉大学に在籍する留学生

②方法

埼玉大学国際交流センター・国際交流支援室の協力を得て、学務部などを通じて、在籍する留学生に調査協力を依頼した⁷。調査票は学務部・国際交流支援室にて配布すると同時

⁷ 本調査は埼玉大学国際交流センター・国際交流支援室が同時期に実施した「外国人留学生支援のためのアンケート調査」と同時に実施された。

に、調査開始後1週間経っても調査票を受け取っていない留学生には郵送で配布した。518名を対象に配布した結果、合計444名分を回収した（回収率85.7%）。

③時期

2011年6月中上旬

(3) 横断調査Ⅱについて

本データは関東地域の国立大学に在籍している留学生を対象に実施された横断調査のデータである。

① 対象者

来日して3ヶ月以上、かつ日本のケータイを利用している留学生

②方法

知り合いの教員を通じて、日本語レベル初・中級の留学生、及びこれまでの実験や調査に参加した留学生らに調査協力を依頼した。同意を得た上で、使用したい言語の調査票を送付し、回答してもらった。66名に送付したが、合計56名分を回収した（回収率84.8%）。

③時期

2012年1月中旬～2012年2月上旬

第2章 中国人留学生と日本人学生の異文化コミュニケーションにおけるケータイ使用の影響

2.1 本章の背景と目的

第1章で述べたように、携帯メールと携帯電話が友人との関係、親密度によって友情を維持する方法（古谷・坂田，2006；岡本・江川，2003；岡本・高橋，2006）、対人ネットワークの構造（北村ほか，2006；地引ほか，2006）などの面において、異なる性質を持っている。しかし、2つのコミュニケーションメディアが実際の対人印象形成、とりわけ異文化コミュニケーション過程が付随した場合、いかに異なるのかに関してはまだ明らかになっていない。

人々は対人コミュニケーションを通して他者の意見や行動を変えたり、他者の持つ印象を操作したりすることによって対人関係を変化させる（深田，2007）。これは対面だけでなく、非言語的の手がかりの有無に加え、異なる文化背景をもつ他者を相手にする場合、その影響により大きな差異があると考えられる。現在、留学生らも日常生活の中、携帯メールや携帯電話を用いて、日本人学生とコミュニケーションを行っていると思われる。その際、留学生のケータイによる日本語のメッセージが日本人学生の印象形成にどのように影響を及ぼすのか。また、日本人学生に比べて、留学生らのケータイ使用にどのような特徴があるのか、本章では主としてこれらについて検討する。

本章では、以下の2点を明らかにすることを目的とする。

(1) ケータイコミュニケーションにおける日本人学生の中国人留学生に対する印象形成は携帯メールと携帯電話という2つのコミュニケーションメディアによって違いがあるのか。あるとすればその媒介要因は何なのか。

(2) 中国人留学生と日本人学生のケータイ（メール・電話・インターネット）使用にどのような相違点があるのか。それぞれの使用が個人的要因といかに関係するのか。

本章では、目的(1)を明らかにするために、日本人学生と中国人留学生を対象に実験法を用いて、検討を行う（研究1）。そして、目的(2)を究明するために、日本人学生と中国人留学生を対象に実施した質問紙調査をもとに、分析・比較を行う（研究2）。

2.2 研究1：ケータイコミュニケーションにおける日本人学生の中国人留学生に対する印象形成

2.2.1 本研究の背景・目的及び仮説

本研究は、日本人学生の中国人留学生に対する印象形成が携帯メールと携帯電話という2つのコミュニケーションメディアによって違いがあるのか、それに影響を及ぼす要因は何かを明らかにする。

携帯メールはパラ言語や非言語的手がかりが大幅に制限されている点や、時間的・物理的制限から解放されている面では、PCメールや電子掲示板といった従来のCMCと同様だと捉えられている(e.g., 宮田, 1993; 中村, 2001)。これまで、他のコミュニケーションメディアに比べて、CMCが相手に対する印象をその社会的ステレオタイプと一致したものにすることが研究されてきた。例えば、Epley & Kruger (2005) は、電話(音声)よりも、PCメール(テキスト)を使って相互作用をしたほうが、ヨーロッパ系アメリカ人学生が、アフリカ系やアジア系アメリカ人学生に対する印象がそのステレオタイプに沿ったものになったことを示した。彼らは、これについて、少なくとも一つの理由は、テキストメッセージがパラ言語・非言語的手がかりを持たず、より曖昧なため、ヨーロッパ系アメリカ人学生が、相手に対する印象を形成するとき、一般的なアフリカ系やアジア系アメリカ人に関するステレオタイプを利用したからだと考えた。

本研究では、先行研究のEpley & Kruger (2005) が指摘している、PCメール(テキスト)と電話(音声)という2つのコミュニケーションメディアにおける印象形成が異なることが、ケータイの場合にも当てはまるかどうかを明らかにする。そのため、本研究では、日本人学生が留学生と携帯メールか携帯電話のいずれかを用いて異文化コミュニケーションをするとき、どちらの場合、相手に対する印象がより一般的な留学生に対するステレオタイプに一致したものになるかを実験によって検討した。なお、日本にいる留学生の6割以上が中国人留学生であるため(JASSO, 2007)⁸、本研究では、中国人留学生を対象にした。また、Epley & Kruger (2005) の研究対象は全員英語母語話者であり、電話群の回答が録音され、文字化された後メール群の回答として使用された。一方、本研究では、中国人留学生が日本人学生とケータイによるコミュニケーションをする際の実情・諸問題点を把握するため、いずれの群においても実際の参加者を用いた。

⁸ 本実験を行う直前の最新数字はJASSOが2007年12月に公表したものであった。

また、本研究では、携帯メール（テキスト）と携帯電話（音声）の異なる性質に加え、話題の効果も検討した。CMCにおける対人印象形成の認知モデルは社会的ステレオタイプ（カテゴリ化）モデルと言われる（Walther, 1996）。即ち、CMCは非言語的手がかりが少ないため、受け手は相手をカテゴリ化する上、それに相応しいと思われるステレオタイプを用いて空白を埋めるため、よりステレオタイプに影響されやすいのである。このモデルに基づき、相手が中国人留学生だと強く意識させ、外集団だというカテゴリ化を強める日中関係などに関する話題（国際的課題）の場合と、カテゴリ化を弱める日常的话题の場合とでは、ステレオタイプの影響が異なると予測される。そのため、本研究では、話題とコミュニケーションメディアの交互作用の効果にも焦点を当て、分析を行った。

さらに、本研究では、携帯メールと携帯電話という2つのコミュニケーションメディアの違いが、日本人学生の中国人留学生に対する印象形成に及ぼす影響以外、その印象は中国人留学生の発信したメッセージによって説明されるかどうかも検討した。上述したように、Epley & Kruger (2005) は、電話（音声）と比べて、PCメール（テキスト）の方が全体の記憶が良かったにもかかわらず、よりステレオタイプ的になった理由の1つとして、文字（テキスト）における曖昧さに媒介されたことを挙げている。そこで、本研究も同様に、携帯メールと携帯電話のいずれの群における中国人留学生の発話の曖昧さと日本人学生の全体記憶力を検討した。

上記2つの変数以外に、本研究では以下の諸変数の効果についても測定した。

まず、携帯メールの日本語による入力インターフェースは、中国人留学生にとって使い難く、単に話すより労力が要するため、携帯メールでの発話量が携帯電話群よりも少ないことが考えられる。もしそうなのであれば、日本人学生が相手から獲得した情報が携帯電話群よりも少ないであろう。それゆえ、中国人留学生に対する印象を形成するには、一般的な中国人留学生に対するステレオタイプを用いて空白を埋めなければならないことになると考えられる。それで、携帯メール群ではよりステレオタイプの印象になると予測される。

次に、携帯メールのメッセージは携帯電話に比べて、発話量が減るだけでなく、日本語の文法的誤用が多くなることが考えられる。それゆえ、携帯メールの日本語は丁寧さと適切さが劣っていると予想される。従って、携帯電話に比べて、携帯メールのほうがより一般的な中国人留学生に対するステレオタイプに沿った印象になると予想される。

そして、携帯メールの1つの特徴として、相手を気遣うかどうかについて未だに一致した知見がない。中村（2001）や三宅（2000）によると、携帯メールは常に相手に気を遣っ

ているとされているのに対して、原田（2003）は、携帯メールは周りの状況や相手の反応に気を遣うことなく、相手に合わせなくてはならないことが少ないと言っている。もし後者が本当なのであれば、携帯メール群の中国人留学生が日本人学生に合わせなくなり、より一般的な中国人留学生らしい発話をする可能性がある。そこで、本研究では、中国人留学生の発話内容のステレオタイプ度についても確認・分析した。携帯メール群の中国人留学生がよりステレオタイプに沿った発話が多ければ、日本人学生はより多くのステレオタイプに沿った情報を受信することになるだろう。ステレオタイプに一致しない情報よりも、一致する情報に選択的に注意を向けやすく、また、ステレオタイプの内容に一致する個人情報により記憶される（久保田，2004）。その結果、日本人学生がよりステレオタイプ的な印象になると考えられる。そこで、本研究では、日本人学生の記憶内容のステレオタイプ度も分析した。

以上のことから、本研究では、媒介変数として、(a)中国人留学生の全体発話量、(b)その曖昧さ、(c)日本語の文法的誤用、(d)発話の丁寧さ、(e)発話の適切さ、及び(f)発話内容のステレオタイプ度、の6つを測定した。なお、日本人学生の印象形成は記憶力の差に由来しないことを確認するため、先行研究と同様に、日本人学生の全体記憶力についても分析した。また、中国人留学生の発話内容のステレオタイプ度がいかに日本人学生の記憶に影響を与えるか確認するために、日本人学生の記憶内容のステレオタイプ度も分析した。なお、この2つの変数は中国人留学生の発信したメッセージではないため、印象形成への媒介効果に関する検討からは外すことにした。

上記の問題点を究明するため、本研究では、日本人学生に(1)携帯メールか携帯電話のいずれかを用いて中国人留学生に質問させ、(2)その回答を読んだり聞いたりした後、中国人留学生に対する印象を自由記述で書くように指示した。そして、(3)日本人学生に中国人留学生の各質問の回答をどれほど覚えているかの記憶再生を求めた上、(4)最後に相手の中国人留学生に対するステレオタイプ項目の得点を評定させた。

本研究は中国人留学生に対する印象の自由記述の中にあるステレオタイプのものと、測定されたステレオタイプ項目の得点（尺度の評定）の両方を従属変数として検討を行った。Epley & Kruger（2005）は自由記述を用いていなかったが、本研究は結果の頑健さを追求するため、自由記述による測定も行った。

そして、各媒介変数とコミュニケーションメディア効果の関係を明らかにするため、本研究では内容分析法を援用して（以下「メッセージ分析法」と称す）、「中国人留学生の発

話」と「日本人学生の記憶」の両方を以下の通り分析した。

(1) 中国人留学生の携帯メールか携帯電話いずれのかにおける発話量をカウントした。そして、中国人留学生の各回答がいずれのコミュニケーションメディアによって曖昧に解釈されるか、その発話の曖昧さに関するメッセージ分析をした。その上、中国人留学生は、どれほどステレオタイプに関連する発話をしたかの分析を行った。

(2) 中国人留学生の日本語による文法的誤用、及びその発話の丁寧さと適切さが携帯メールと携帯メールによってどう異なるのかについて、それぞれ構文レベルと語用論レベルの面からメッセージ分析法を用いて検討を行った。

(3) 日本人学生が中国人留学生の回答をどれほど覚えているか、その全体記憶力はコミュニケーションメディアによって差があるかどうかについて、日本人学生の記憶再生の分析をした。そして、記憶再生の中どれほどステレオタイプの記述が含まれているかを分析し、中国人留学生の発話内容のステレオタイプ度との関係も検討した。

上記の議論に基づき、本研究の第1の目的は、携帯メールと携帯電話という2つのコミュニケーションメディアによって、日本人学生の中国人留学生に対する印象が異なるかどうかを明らかにすることである。そして、コミュニケーションメディアと話題の交互作用によって、ステレオタイプの喚起状態が異なるかどうかを究明する。これは本研究の第2の目的とする。これらについて、本研究では以下の2つの仮説を立てて検討を行った。

仮説①：日本人学生が中国人留学生に対する印象を形成する際、携帯電話に比べて、携帯メールの方がよりステレオタイプになりやすいだろう。

仮説②：仮説①で予測した効果は、日常的話題の場合に比べて、国際的話題の場合のほうがより大きいだろう。

上記2つの目的に加え、本研究では、日本人学生の印象形成におけるコミュニケーションメディアの効果がどの媒介変数によって説明されるかも分析・検討を行った。これは本研究の第3の目的であり、仮説③と仮説④について検討を行った。

仮説③：携帯メールの日本語による入力インターフェースは、中国人留学生にとって使い難いため、携帯メールのメッセージは携帯電話に比べて、発話量が減少し、文法的誤用が多くなり、発話の丁寧さと適切さが劣っており、発話内容のステレオタイプ度も高くなるだろう。

仮説④：仮説③のいずれもしくはいくつかの変数が日本人学生の印象形成に媒介効果を与えるだろう。

2.2.2 方法

2.2.2.1 予備調査

本研究では、中国人留学生の回答、日本人学生がその回答に対する全体記憶力、及び日本人学生が中国人留学生に対する印象がどれほど一般的な中国人留学生に対するステレオタイプに一致するかを測定し検討を行った。しかし、これまで、日本人学生が中国人留学生に対するステレオタイプに関する定説がなかったので、本研究で用いるステレオタイプ項目を選定するために、日本人学生にとってステレオタイプのだと認知される項目を選別するための予備調査を行った。

調査対象はお茶の水女子大学、東京女子大学、東京学芸大学、東京大学の4校で計342名の学生であった。手続きとしては、まず、原谷ら(1960)の12カ国に対するステレオタイプと、菅・唐沢(2006)のアジア系留学生に対するステレオタイプのうち、中国人留学生に関するものと思われる中から高得点のものを抽出した。加えて、2008年10月9日-16日の一週間で、日本のYahoo、Googleで「在日中国人留学生 ステレオタイプ」をキーワードとして検索したもののうち、最もよく言及されているものを抽出した。その結果、予備調査の質問紙に41項目を設けた(付録1)。7件法(7非常にそう思う、4どちらでもない、1全くそう思わない)で評定させた。これらの質問項目を用いて作成した質問紙を授業中に配り、学生に記入してもらい、その場で回収した。その後、授業の担当教員を通して統計結果を講義内容の一部としてフィードバックした。

予備調査について、記入に欠落があったものや、留学生を除いた288名分の結果を分析対象にした。41項目の平均得点は3.50-5.30であった。各項目の平均得点及びその内容は表2-1に示す。その中から最も得点が高かった12項目(平均得点は4.50以上)を本実験の提示項目として使用した。

2.2.2.2 本実験

実験条件：実験はインタビュー式で行った。実験参加者をいずれかの群にランダムに振り分け、インタビューにおいて面接者は日本人学生で、面接を受けるのは中国人留学生であった。インタビューの内容は国際的課題と日常的課題の2種類がある(表2-2)。

参加者：お茶の水女子大学と東京大学に在籍する日本人学生40人(学部生、大学院生)、中国人留学生40人(学部生、大学院生、研究生等)の計80人であった(うち50人は女性)。

実験計画は、2（メディア：電話・メール）⁹×2（話題：国際・日常）の要因配置で、いずれも参加者間要因であった。なお、先行研究と同様に、組み合わせは同性同士であった。

時期：2008年11月下旬～2009年2月上旬

表2-1 予備調査の項目と結果

順位	平均得点	項目	内容
1	5.30	8	授業や研究に真面目だ
2	5.27	9	勤勉だ
3	5.21	20	自己主張が強い
4	5.13	30	親族の絆が強い
5	5.05	31	家族思いだ
6	4.81	12	競争的だ
7	4.79	2	英語が上手だ
8	4.77	18	仕事に積極的だ
9	4.72	28	野心的だ
10	4.69	1	頭が良い
11	4.64	13	情熱的だ
12	4.50	3	雄弁だ
13	4.46	5	頭の回転が速い
13	4.46	23	外向的だ
15	4.43	10	実践的だ
16	4.35	17	抜け目ない
17	4.30	24	独断的だ
18	4.27	33	騒がしい
19	4.25	14	堅実だ
20	4.24	11	がめつい
20	4.24	21	自画自賛をする
22	4.23	4	物知りだ
23	4.22	22	自信過剰だ
23	4.22	32	マナーを守らない
25	4.16	25	社交的だ
26	4.14	16	商売上手だ
27	4.10	6	機敏だ
28	4.09	15	節約上手だ
29	4.06	29	疑い深い
30	3.97	40	利己主義だ
31	3.96	34	勝手に人のものを使ってしまう
32	3.87	19	親切だ
33	3.83	38	欲深い
34	3.79	7	創造性がある
35	3.75	26	人付き合いがうまい
36	3.74	36	嘘をつく
37	3.73	35	ズルをする
37	3.73	39	信頼できない
39	3.58	27	ユーモアがある
39	3.58	37	犯罪に走りやすい
41	3.50	41	乱暴だ

⁹ 本実験は SoftBank 822P を用いて、日本人学生と中国人留学生に使用してもらった。実験前、実験者が文字の入力に関する設定を行い、統一した。

表2-2 本実験で用いた話題

国際的話題	日常的话题
1. あなたは、日本に来て何年目ですか？	1. ご専攻は何ですか？
2. あなたは、なぜ日本に留学してきましたか？	2. 今の大学に入った理由は何ですか？
3. あなたは、今、日本での留学生活についてどう思いますか？	3. あなたは、今の学生生活について、どう思いますか？
4. あなたは、よく中国のご家族に電話したり、メールしたりしますか？	4. あなたは、よく大学の友達と部活動やサークルをしたりしますか？
5. あなたは、日本の大学システムについてどう思いますか？中国の大学とは何か違いがありますか？	5. あなたは、ご家族の誕生日や母の日などに、家に電話したりプレゼントしたりしますか？
6. 日本あるいは日本人の長所、短所は何だと思えますか？	6. あなたは将来、どのような職業に就きたいと思えますか？
7. 日本人と中国人の相互理解の現状について、どう思いますか？	7. もし、神様に1つお願いごとを叶えてもらえたとしたら、何を願いますか？

手続き：実験はペアごとに行われた。日本人参加者と中国人参加者がそれぞれの個室に案内され、「我々は人々が異なるメディアを通して、人に対する印象をどう形成するかを研究している」と実験の目的を説明した。日本人参加者には「これから他の部屋にいる中国人留学生と相互作用をして、相手に対する印象を評定してください」と教示した。中国人参加者には「これから他の部屋にいる日本人学生と相互作用をして、相手の質問に答えてください」と伝えた。実験が始まる前に、日本人参加者には性別、年齢などの属性に加え、一日の平均ケータイ使用量（メール「①5通以下～⑦50通以上」、電話（①数日一回～⑦10回以上）、インターネットへのアクセス「①全くしない～⑦2時間以上」）や、中国人留学生の友人数（「①いない～⑦25人以上」）、一般的な中国人留学生に対する好意度（「①全く好きではない～⑦非常に好きだ」）及びステレオタイプ得点（「①全くそう思わない～⑦非常にそう思う」）を質問紙で測定した（付録2）。中国人参加者には、性別、年齢などの属性に加え、日本語学習歴、日本滞在歴、日本語能力試験の資格の有無（受験した年度と1級、もしくは2級の点数と）、及びこれまでの日常生活における日本人学生との接触量（立ち話をする、一緒にご飯を食べる、電話で話をする、学外で個人的に会う）、一般的な日本人学生に対する好意度（「①全く好きではない～⑦非常に好きだ」）を質問紙で測定した（付録3）。

続いてインタビューに移った。電話群では、日本人参加者に相手が完全に回答するまで待つよう、メール群では、参加者に各質問をメールで書いて送信し、相手の返事が来るまで待つように教示した。中国人参加者には、いずれの条件においても「実験はインタビュー式で行われるので、相手の質問に答えていただければ結構で、相手に質問しないでください」と教示した。また、メール群の場合、インタビューを始める前に、携帯メールの送

受信に支障があるかどうか、入力に慣れているかどうかを確認するため、日本人参加者と中国人参加者とともに、5分間ほど入力の練習をしてもらった。

インタビューについて、「初対面の人にインタビューするという状況を想定して質問してください。インタビューの際、特に自分のお名前やご所属などを言う必要はありません。質問はこのリストに基づいて行うので、相手の答えに対しては質問しないでください。相手の答えについて、メモを取らないでください」と教示した。そして、実験者は退室し、外で待機した。電話群の場合、日本人参加者も中国人参加者も会話を録音した。メール群の場合は電話群より時間がかかるため、両方の参加者のやり取りがどこまで進んでいるか、そして、メールの送受信の途中で支障があるかどうかなどを把握する必要がある。そのため、何問まで進んでいるか、15分ごとに確認をした。

リストの質問が全部終わったのち、ケータイを回収した。その後、日本人参加者には、インタビューした相手に対する具体的な印象を自由に記述するよう求めた（付録4）。中国人参加者には感謝を示し、実験の終了を伝えた。次に、日本人参加者に、先ほどインタビューした留学生が各質問にどう答えたかを思い出すよう指示し、自由記述で回答を再生させた（付録5）。最後は相互作用をした中国人留学生に対するステレオタイプ項目の得点及び好意度を7件法で評定させた（付録6）。全ての手続きが終了後、実験参加者に感謝し、終了した。

2.2.3 結果

2.2.3.1 分析対象

本研究の実験では、中国人留学生は日本人学生と日本語でコミュニケーションをする能力が要求される。そのため、本研究は以下の基準を設定して、中国人留学生が以下のいずれかを満たさなければならない。

①日本語能力試験（JLPT）2級以上に合格している

②日本語能力試験を受けたことのない人は、本実験に参加するまで少なくとも2年以上の留学籍もしくは2年以上の日本語学習歴を有している

③上記の①、②のいずれも満たしていない場合、日本語学習歴と留学籍を合わせて2年以上の年月を有している

上記の基準に従い、5人の留学生を分析対象から外した。残りの35組計70人が本研究の

分析対象となった。本研究の分析対象となった留学生のうち、日本語能力試験 1 級、2 級の合格者はそれぞれ 22 人 (62.85%) と 3 人 (8.57%) であった。

2.2.3.2 群分けの同質性と群内分散の均等性

携帯電話群と携帯メール群、及び国際的課題群と日常的課題群の群分けに同質性があるかどうかを確認するため、中国人留学生の日本語能力¹⁰、日本語学習歴、滞日歴、日本人学生との接触量、一般的な日本人学生に対する好意度などを従属変数として、2 (メディア：電話・メール) × 2 (話題：国際・日常) × 2 (性別：男・女) の分散分析を行った。結果、日本語能力において性別の主効果が見られた以外 (女性の方が高かった, $p < .05$)、すべての従属変数において、いずれも、各独立変数の主効果及び交互作用は認められなかった。

また、日本人学生の中国人留学生の友人数、及び一般的な中国人留学生に対するステレオタイプ得点、好意度を従属変数として、上記と同じ 3 要因の分散分析も行った。その結果、中国人留学生の友人数と一般的な中国人留学生に対するステレオタイプ得点において、性別の主効果が見られた以外 (男性の方が留学生の友人数が多かったが、女性のほうがステレオタイプ得点が高かった)、この 3 つの従属変数において、いずれの独立変数の主効果、及び交互作用は見られなかった。

以上の結果は、ランダム配置が適切になされたことを示した。即ち、群分けには同質性をもつと言える。

さらに、日本人学生と中国人留学生の個体差を確認するため、それぞれ群内不偏分散を求めた。その結果、いずれも有意差が見られなかった。即ち、本研究の実験に参加した日本人学生も中国人留学生も母集団のサンプルと均等性をもつことが言える。

2.2.3.3 提示されたステレオタイプ項目に対する認知度

本研究はお茶の水女子大学と東京大学の中国人留学生・日本人学生を対象にしたものであるが、分析をする前に、実験に参加した日本人学生が、予備調査の結果から抽出された 12 項目を一般的な中国人留学生に対するステレオタイプとして認知しているかどうかを確認する必要がある。そこで、本項では、予備調査に回答した日本人学生と本実験に参加

¹⁰ 日本語能力の計算は以下の通りである：JLPT-1 級を受験した人は素点 / 400 × 100%，JLPT-2 旧を受験した人は素点 / 400 × 80%，受験していない留学生に対しては「聞く」「話す」「読む」「書く」に対する自己評価の得点の合計 / 400 × 100% を用いた。以降同様。

し、かつ分析対象になった日本人学生の、12項目に対するそれぞれの平均得点を算出し、両群に差があるかどうかを検定するため、独立したサンプルの *t* 検定を用いて分析した。結果を表 2-3 に示す。表 2-3 より、項目 1 - 6 に関しては、予備調査に回答した日本人学生と本実験に参加した日本人学生の間には差がなかったが、項目 7 - 12 に関しては、いずれも本実験に参加し、かつ分析対象になった日本人学生のほうが得点が高かったことが示された。

以上の分析結果から、予備調査から抽出された 12 項目をお茶の水女子大学・東京大学に在籍する日本人学生の「一般的な中国人留学生」に対するステレオタイプ項目として使用することに妥当性があると示された。

2.2.3.4 仮説①と仮説②に関する検討

尺度の評定による検討結果：本研究は、携帯電話より、携帯メールの方がステレオタイプの印象になりやすいと予測した。これを検証するため、日本人学生が相互作用をした中国人留学生に対して評定したステレオタイプ（12項目）の得点を従属変数として、2（メディア：電話・メール）×2（話題：国際・日常）×2（性別：男・女）の分散分析を行っ

表2-3 予備調査に回答した日本人学生と本実験に参加した日本人学生の12項目平均得点

項目	平均得点	<i>t</i> 検定結果
1. 授業や研究に真面目だ	予備対本実験 $M_s = 5.30$ vs 5.63	$t(321) = 1.42, ns.$
2. 勤勉だ	予備対本実験 $M_s = 5.27$ vs 5.51	$t(321) = 1.02, ns.$
3. 自己主張が強い	予備対本実験 $M_s = 5.21$ vs 5.26	$t(46.9) = .24, ns.$
4. 親族の絆が強い	予備対本実験 $M_s = 5.13$ vs 5.29	$t(321) = .96, ns.$
5. 家族思いだ	予備対本実験 $M_s = 5.05$ vs 5.06	$t(321) = .04, ns.$
6. 競争的	予備対本実験 $M_s = 4.81$ vs 4.97	$t(321) = .65, ns.$
7. 英語が上手だ	予備対本実験 $M_s = 4.79$ vs 5.77	$t(51) = 5.40, p < .001$
8. 仕事に積極的だ	予備対本実験 $M_s = 4.77$ vs 5.26	$t(321) = 2.24, p < .05$
9. 野心的だ	予備対本実験 $M_s = 4.72$ vs 5.26	$t(321) = 2.34, p < .05$
10. 頭が良い	予備対本実験 $M_s = 4.69$ vs 5.69	$t(321) = 4.73, p < .001$
11. 情熱的だ	予備対本実験 $M_s = 4.64$ vs 5.23	$t(321) = 2.56, p < .05$
12. 雄弁だ	予備対本実験 $M_s = 4.50$ vs 5.11	$t(321) = 2.65, p < .01$

た。その際、12項目の合計得点を算出し、内的信頼性（ α 係数）は .81 であった。分散分析の結果より、コミュニケーションメディアによる有意な主効果が認められた（ $F(1, 27) = 4.24, p < .05$ ）。携帯電話に比べ、携帯メールの方がステレオタイプに関する得点が高かった（図 2-1）。なお、話題による有意な主効果と相互作用はいずれも認められなかった。

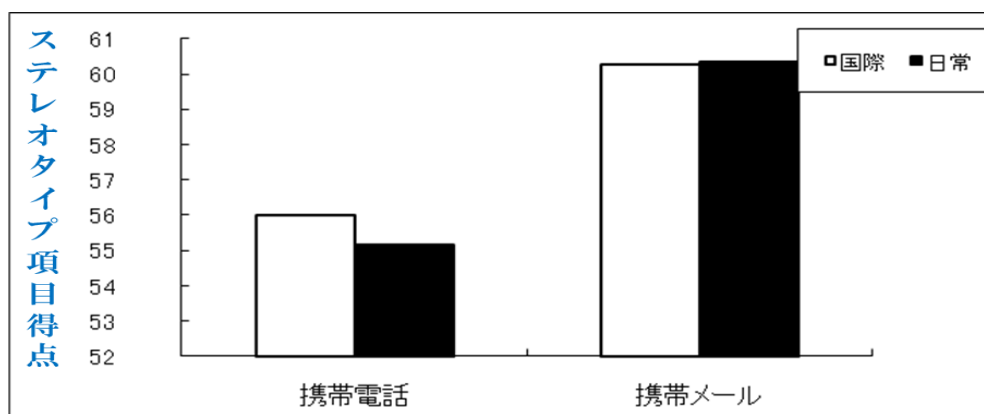


図2-1 携帯メールと携帯電話における印象形成の相違

表2-4 携帯メール群と携帯電話群における12項目に対する平均得点の比較

項目	2群の平均得点	メディアの主効果
1. 授業や研究に真面目だ	メール対電話： $M_s = 5.82$ vs 5.22	$F(1,27)=3.70, p < .10$
2. 勤勉だ	メール対電話： $M_s = 6.06$ vs 5.50	$F(1,27)=2.88, ns$
3. 自己主張が強い	メール対電話： $M_s = 4.47$ vs 3.56	$F(1,27)=6.08, p < .05$
4. 親族の絆が強い	メール対電話： $M_s = 5.88$ vs 5.56	$F(1,27)=.42, ns$
5. 家族思いだ	メール対電話： $M_s = 5.84$ vs 5.56	$F(1,27)=.69, ns$
6. 競争的だ	メール対電話： $M_s = 3.82$ vs 3.28	$F(1,27)=2.82, ns$
7. 英語が上手だ	メール対電話： $M_s = 3.82$ vs 4.22	$F(1,27)=1.24, ns$
8. 仕事に積極的だ	メール対電話： $M_s = 5.06$ vs 4.67	$F(1,27)=1.05, ns$
9. 野心的だ	メール対電話： $M_s = 4.29$ vs 4.06	$F(1,27)=.63, ns$
10. 頭が良い	メール対電話： $M_s = 5.65$ vs 5.22	$F(1,27)=1.47, ns$
11. 情熱的だ	メール対電話： $M_s = 5.00$ vs 4.22	$F(1,27)=4.82, p < .05$
12. 雄弁だ	メール対電話： $M_s = 4.47$ vs 4.11	$F(1,27)=.66, ns$

次に、日本人学生の評定した各項目の得点に、携帯メールか携帯電話のいずれかによって差があるかどうか、各項目の平均得点を従属変数、上記と同様の分散分析を行った。結果を表 2-4 に示す。この結果から、「授業や研究に真面目だ」にはやや有意な主効果、「自己主張が強い」と「情熱的だ」に対する印象評定においてはメディアによる有意差が見られた。この 3 項目において、いずれも携帯メールのほうが得点が高かった。

自由記述による検討結果：日本人学生が相互作用をした中国人留学生に対する印象の自由記述において、どれほどステレオタイプのものを言及したかについて、本研究の仮説を知らない 2 人のコーダーに評定させた。実際に、日本人学生の記述には、ステレオタイプに沿った内容があれば、反ステレオタイプのや中性的な内容もあった。そのため、自由記述に関する評定尺度も表 2-1 に示す 12 項目を用い、それぞれ「1, 反対である ; 4, どちらとも言えない ; 7, 該当する」という 7 件法で評定させた (付録 7)。評定に当たって、各ユニット化された記述が 12 項目に当てはまるかどうか、「1~7」から得点を選ばせた。当該日本人学生の言及した内容のステレオタイプ度は、まず 1 人のコーダーの「各記述に対して 12 項目における合計得点」を求め、当該日本人学生の全記述に対する評定得点の合計を求めた上、2 人のコーダーの平均得点を算出した。二人の評定得点の相関関係 $r = .99, p < .01$ で、非常に高い信頼性と言える。なお、日本人学生の自由記述及び記憶内容のステレオタイプ度のうち、言及していないもの (全員全ての回答が再生できたとは限らないため) を中性化すべきと考えた。そこで、本研究ではこの 2 つの結果を分析した際、「1~7」点法を「-3~-3」にした。すなわち、元の評定では「1, 2, 3, 4, 5, 6, 7」を「-3, -2, -1, 0, 1, 2, 3」点法にそれぞれ換算した。また、従属変数の自由記述と媒介変数としての記憶内容のステレオタイプ度に合わせるため、もう 1 つの媒介変数である中国人留学生の発話内容のステレオタイプ度も便宜上「-3~-3」に換算した。

上記の方法に変換した合計得点を従属変数として、2 (メディア : 電話・メール) \times 2 (話題 : 国際・日常) \times 2 (性別 : 男・女) の分散分析を行った結果、いずれの独立変数の主効果及び交互作用は見られなかった。メディアに関しては、 $F(1,27) = .43, p = .52, ns$ であった。

以上の結果をまとめると、仮説①は尺度による検討結果によって完全に支持されたが、自由記述による検討結果には支持されなかった。また、コミュニケーションメディアと話題の交互作用が認められなかったことから、仮説②は支持されなかった。

2.2.3.5 仮説③に関する検討

仮説①が尺度による検討結果によって支持されたため、次に日本人学生の印象形成におけるコミュニケーションメディアの効果がどの媒介変数によって説明されるかを分析した。その前に、まず各媒介変数において、コミュニケーションメディアによる効果を明らかにした。本研究の媒介変数とは、中国人留学生の全体発話量、その発話が曖昧に解釈されるかどうかの曖昧さ、日本語の文法的誤用、発話の丁寧さ、発話の適切さ、及び発話内容のステレオタイプ度の6つである。なお、前述したように、日本人学生の印象は記憶力の差に由来しないことを確認するため、日本人学生の中国人留学生の回答に対する全体記憶力、そして、発話内容のステレオタイプ度との関係を明らかにするため、記憶内容のステレオタイプ度についても分析した。以下それぞれ中国人留学生の発信したメッセージと日本人学生の記憶という2つの側面から分析し、諸変数においてコミュニケーションメディアによる効果の有無を確認した。

(1) 発信したメッセージについて

まず、中国人留学生がどれほどの量を発信したかを明らかにするため、その発話量をカウントした。発話量の数え方に関しては、笠木・大坊(2003)に倣い、トランスクリプト化した全ての発言を平仮名に直し、電話群では「うん、はい、ええ」のような単なる相槌を除き、メール群では絵文字や記号などを除いた上でMicrosoft Wordの文字カウント機能を利用して計測した。その結果を従属変数とした独立したサンプルの t 検定を行ったところ、コミュニケーションメディアによるやや有意な効果が見られた($t(33)=1.72, p<.10$, 携帯電話対携帯メール: 6.34 vs 3.14)。つまり、携帯メールの方が発話量がやや少なかった。

次に、中国人留学生の回答がコミュニケーションメディアによって、曖昧に解釈されるかどうかについて、2人のコーダーが分析対象となった35人の中国人留学生の各回答の曖昧さを評定した。評定尺度について、本研究は先行研究に倣い、「曖昧」を「コミュニケーションがいくつかの面で解釈できる程度」として定義し、「0 非常に明確、5 どちらでもない、10 非常に曖昧」という11件法を用いた(付録8)。評定をする際、まず7つの回答に対して、1人の各回答の評定得点に基づいて7つの回答の得点を求めた。そして、2人のそれに関する平均得点を算出して当該中国人留学生の各回答の曖昧さの得点とした。2人の評定者の相関関係は $r = .98$ で、とても高い信頼性を示したと言える。この得点の計算結果を従属変数とした独立したサンプルの t 検定を行ったところ、コミュニケーションメディアによる効果は有意であった($t(33)=4.35, p<.001$, 携帯電話群対携帯メール群: $M_s=1.74$ vs 2.50)。

即ち、音声に比べて、テキストのほうがより曖昧に解釈された。

そして、中国人留学生の日本語による文法的誤用がコミュニケーションメディアによってどの様に異なるのかについて、付録 9 に示した項目を評定基準に、中国人留学生の両群における発話をそれぞれユニット（意味を持つ最小単位の文）に分割した上、大学院生 3 名が誤用の有無を判定した。誤用があった場合は「1」、なかった場合は「0」とした。3 名の評定者の多数派評定を当該項目の評定値とした。各項目の誤用例は表 2-5 に示す。こうした誤用が、メディア、話題、性別によってどう異なるかについて次のように分析した。本研究では、中国人留学生が日本人学生の質問に自由回答したため、各留学生の発話量や記述量は同様ではなかった。発話量や記述量が多いほど、誤用数は多くなると見られ、誤用数そのものを従属変数として分析を行った場合、発話量や記述量による影響が避けられない。そこで、本研究ではまず、誤用があったユニット数と当該学習者の発話した全ユニット数の比率（不正解率）を求めた。そして、その比率を角変換¹¹した値を従属変数として、2（メディア）×2（話題）×2（性別）の分散分析を行った。その結果、メディアの主効果が有意であった（携帯電話対携帯メール： $M_s = .27$ (27.1%) vs $.44$ (42.3%); $F(1, 27) = 12.5\%$, $p < .01$) (カッコ内にある 27.1% と 42.3% は、平均角変換値から算出された比率であった)。すなわち、誤用率は、携帯電話群より、携帯メール群のほうが多かった。また、メディアと性別の交互作用効果も有意であった ($F(1, 27) = 7.33$, $p < .05$)。全体の平均誤用率（「不正解率」の単純平均）は 34.0% であり、携帯電話対携帯メール群は 27.0% と 41.4% であった。

次に、項目ごとの分析を行った。各項目の平均誤用率、および携帯電話群と携帯メール群それぞれの誤用率の結果を表 2-6 に示した。なお、ここでは、誤用率が 1.0% 以下の項目は分析対象としなかった (③, ⑥, ⑦, ⑨, ⑬, ⑮, ⑰, ⑱)。分散分析した結果、メディアの主効果が有意であったのは、①助詞（携帯電話対携帯メール： $M_s = .06$ (6.5%) vs $.13$ (12.7%); $F(1, 27) = 4.55$, $p < .05$)、⑩自他動詞の混同以外の動詞（電話対メール： $M_s = .02$ (1.8%)

¹¹ 個々のデータが比率である場合、母平均値（母比率）を p とすると分散は $p(1-p)/n$ になり、群間で p が異なれば分散も異なる。そのため、平均値の差の検定や一元配置分散分析の前提条件が満たされないことになってしまう。このような場合、比率 $p_i = r_i/n_i$ に対して、 $\arcsin(\sqrt{p})$ なる角変換を行うことで分散の不等性を解消できる。また、 $p = 1.0$ または $p = 0.0$ の場合には、そのままの比率ではなく、それぞれ $p = (n-0.25)/n$ と $p = 0.25/n$ の式によって算出された値を代入して計算した（岡，2008）。」

vs .05 (5.0%) ; $F(1, 27) = 5.48, p < .05$)であった。これらについては、携帯メール群が携帯電話群より誤用が多いという結果であった。

さらに、中国人留学生の発話の丁寧さと発話の適切さについて、付録 10・11 を基準に、2 名の日本語母語話者による評定を行った。得点の算出について、「丁寧さ」と「適切さ」はそれぞれ各発話に対する評定であるが、中国人留学生が自由に応答したため、それぞれの発話量は同様ではなかった。そこで、得点を算出した際、まず、2 名の評定者の各ユニットに対する評定得点をそれぞれ合計し、その合計得点の平均値を当該学習者の当該項目における得点とした。例えば、1 人の中国人留学生の回答が 8 つのユニットがあるとした場合、評定者の 1 人は「4, 5, 4, 5, 4, 4, 4, 4」(合計 34 点)とし、もう 1 人は「4, 4, 4, 5, 3, 4, 5, 4」(合計 33 点)とした場合、当該留学生に対する評定点数は「 $(34+33/2=33.5)$ 」になった。これに基づき、従属変数は「当該学習者の当該項目における得点/発話したユニット数」とした。

表2-5 各項目の誤用例

項目	例文
①a助詞(一般誤用)	相手の顔もみえるから、元気な様子が <u>み</u> たら安心しました。
①b助詞(無助詞)	認知言語心理学に興味(を)持っています。
②接続助詞	そのかわりに、帰国のときに、必ず <u>プレゼント</u> します <u>ので</u> 。
③形容詞・形容動詞を名詞としての誤用	短所はちょっと <u>冷たい</u> な人間と思います。
④動詞・形容詞・形容動詞の語尾変化	(前略)とても <u>充実</u> な毎日を過ごしていると思います。
⑤時制	以前は電話 <u>だけ</u> ですが今年 <u>は</u> はじめに母さんにプレゼントを贈りました。
⑦語順	農業経済研究領域では <u>トップ</u> レベルです。 <u>世界中</u> で
⑧自他動詞	より多くの方が豊かな <u>生活</u> をするために自分の力を貢献したいんです。
⑨推測を表すモダリティ	大学のとき専攻は日本語 <u>だった</u> の <u>か</u> もしれない <u>ので</u> 、日本に来て見よう <u>と</u> したと思います。
⑩名詞化の欠如・過剰	日本は街でよく <u>ホンムレース</u> の <u>人</u> を見掛けています。
⑪自他動詞の混同以外の動詞	簡単な生活ですが、結構充実だし、面白いところもある <u>ん</u> じゃないか <u>と</u> 思われて <u>い</u> ますが
⑫副詞	以前は電話 <u>だけ</u> ですが今年 <u>は</u> はじめに母さんにプレゼントを贈りました。
⑭否定形	クラスが <u>ない</u> で、その代わりにゼミです。
⑮仮定形	なんか政治を <u>はず</u> れたから(,)ちょっとできていると言えます(。)
⑯a普通体・丁寧体(文中)	<u>すばらしい</u> 、そして、そのまま日本で就職しよう。
⑯b普通体・丁寧体(文末)	わたしは工学部の学生ですけど、別の学部の講義も <u>い</u> っぱい <u>と</u> った。
⑰人の呼び方・示し方	以前は電話 <u>だけ</u> ですが今年 <u>は</u> はじめに <u>母さん</u> にプレゼントを贈りました。
⑱「お・ご」の使用	(神様に何を <u>お</u> 願いしますか) <u>ご</u> 家族の健康と幸福を <u>お</u> 願います。
⑲尊敬・謙譲表現	なんか、日本語学校の先生は <u>薦</u> めて <u>く</u> れた <u>の</u> だから。
⑳表現・恩恵の授受認定	(部活動について)一緒に <u>やら</u> せて <u>い</u> た <u>だ</u> き <u>ま</u> した <u>ん</u> です <u>け</u> ど(。)

表2-6 各項目の誤用率

項目	平均誤用率	電話		メール	
		男性	女性	男性	女性
①助詞	9.5%	5.0%	7.0%	14.9%	11.0%
②接続助詞	4.1%	3.0%	4.0%	6.0%	3.0%
③形容詞・形容動詞を名詞としての誤用	0.7%	—	—	—	—
④動詞・形容詞・形容動詞の語尾変化	4.3%	3.0%	4.0%	7.0%	4.0%
⑤時制	5.4%	2.0%	4.0%	5.0%	11.0%
⑥使役	0.0%	—	—	—	—
⑦語順	0.6%	—	—	—	—
⑧自他動詞	1.0%	1.0%	0.3%	0.8%	2.0%
⑨推測を表すモダリティ	0.8%	—	—	—	—
⑩名詞化の欠如・過剰	1.8%	2.0%	2.0%	4.0%	0.0%
⑪自他動詞の混同以外の動詞	3.3%	2.0%	2.0%	6.0%	4.0%
⑫副詞	1.4%	2.0%	1.0%	1.0%	2.0%
⑬「～テ」形	0.0%	—	—	—	—
⑭否定形	1.0%	0.7%	0.4%	0.8%	2.0%
⑮使役	0.4%	—	—	—	—
⑯普通体・丁寧体	8.5%	3.0%	7.0%	19.9%	5.0%
⑰人の呼び方・示し方	0.4%	—	—	—	—
⑱「お・ご」の使用	0.4%	—	—	—	—
⑲尊敬・謙譲表現	0.5%	—	—	—	—
⑳表現・恩恵の授受認定	1.0%	0.9%	0.8%	0.8%	1.0%

この方法で算出した得点を基に、2名の評定者の評定得点の相関係数はそれぞれ $r=.99$ （丁寧さ）と $r=.98$ （適切さ）であった。これらは高い信頼性を示した。

「丁寧さ」について、2（メディア：電話・メール）×2（話題：国際・日常）×2（性別：男・女）の分散分析を行った。その結果、性別の主効果のみが認められた（男性対女性： $M_s=8.61$ vs 9.16 ; $F(1,27)=6.56, p<.05$ ）。しかし、メディア・話題のいずれの主効果及び交互作用は見られなかった。

「適切さ」について、2（メディア：電話・メール）×2（話題：国際・日常）×2（性別：男・女）の分散分析を行った。その結果、話題と性別のそれぞれの有意な主効果が見られた（前者 $F(1,27)=7.79, p<.01$; 後者 $F(1,27)=4.75, p<.05$ ）。また、メディアと話題の有意な交互作用も認められ（ $F(1,27)=5.14, p<.05$ ）、話題に分けて下位分析を行った結果においても、コミュニケーションメディアによる有意差が見られなかった。

最後に、中国人留学生の回答において、どれほどステレオタイプに沿った発話内容があったかについて、7つの質問に対する各回答がステレオタイプの12項目について（表2-1）、

「1, 反対である ; 4, どちらとも言えない ; 7, 該当する」という 7 件法で (付録 12), 本研究の仮説を知らない 2 人のコーダーに判断させた ($r = .88$). 中国人留学生のステレオタイプの回答得点は「-3~3」点法に換算して, 1 人の評定者の「各回答に対する 12 項目における合計得点」を 1 つの回答の得点とした。全部で 7 つの回答があったため, 1 人の評定者の「7 つの回答に対する 12 項目における合計得点」を算出し, 2 人のそれに関する平均得点を当該参加者の発話内容のステレオタイプ度とした。この変数を従属変数とした独立したサンプルの t 検定を行ったところ, コミュニケーションメディアの効果は有意傾向であった ($t(33) = 1.76, p < .10$, 携帯電話対携帯メール $M_s = 20.3$ vs 27.6)。つまり, 携帯メールのほうがステレオタイプに沿った発話をする傾向があった。

(2) 記憶について

まず, 日本人学生がどれほど相手の回答を覚えているか, その全体記憶力は携帯メールと携帯電話によって差があるかどうかについて分析をした。相手の回答についてメモを取った 1 人の日本人学生を分析対象からはずしたが, 残りの 34 人の記憶再生について, 3 人のコーダーが文字化された資料を参照しながら, 「0.再生なし, 1.部分的再生, 2.完全な再生」の 3 件法で, 質問通りに答えた内容に対する再生を評定した (付録 13) ($r_s = .90 \sim .94$)。そして, 「各参加者の 7 つの質問の再生に対する 1 人の評定者の得点」を求め, 3 人のそれに関する平均得点を当該日本人学生の全体記憶力として算出した。この変数を従属変数とした独立したサンプルの t 検定を行ったところ, コミュニケーションメディアによる有意な効果は見られなかった。つまり, 日本人学生の印象形成は携帯メールのほうがより捨てる絵タイプのようになったのは記憶力の差に由来しないことが明らかになった。

次に, 日本人学生の記憶再生において, どれほどステレオタイプに関する記述をしたかについて, 各記述をステレオタイプの 12 項目について (表 2-1), 「1, 反対である ; 4, どちらとも言えない ; 7, 該当する」という 7 件法で, 本研究の仮説を知らない 2 人のコーダーに評定させた (付録 14)¹² ($r = .99$)。2 人のコーダーの平均評定得点を当該参加者の記憶内容のステレオタイプ度とし, 「-3~3」点法に換算した。そのうえ, 1 人のコーダーの「全ての記憶再生に対する 12 項目の合計得点」をそれぞれ求めた上, 2 人の平均得点を算出した。この変数を従属変数とした独立したサンプルの t 検定を行ったところ, コミュニケーシ

¹² 中国人留学生の発話内容のステレオタイプ度, 日本人学生の記憶内容のステレオタイプ度, 及び印象の自由記述に関する評定方法と判断基準は付録 15 を参照されたい。

ョンメディアによる有意な主効果が見られた ($t(33)=2.39, p<.05$, 携帯電話対携帯メール : $M_s=10.7$ vs 16.6)。即ち、携帯メールのほうが記憶内容のステレオタイプ度が高かった。そして、中国人留学生の発話量と発話内容のステレオタイプ度がいかに日本人学生の記憶内容のステレオタイプ度に影響を及ぼすかを明らかにするため、コミュニケーションメディアによる主効果が見られた諸変数を独立変数、記憶内容のステレオタイプ度を従属変数とした重回帰分析を行った。結果、発話内容のステレオタイプ度による有意な正の影響と発話量によるやや負の影響が見られた (それぞれ $\beta=.77, p<.001$; $\beta=-.24, p<.10$)。即ち、携帯メール群の中国人留学生の発話量が少なく、かつ発話内容のステレオタイプ度が高かったため、日本人学生の記憶内容のステレオタイプ度も高くなった。

以上の検討結果より、仮説 3 が概ね支持された。諸変数におけるコミュニケーションメディアの効果をまとめて表 2-7 に示す。

2.2.3.6 仮説④に関する検討

仮説③が概ね支持されたため、本項では一体どの変数が日本人学生の印象形成に媒介効果を与えたかについて分析した。表 2-7 に示した変数のうち、コミュニケーションメディアの主効果が見られた変数を独立変数とし、仮説①の検討で用いた日本人学生の印象形成 (12 項目に対する評定得点の合計) を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、発話量と日本語の文法的誤用を独立変数とした場合のモデルの適合度が最もよかった。モデルの

表2-7 中国人留学生の発話と日本人学生の記憶に関わる諸変数におけるメディアの効果

変数	両群の平均得点	検定結果
1. 発話量	電話対メール $M_s= 6.3$ vs 3.1	$t(33)=1.72, p<.10$
2. 発話の曖昧さ	電話対メール $M_s=1.7$ vs 2.5	$t(33)=4.35, p<.001$
3. 日本語の文法的誤用	電話対メール $M_s=.27$ vs $.44$	$t(33)=2.75, p<.05$
4. 発話の丁寧さ	電話対メール $M_s= 9.0$ vs 8.9	$t(33)=.43, ns$
5. 発話の適切さ	電話対メール $M_s= 4.4$ vs 4.6	$t(32)=.95, ns$
6. 発話内容のステレオタイプ度	電話対メール $M_s= 20.3$ vs 27.6	$t(28)=1.76, p<.10$
7. 日本人学生の全体記憶力	電話対メール $M_s= 10.5$ vs 11.0	$t(32)=.75, ns$
8. 記憶内容のステレオタイプ度	電話対メール $M_s= 10.7$ vs 16.6	$t(33)=2.39, p<.05$

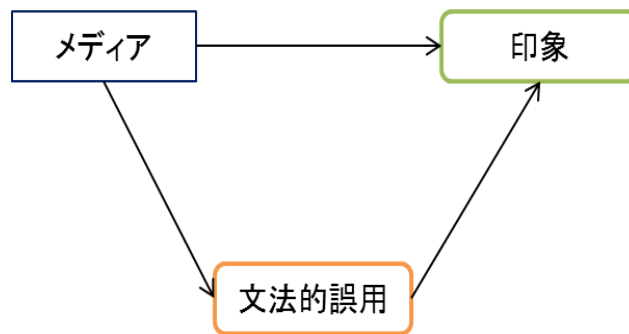


図2-2 日本人学生の印象形成における媒介変数の効果

決定係数は $R^2=.19$, $p<.05$ であり、日本語の文法的誤用による有意な正の影響が見られた ($\beta=.40$, $p<.05$)。即ち、日本人学生の中国人留学生に対する印象は、携帯メールのほうがよりステレオタイプ的になったのは、中国人留学生の携帯メールにおける日本語の文法的誤用が多かったことに媒介された (図 2-2)。以上の検討結果より、仮説④も支持された。

2.2.4 考察

本研究には 3 つの目的があった。第 1 の目的は、日本人学生が中国人留学生に対する印象を形成する際に、携帯メールか携帯電話のいずれかによってその印象が異なるかどうかを検討することであった。結果、仮説①は尺度による検討結果では支持されたが、自由記述による検討結果では支持されなかった。Epley & Kruger (2005) と違って、本研究では、日本人学生がいずれの群においても実際の中国人留学生と交流した。それでも Epley & Kruger (2005) と同様の結果が得られ、本研究の結果は彼らの研究知見を確証するものである。なお、Epley & Kruger (2005) は自由記述による検討を行っていない。

尺度による測定結果と自由記述による測定結果の差異について、主としては以下の 2 つの理由があると考えられる。まず、印象の自由記述については、もともと最も印象的なものに関して書いたものであり、必ずしもステレオタイプ的な言及とは限らなかった。例えば、多くの日本人学生が、男女とも相手の顔文字使用の有無を言及し、それが印象との関係にも触れたり、相手が「優しい/優しそう」「感じの良い印象」「丁寧で誠実な方」「日本語に中国語訛りがありそう」などを書いたりするケースが多かった。本研究においては、これらの記述が提示された 12 項目と無関係だと判断された。実際に、35 名の日本人学生が合計 181 のユニット化された自由記述をし、そこから 2172 個の点数が得られた。本研究では 12

項目があり、それぞれの得点範囲は「-3~3」であったからだ。この2172個のうち、1977個(91.02%)はステレオタイプと関係しない(「0」)と判定された。加えて、各項目の得点は「-3~3」で、12項目に対する合計得点の範囲は「-36~36」であったが、実際181ユニットの自由記述のうち、74個(40.88%)の得点は「0」であり、得点範囲が「-3~3」にあるのは75.14%で、「-6~6」にあるのは95.58%であった。そして、最高得点と最低得点はそれぞれ12と-9であった。これらの得点分布は限られており、この「レンジ制限」に由来してコミュニケーションメディアの主効果を検出するのが難しかったのかもしれない(Hays, 1994)。この説明は、尺度による検討結果を重視させ、コミュニケーションメディアの違いによる影響がある確信度を高めるが、今後更なる検討が必要である。

本研究の第2の目的は、仮説②に示したように、携帯メール群と携帯電話群における印象形成の差異が、2種類の話題によってさらに拡大するかどうかを検証することであった。本研究は、テキストメッセージと音声メッセージによる印象形成の差異が日常的话题より、国際的话题の方が大きいのではないかと予測した。しかしながら、いずれの話題も日本人学生の印象形成における効果は認められなかった。即ち、日常的话题の場合でも、カテゴリ化を弱めることができなかった。それはおそらく、本研究の実験に参加した日本人学生は事前に相手が中国人留学生だと知っており、実験開始前にすでに「相手が外集団の人」とカテゴリ化したと思われる。

本研究の第3の目的は、コミュニケーションメディアによる中国人留学生の印象の違いが、どの変数によって説明されるかを検討することであった。尺度による検討結果では、全体の印象(12項目)に関しては、Epley & Kruger (2005)と異なって、日本人学生の中国人留学生に対する印象形成は、中国人留学生の発話量や発話の曖昧さ、発話内容のステレオタイプ度、日本人学生の記憶内容のステレオタイプ度の違いによって説明されず、中国人留学生の日本語の文法的誤用によって説明されることを示した。本研究の結果がEpley & Kruger (2005)の知見と異なった理由は以下の通りだと考えられる。

Epley & Krugerの研究では、テキストと音声のメッセージが同一であったが、本研究では、どちらのメッセージの場合も実際の参加者とコミュニケーションをさせたため、発信したメッセージの量や内容、日本語の文法的誤用なども異なっていた。前述したように、異文化コミュニケーションをする際に、言語使用が対人関係の構築に大きな影響を与える。これは本研究の結果より新たに実証された。つまり、中国人留学生と日本人学生の異文化コミュニケーションが行われた過程に伴う印象形成においては、日本語の文法的誤用のほう

が影響が強かった。

2.2.1 で述べたように、携帯メールでは日本語による入力インタフェースは中国人留学生にとっては認知負荷の高い行動であり、今後スマホが普及し、スマホを用いて日本語によるコミュニケーションをするには、入力変換が必要であることはこれまでの携帯メールと同様である。留学生の日本語使用が日本人学生の印象形成に影響を及ぼすという点においては、留学生の携帯メール・スマホメールによる日本語使用、とりわけもともと習得し難い助詞などの使用に対して、より多くの指導が必要なが示唆された。

2.2.5 まとめと今後の課題

これまで述べてきたように、本研究は、(1) 携帯電話よりも携帯メールを使用したほうが、中国人留学生に対する印象がよりステレオタイプ項目に沿いうること、そして、(2) それは、中国人留学生の日本語の文法的誤用に媒介されたことが示された。ケータイの使用モード（携帯メールか携帯電話のいずれか）によって印象が変化しうるだけでなく、それに媒介効果を与えるのは中国人留学生の日本語の文法的誤用であることを示した本研究の知見は、ケータイによる異文化コミュニケーションが今後も続いていく中、この問題が1つの意味ある研究対象となりうることを示したものと考えられる。

なお、本研究の実験参加者は限定されている。また、本研究の分析対象は日本語能力が中上級以上の中国人留学生を対象としたが、それは日本人学生とコミュニケーションするため、ある程度の日本語能力が要求されたからである。さらに、本研究は直接日本人学生が中国人留学生以外の留学生との異文化コミュニケーションに関する知見を提供していない。本研究結果を一般化するための研究は、将来的に意味のあるものと考えられる。

2.3 研究2：中国人留学生と日本人学生のケータイ¹³使用に関する比較

2.3.1 目的

本研究では、日本人学生と中国人留学生の日本ケータイによるメール・電話・インターネットの使用実態とともに、それぞれの使用に個人的要因（年齢・性別・携帯メールの入力熟練度）による影響の有無を検討する。加えて、中国人留学生の使用には、彼らの年齢・性別・滞日歴・日本語能力・日本語学習歴による影響の有無も分析する。最後に、本研究で得られた結果に基づき比較をし、諸相違点をまとめ、日本人学生と中国人留学生のケータイ使用における特徴について考察する。

2.3.2 方法

2.3.2.1 日本人学生を対象にした調査

対象者：関東地域の国・公・私立大学に在籍する学部生・大学院生計40名（男性15名，女性25名）であった。彼らの平均年齢は21.9歳（レンジ19～25歳，標準偏差.28）であった。

期間：2008年11月下旬～2009年2月上旬

方法：研究1は主として実験室による実験法であったが、ケータイによるコミュニケーションにおける印象形成を検討するため、実験が始まる前に、個人情報とともに、ケータイ使用に関して質問紙法で測定した。

質問紙：本調査は個人的要因とケータイの使用頻度の2部分で構成された（付録2）。

(1) **個人的要因**：性別，年齢，出身地及び専攻等を自由記述で記入させた。

(2) **ケータイ使用について**：

¹³日本人学生のデータは2008年11月下旬～2009年2月上旬の間に収集したものであり，中国人留学生のケータイ使用に関するデータは2011年6月中上旬に収集したものであった。日本人学生の場合はiPhoneが発売された直後であったため，ほとんどは一般ケータイを使用したと思われる。また，Googleの調査結果によると，2011年第1四半期の時点で，日本全体のスマホ所持率は6%であり，また2012年3月卒業する大学生を対象にした結果では，32%ほどがスマホを利用して就職活動を行っている（プレスリリース，2011）。これらの結果から，留学生らのスマホ所持率も3割程度ではないかと考え，この時点で主としてはケータイを使用していたと推測する。ここでは便宜上「ケータイ」と表記するが，「スマホ」使用も含まれると思われる。参考URL：<http://services.google.com/fh/files/misc/omp-2013-jp-local.pdf>，<http://m.reclog.jp/release/release110512.pdf> 【参照日：2014年8月8日】

携帯メール：先行研究に倣い、それぞれ「⑦50 通以上」「④20～30 通」「①それ以下」といった 7 件法で尋ねた。

携帯電話：「⑦10 回以上」「④2 回程度」「①それ以下」について 7 件法で尋ねた。

携帯インターネットへのアクセス：「⑦2 時間以上」「④40 分～1 時間」「①全くしない」について 7 件法で回答させた。

携帯メールによる入力熟練さ：「あなたは、携帯メールを早く打つことに慣れていると思いますか」及び「あなたは、携帯メールの入力が上手だと思いますか」について、「⑦非常にそう思う」、「④どちらとも言えない」「①全くそう思わない」の 7 件法で尋ねた。

2.3.2.2 中国人留学生を対象にした調査

対象者：関東地域の国立大学に在籍する学部生・大学院生（修士・博士）・その他（交換留学生・研究生等）計 397 名の留学生であった（第 3 章の全体分析対象）。なお、ここでは、日本人学生の結果と比較するため、同年代層の中国人留学生に関するデータを抽出し、本分析の対象とした。結果、124 名の中国人留学生が対象となり、平均年齢は 23.8 歳（レンジ 20～26 歳，標準偏差 1.50）であった。

期間：2011 年 6 月 1 日～6 月 20 日

方法：大規模な質問紙調査を行った。

質問紙：次章において詳しく述べるが、付録 16 の質問紙調査票は①個人的要因，②ケータイ使用，③PC 使用，④異文化適応状況，の 4 部分で構成されたが，ここでは①と②のみを取り上げた。

(1) **個人的要因**：性別，年齢，専攻，滞日暦，日本語能力（日本語能力試験（JLPT）の点数及び成人日本人の日本語能力を 100%とする場合の自己評価），日本語学習歴等を自由記述で記入させた。

(2) **ケータイ使用について**：

携帯メール：先行研究に倣い、それぞれ「⑦50 通以上」「④20～30 通」「①5 通以下」といった 7 件法で尋ねた；

携帯電話：「⑦10 回以上」「④2 回程度」「①それ以下」について 7 件法で尋ねた；

携帯インターネットへのアクセス：「⑦2 時間以上」「④40 分～1 時間」「①全くしない」について 7 件法を用いて回答させた；

日本ケータイの使用歴：「⑦8 年以上」「④3 年以上～4 年未満」「①1 年未満」の 7 件法；

携帯メールによる入力熟練さ：「あなたは、日本語もしくは英語による携帯メールの入力（語彙）表現やスピードなどが上手だと思いますか」について、「⑦非常にそう思う」、「④どちらとも言えない」「①全くそう思わない」の7件法で尋ねた。

2.3.3 結果と考察

日本人学生と中国人留学生の関連情報：本調査の分析対象になった日本人学生と中国人留学生の関連情報は表 2-8 に示す。ここから、日本人学生の男女比は約 4 対 6 であり、中国人留学生のほうは半々であることが分かった。また、本分析では同じ年代層の中国人留学生を対象として抽出したが、レンジは日本人学生より広がった。中国人留学生の滞日暦は約 3 年であり、日本語能力試験 1 級、2 級に合格していた者はそれぞれ 82 人（66.1%）と 15 人（12.1%）であり、自己評価を含めて、日本語能力が高かった。平均日本語学習歴も 4 年以上であった。

ケータイ使用について：まず、中国人留学生のケータイ使用歴は平均 3.6 年（レンジ：1～7, $SD:1.74$ ）、彼らの平均滞日歴と一致している（表 2-8）。

次に、日本人学生と中国人留学生の 1 日あたりの携帯電話の使用頻度を表 2-9 に示す。ここから、日本人学生の 6 割以上は「ほとんどしない」もしくは「2, 3 日に一回」としたのに対して、中国人留学生の 6 割以上は「1 回」「2 回」「3 - 5 回」「5 - 10 回」使用していたことが分かった。そして、日本人学生と中国人留学生の携帯電話の使用頻度に差があるかどうか、独立したサンプルの t 検定を行った。結果、日本人学生に比べて、中国人留学生のほうがより携帯電話を使用していたことが分かった（日本人学生対中国人留学生： $M_s=2.28$ vs 3.44 , $t(96.29)=5.49$, $p<.001$ ）。

日本人学生と中国人留学生の 1 日あたりの携帯メールの送信頻度は表 2-10 に示す。この表から、日本人の 8 割以上は一日「5 - 10 通」「10 - 20 通」「20 - 30 通」を送信しているのに対して、6 割近くの留学生は「5 通以下」としていたことが分かった。日本人学生と中国人留学生の携帯メールの送信頻度に差があるかどうかを究明するため、独立したサンプルの t 検定を行った。その結果、中国人留学生より、日本人学生の携帯メールの送信頻度が高かったことが分かった（日本人対中国人： $M_s=2.25$ vs 1.69 , $t(162)=3.20$, $p<.01$ ）。また、携帯メールの入力熟練度について、日本人学生の平均得点は 4.35 で（レンジ 1～7）、中国人留学生の平均得点は 4.41（レンジ：1～7）であり、両者には有意差が見られなかった。

表2-8 日本人学生と中国人留学生の個人情報

項目	日本人学生	中国人留学生
男女比	3 対 5	16 対 15
平均年齢	21.9	23.8
レンジ	19～25	20～26
滞日歴	×	34 ヶ月
日本語能力	×	0.68
日本語学習歴	×	52 ヶ月

表2-9 携帯電話の使用頻度

使用頻度	日本人学生	中国人留学生
ほとんどしない	25.0%	12.1%
2, 3 日に 1 回	37.5%	21.0%
1 回／日	25.0%	15.3%
2 回／日	10.0%	19.4%
3-5 回／日	2.5%	26.6%
5-10 回／日	0.0%	5.6%
10 回／日	0.0%	0.0%
合計	100.0%	100.0%

さらに、日本人学生と中国人留学生の 1 日あたりの携帯インターネットのアクセス時間を表 2-11 に示す。ここから、日本人学生の 8 割以上は使用しているのに対して、中国人留学生の約半数は「全くしない」ことが分かった。日本人学生と中国人留学生の携帯インターネットへのアクセス時間に差があるかどうかを明らかにするため、独立したサンプルの t 検定を行った。その結果、両者には有意差が見られなかった（日本人学生対中国人留学生： $M_s=2.88$ vs 2.40 , $t(162)=1.45$, ns ）。

個人的要因の影響：日本人学生のケータイ使用に、彼らの個人的要因（性別¹⁴・年齢）・

¹⁴ 「性別」は名義尺度であるため、本論文では「男性」を「1」、「女性」を「2」とそれぞれダミー変数とし、重回帰分析を行った。以下同様。

表2-10 携帯メールの送信頻度

1日の使用頻度	日本人学生	中国人留学生
5通以下	15.0%	58.1%
5～10通	52.5%	23.4%
10～20通	25.0%	12.1%
20～30通	7.5%	4.0%
30～40通	0.0%	2.4%
40～50通	0.0%	0.0%
50通以上	0.0%	0.0%
合計	100.0%	100.0%

表2-11 携帯インターネットの使用時間

1日の使用頻度	日本人学生	中国人留学生
全くしない	17.50%	46.0%
20分未満	50.0%	19.3%
20～40分	0.0%	13.7%
40～60分	10.0%	8.9%
1時間～1時間20分	12.5%	1.6%
1時間20分～2時間	2.5%	3.2%
2時間以上	7.5%	7.3%
合計	100.0%	100.0%

携帯メールの入力熟練度が影響を及ぼすかどうかについて、携帯メール・携帯電話・携帯インターネットの使用頻度をそれぞれ従属変数とし、この3つの変数を独立変数とする重回帰分析を行った。その結果、携帯メールの使用においても、携帯電話の使用においても、いずれの独立変数の主効果、及び交互作用は見られなかった。携帯インターネット使用に関しては、入力の熟練度による有意傾向が見られた ($\beta=.28, p<.10$)。

次に、中国人留学生のケータイ使用において、日本人学生と同様に、性別・年齢・携帯メールの入力熟練度に加え、滞日歴、日本語能力、日本語学習歴、日本ケータイの使用歴

も含めて独立変数とし、携帯メール・携帯電話・携帯インターネットの使用頻度をそれぞれ従属変数とした重回帰分析を行った。結果は以下の通りであった。

携帯メールの使用において、性別と携帯メール入力の実験による有意な効果が見られた。それぞれ $\beta = .21, p < .05$; $\beta = .26, p < .05$ であった。すなわち、携帯メールの入力が実験している中国人女性留学生の方が、より携帯メールを使用していた。

携帯電話の使用において、滞日歴と日本語能力による影響が見られた。それぞれ $\beta = .26, p < .05$; $\beta = -.24, p < .05$ であった。すなわち、滞日歴が長ければ長いほど、日本語能力の低い留学生のほうが、より携帯電話を使用していた。

携帯インターネットの使用において、性別とメール入力の実験による有意な効果が見られた。前者は $\beta = .20, p < .05$; 後者は $\beta = .27, p < .05$ であった。そして、滞日歴によるやや有意な影響も見られた ($\beta = -.24, p < .10$)。すなわち、携帯メールの入力が実験しているが、滞日歴は比較的短い女性留学生の方が、よりケータイを利用してインターネットにアクセスしていた。

以上の結果から、日本人学生のケータイ使用においては、インターネットの使用にメール入力の実験によるやや有意な効果が見られた以外、性別や年齢による影響は見られなかった。一方、中国人留学生のケータイ使用においては、性別や滞日歴、日本語能力、携帯メールの入力実験による影響が認められた。

また、本研究の検討より、日本人学生に比べて、中国人留学生は携帯電話のほうを多用し、携帯メールはそれほど使用していないことが示された。しかし、この結果は、中国人留学生は携帯メールより携帯電話のほうを多用したことを示したものではない。表 2-9 に示したように、1/4 の日本人学生は「ほとんどしない」、4 割近くは「2, 3 日に一回」と回答したのに対して、中国人留学生の 12.1% は「ほとんどしない」、2 割以上は「2, 3 日に一回」と回答した。つまり、日本人学生の 4 割ほどは「1 回/日」以上したのに対して、中国人留学生の 6 割ほどは「1 回/日」以上したため、使用頻度に差が見られた。

同様に、表 2-10 に示したように、85% の日本人学生は一日に 5 通以上の携帯メールを送信したのに対して、4 割以上の中国人留学生は一日に 5 通以上の携帯メールを送信した。即ち、中国人留学生が携帯メールを使用しないのではなく、日本人学生の携帯メールの高い使用頻度に対して有意差が見られた。

これまで、留学生のケータイ使用について検討した先行研究の殆どは、留学生らは携帯メールより携帯電話のほうを多用すると指摘している (e.g., 馬場・福田, 2010)。金 (2012)

は、韓国人が携帯メールより携帯電話を好む傾向について、「即時かつ直接的にコミュニケーションをとろうとする態度と関係がある」としている。第1章で述べた、日本人は古くから文字によるコミュニケーションを好んでおり、この傾向は携帯メールの普及・使用に伴い更に強まっている。しかし、本研究の結果に示したように、中上級の日本語能力を有する留学生は必ずしも携帯メールより携帯電話を多用するとは限らない。今後、コミュニケーションメディアの使用と文化の関係についてより詳細な検討が必要であることが新たに示された。

更に、本調査の結果では、男女による差は見られず、携帯メールの使用頻度もそれほど高くないことが分かった。これは本調査の対象が東京大学・お茶の水女子大学のような一流大学に在籍する学生であり、教育レベルが高く、勉学・研究に忙しい学部生・大学院生にはケータイを使用する時間が限られているのかもしれない。それはこれまでの先行研究で取り上げられた対象と異なった大きな理由の1つと考えられる。この意味では、日本人学生のケータイ使用に、携帯メールと携帯電話に対する使い分け (e.g., 橋元, 2001; 松田, 2001), 性別による使用の嗜好 (黒角・深田, 2005), 及び携帯メールの使用の対人関係に及ぼす諸影響が性別に異なっている (足立ら, 2003) ことは一概ではなく、ユーザの教育背景によって異なる可能性もあると示唆された。

上述した通り、本研究の結果から、日本人学生と中国人留学生の携帯メールと携帯電話の使い方が異なっており、また全体のケータイ使用において、日本人学生には個人的要因による影響が見られなかったのに対して、中国人留学生には有意な効果が認められたことが明らかになった。

2.4 本章のまとめ

本章は、研究1「ケータイコミュニケーションにおける日本人学生の中国人留学生に対する印象形成」と研究2「中国人留学生と日本人学生のケータイ使用に関する比較」の2つで構成された。

研究1の検討結果より、日本人学生が中国人留学生に対する印象形成は、携帯電話に比べて、携帯メールのほうがよりステレオタイプのになり、それは中国人留学生の日本語の文法的誤用に媒介されたことが示された。

また、中国人留学生のケータイ使用による日本語は、(1) 文法的誤用の面では、助詞、普通体・丁寧体の使い分け、時制、自他動詞以外の動詞の誤用が多く、全体の誤用率は34.01%で、携帯電話に比べて、携帯メールのほうが誤用率が高かったこと、とりわけ、助詞と自他動詞以外の動詞の誤用においては、いずれも携帯電話より、携帯メールのほうが多かったこと；(2) 言語行動様式の面では、発話の丁寧さにおいても適切さにおいてもコミュニケーションメディアによる差異は見られなかったこと、が明らかになった。

研究2の検討結果から、日本人学生に比べて、中国人留学生は携帯電話を多用し、携帯メールの使用頻度はそれほど高くは無かった。しかし、これは日本人学生の携帯メールと携帯電話の使用頻度を対照に比較した結果であり、中国人留学生が携帯メールより携帯電話を多用することを示した結果ではない。

また、中国人留学生のケータイ使用全体において、いずれも個人的要因による影響があったことが示された。第1章で述べたように、ユーザのコミュニケーション行動とコミュニケーションメディア観が緊密に関連していることから、本研究の結果を含めて考えると、中国人留学生の携帯電話と携帯メールに対するコミュニケーションメディア観が日本人学生と異なる可能性があること示唆された。

以下、本研究の検討から導かれた新たな要因・検討対象について述べる。

「コミュニケーションメディア観」と「コミュニケーションメディア使用」の関係について、これまでの先行研究では、日本人学生が携帯メールと携帯電話に対する認識・心理的特性が異なっており、また心理的認識が使用頻度を規定すると報告されている（都築・木村、2000）。しかし、研究2が明らかにしているように、中国人留学生のケータイ使用が個人的要因に大きく影響され、また、コミュニケーションメディアの機能が変化してきており、その使用の利便性・使いやすさから、ある特定のコミュニケーションメディアを好んで使用することもあると考えられる。あるコミュニケーションメディアを多用すればす

るほど、それに対する心理的認識がほかのコミュニケーションメディアに対するものと異なっており、それに由来して、コミュニケーション行動にも影響すると考えられる。この意味では、時代の変化とともに、留学生のコミュニケーションメディア観とコミュニケーションメディア使用の関係を新たに検討する必要がある。

「コミュニケーションメディア」について、本章は主としてケータイ使用に関する検討であった。CMCとして最も代表的なのはPCメール・PCインターネットであり、携帯メールと多くの相違点もあるとされている。とりわけ、研究1の結果に示した携帯メールの文法的誤用が携帯電話より多かったことは、PCメールの場合にも当てはまるかどうかを検討する必要がある。今後、CMCを検討するに当たっては、PCメール・PCインターネットも含めるべきと考えられる。

さらに、「対象」について、本章の対象は日本人学生と中国人留学生であった。日本にいる留学生の6割以上は中国系留学生であり、また、中上級日本語能力を有する留学生のサンプルを確保するため、本研究で取り上げられた対象の代表性はそれほど損なわれていないが、留学生全般のコミュニケーションメディア使用とその影響を検討するには、他の出身国・地域の留学生も対象にする必要がある。

第3章 留学生のコミュニケーションメディア観と 使用状況，個人的要因との関係

3.1 本章の背景と目的

馬場（2010）は留学生の ICT（ケータイと PC）使用について検討した結果，日本人学生に比べて，留学生は携帯電話を多用しており，日本語能力の低い留学生にとって携帯メールは使い勝手等が悪いため，（日本人学生と）ケータイコミュニケーションへの参加の障壁となっている，と指摘している。それに由来して，コミュニティ参加というつきあいに広がるのが少なく，個人的な地域イベントへの参加数や親しい日本人数もあまり増加せず，満足度も高まらない，ともいっている。しかし，日本のケータイは日本語（及び英語）による入力であるため，滞日歴・日本語学習歴が長く，日本語能力が高く，携帯メールの入力が熟練すればするほど，携帯メールをより頻繁することが予想される。本章・研究 3 では，これを明らかにする。

第 1 章で述べたように，ユーザのコミュニケーション行動とコミュニケーションメディア観が緊密に関係しており，コミュニケーションメディアの及ぼす影響を検討するにはユーザのコミュニケーションメディア観を取り上げることが重要である。本章・研究 3 では，留学生の携帯メールと携帯電話の使用実態を明らかにするうえ，それぞれに対するコミュニケーションメディア観を明らかにする。なお，現在 PC メールが依然として最も使われるコミュニケーションメディアの 1 つであるため，研究 3 では PC メールの使用状況とそれに対するコミュニケーションメディア観も取り上げ，携帯メールと携帯電話と比較する。

ところで，近年，留学生を対象とした日本語教育において様々なメディアを利用した効果が期待されつつある。秋山（2011）は APU の上級日本語能力を有する留学生を対象に，「情報収集」「情報選択」「情報発信」に関する項目を中心に意識調査を行った。結果，①図書館の活用技術，②信頼性のある情報の選択技術，③まとまりのある文章の作成技術と多用なメディア素材の編集技術の指導を強化する必要がある，とりわけアカデミックスキルズとメディアリテラシーを積極的に指導する必要があるとしている。しかし，留学生のメディアリテラシーに影響を及ぼす要因は何なのかは解明されていない。そこで，研究 4 では，留学生のコミュニケーションメディア観をメディアリテラシーに対する認識まで広げて，スマホの使用によって，留学生のコミュニケーションメディアリテラシーに対する認識がコミュニケーションメディアの使用とどう関係するかを明らかにする。

3.2 研究3：留学生のコミュニケーションメディア観及びそれに影響を及ぼす諸要因

3.2.1 先行研究と仮説

日本のケータイは日本語もしくは英語での入力为前提であるため、滞日歴や日本語学習歴、ケータイ使用歴が長く、日本語能力が高く、日本のケータイ使用に慣れており、携帯メールの入力が熟練すればするほど、より携帯メールを頻繁に使用するのではないかと予想される。本研究ではまずこれを明らかにする。

これまで、日本人学生を対象に検討した結果では、対面・携帯電話・携帯メール・PCメールに対するコミュニケーションメディア観は「対人緊張」「親和感情」「情報伝達」の3因子で構成され、それぞれの面において、コミュニケーションメディアごとによって相違があることが分かった（都築・木村，2000）。また、日本人学生の対面・携帯電話・携帯メールに対するコミュニケーションメディア観は相手との親密度によって異なっていることも明らかになっている（岡本・高橋，2006）。更に、電子メールやチャットといったCMCと対面に比べて、電話による相互作用のほうが最も自然で、満足度も最も高かった、とConnellらが言っている（2001）。これらのことから、コミュニケーションメディア観は一定したものではなく、使用場面や相手との関係、文化によって異なっており、また、コミュニケーションメディア使用の対人関係への影響は、コミュニケーションメディア観と連動していることも分かった。上述したように、日本のケータイ使用に慣れ、日本語能力が高く、携帯メールの入力が熟練した留学生は携帯メールを多用すると予想されるが、逆に日本語能力が低く、携帯メールの入力に慣れていない留学生のほうは携帯電話を多用すると予想される。本研究では、留学生の携帯メールと携帯電話の使用実態を明らかにするとともに、それぞれに対するコミュニケーションメディア観がどのように異なるのかも取り上げ、分析する。なお、現在PCメールは依然として最も使用されているコミュニケーションメディアの1つであるため、本研究ではPCメールの使用状況を調べるとともに、それに対するコミュニケーションメディア観も取り上げ、比較する。

以上の議論を踏まえ、本研究では以下の仮説について検討する。

仮説：日本語能力が高い留学生はより携帯メールを多用し、その結果、情報伝達・友情増進・交際範囲¹⁵における携帯メールの効果を高く評価するだろう。一方、メールの特性上

¹⁵都築・木村（2000）は、日本人学生を対象にした調査結果が「情報伝達」「親和感情」「対人緊張」と分類した。本研究では、留学生が友人のみならず、在日生活において、メディアを利用し

対人緊張感は低くなるだろう。また、PC メールでは入力の使用言語に制限がないため、留学生は携帯メールと同様に PC メールを使用するが、随時性が劣るため、日本語能力の高い留学生にとっては情報伝達・友情増進における評価が低くなると予想される。

上記の仮説を検証するために、留学生のコミュニケーションメディア使用と、彼らの個人的要因に関する項目を作成し、それらが彼らのコミュニケーションメディア観といかに関係するかを調査する。なお、これまで留学生を対象にするコミュニケーションメディア観の尺度が存在していない。そのため、本研究は、日本人大学生の携帯メール・携帯電話・PC メールに対する評価得点が3つの因子（目的性、情緒性、対人圧力）においてそれぞれ異なっただという先行研究（都築・木村，2000）をもとに尺度を作成した（付録16）。

3.2.2 方法

(1) 調査協力者

関東地域の公立大学に在籍する留学生 518 名を調査対象とした。最終的に回収したのは 444 名であったが（回収率 85.7%）、実際の分析では、ケータイを所持していない 1 名、ケータイは所持しているがメール機能を使用しない 2 名、滞日歴が 3 ヶ月未満で日本のケータイを使いこなせないと思われる者、回答に不備があった者を除いた 397 名分を使用した。

(2) 調査項目

①**個人情報**（性別、年齢、出身地、専攻、身分、滞日歴、日本語能力）について自由記述による回答を求めた。

②**コミュニケーションメディアの使用状況**：来日後のケータイ使用歴、電話・メール・インターネットの使用頻度・目的・対象、携帯メールの入力（語彙やスピード）が上手かどうか、などに回答してもらった。そして、これらの使用が「情報伝達」「友情増進」「交際範囲」「対人緊張」に及ぼす影響を、「1 全くそう思わない」から「7 非常にそう思う」までの7件法で回答を求めた（表3-1）¹⁶。

③これまでのPC使用歴、インターネット・電子メールの使用頻度・目的・対象に評定してもらったほか、電子メールの使用が「情報伝達」「友情増進」「交際範囲」「対人緊張」に

て自分の交際範囲を広げるには有効かどうかを究明するため、「親和感情」の代わりに、「友情を増進するかどうか」（「友情増進」と略す）と「交際範囲を広げるかどうか」（「交際範囲」と略す）に分けて調査項目を作成した。

¹⁶ 「○○」とは、それぞれ「携帯電話」、「携帯メール」、「PC メール」を指す。

及ぼす影響を、「1 全くそう思わない」から「7 非常にそう思う」までの7件法で評定を求めた（表3-1）。

(3) 手続き

本調査は留学生の日本語能力による影響を避けるため、調査票は日本語版で作成され、英語版と中国語版に翻訳された。翻訳の適切さはバックトランスレーションにより確かめられた。そして、調査票の信頼性を確かめるため、本調査を行う前に、2011年5月に、関東地域の国立大学に在籍する6名の大学院留学生（男女各3名）に予備調査の回答に協力してもらった。彼らの意見とフィードバックに基づいて質問紙を改善・修正した。

本調査の回答は(1)にある個人情報の記入以外はすべて選択式で行われ、「複数回答可」以外の項目は1つの回答で評定させた。調査票の使用言語について、中国系留学生には中国語版、他の留学生らには日本語版もしくは英語版を配布した。なお、言語能力に応じて、配布された調査票が自分に合わなかった場合、使用したい言語の調査票を取り換えるよう指示した。本調査に使用した質問紙（日本語版）は付録16を参照されたい。本調査票は2011年6月1日～6月中下旬の間に、質問紙による一斉調査（集合回収調査）を行った。

3.2.3 結果

3.2.3.1 調査協力者に関する情報

調査協力者に関する情報を表3-2に示す。表3-2の通り、分析対象になった留学生のうち、男女の割合は6対4で、平均年齢は26.9歳であった。出身国・地域は中国が最も多く、その次に韓国、マレーシア、バングラデシュなどであった。身分としては、1/3ほどは学部生であり、半数以上は大学院生で、ほかは交換留学生・研究生・科目等履修生など（その他）

表3-1 コミュニケーションメディア観に関する質問項目

あなたは、○○を使用することは、情報を伝達するには有効だと思いますか？

あなたは、○○を使用することは、友情を深めることができると思いますか？

あなたは、○○を使用することは、交際範囲を広げることができると思いますか？

（例えば、日本人学生やほかの留学生と友達になったりするとか）

あなたは、○○を使用することは、緊張したり、ストレスを感じたりすると思いますか？

表 3-2 調査協力者に関する情報

性別	男性 236 名 (59.4%)	女性 161 名 (40.6%)	
平均年齢	26.9 歳 ($SD=4.24$, レンジ 19.1~44.0 歳)		
出身国 (前 6 位)	中国 55.4%	韓国 11.8%	マレーシア 5.3%
	バングラデシュ 5.0%	ベトナム 4.3%	スリランカ 3.5%
大学での所属	学部生 34.3%	大学院生 (修士・博士) 51.9%	その他 13.8%
滞日歴	1 年未満 34 名 (8.6%)	1 年以上 2 年以内 97 名 (24.4%)	
	2 年以上 3 年以内 104 名 (26.2%)	3 年以上 4 年以内 67 名 (16.9%)	
	4 年以上 5 年以内 35 名 (8.8%)	5 年以上 6 年以内 22 名 (5.5%)	
	6 年以上 7 年以内 14 名 (3.5%)	7 年以上 24 名 (6.0%)	
日本語能力	L1 & N1 166 名 (41.8%)	L2 & N2 51 名 (12.8%)	
経済区分	国費 70 名 (17.6%)	私費 327 名 (82.4%)	

であった。滞日歴については、「1 年以上 2 年以内」、「2 年以上 3 年以内」と「3 年以上 4 年以内」が全体の 6 割以上を占めていた。そのうち、学部生の平均滞日歴は 41 ヶ月で、大学院生は 36 ヶ月、その他は 21 ヶ月であった。4 割以上は日本語能力試験 1 級に合格しており、学部生、大学院生、その他の合格割合は、それぞれ 55.2%、31.6%、43.3%であった。8 割以上が私費留学生であった。

3.2.3.2 各コミュニケーションメディアの使用状況

まず、PC とケータイの使用歴は図 3-1 のとおり、PC (母国での使用も含む) は 6 割ほどが 8 年以上であったのに対して、ケータイの方は「1~2 年」「2~3 年」「3~4 年」が半数以上を占めており、彼らの滞日歴と一致していることが分かった。

次に、各コミュニケーションメディアの 1 日あたりの使用頻度を図 3-2 (携帯電話) と表 3-3 (携帯メールと PC メール) に示す。図 3-2 から、留学生の携帯電話の使用頻度は、最も多かったのは「3~5 回」で、次に「ほとんどしない」「2~3 日に 1 回」、「1 日に 2 回」などであった。そして、表 3-3 より、携帯メールと PC メールの使用頻度は、両方とも「5 通以下」が最も多かったが、携帯メールは「5~10 通」と「10~20 通」も多く、いずれも PC メールを大きく上回っていることが分かった。つまり、留学生らは PC メールより、携帯メールのほうを多用していた。また、携帯メールを入力する熟練度の平均得点は 4.46 ($SD=1.46$)

であった。これは携帯メールの入力が「やや上手だ」と示す得点であり、携帯メールの使用頻度とも有意な相関があった ($r=.30, p<.001$)。なお、入力の実練度は年齢との相関が見られず、性別と経済状況による差異も認められなかった。

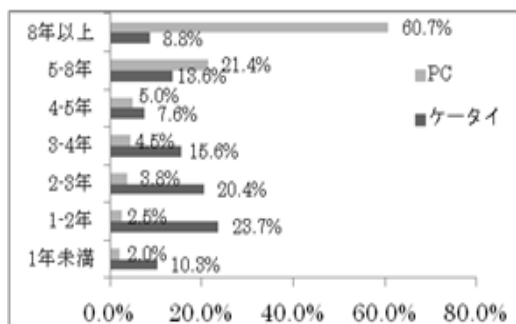


図 3-1 PC と日本ケータイの使用歴

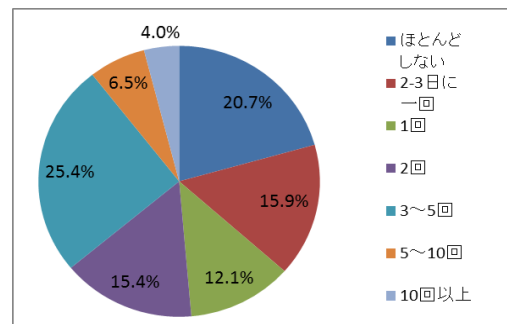


図 3-2 携帯電話の使用頻度

表 3-3 携帯メールと PC メールの使用頻度

1日の使用頻度	携帯メール	PCメール
5通以下	59.2%	78.1%
5~10通	24.2%	17.4%
10~20通	10.6%	3.0%
20~30通	4.0%	0.5%
30~40通	0.8%	0.5%
40~50通	0.5%	0.5%
50通以上	0.5%	0.3%
合計	100%	100%

表 3-4 PC インターネットの使用時間

1時間以内	1~2時間	2~3時間	3~4時間	4~5時間	5~6時間	6時間以上
3.0%	17.1%	23.7%	14.6%	9.6%	6.3%	25.7%

表 3-5 携帯インターネットの使用時間

しない	0-20分	20~40分	40~60分	1~1時間	20分	1時間	20分~2時間	2時間~
46.9%	19.1%	11.1%	7.6%		2.3%		4.5%	8.3%

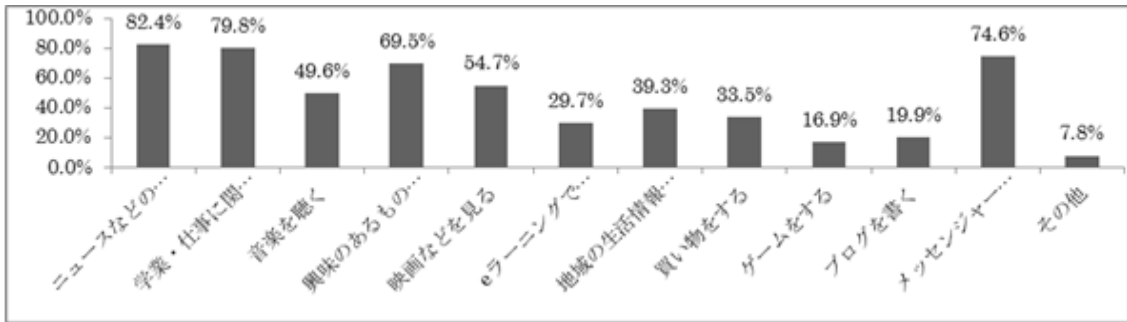


図 3-3 PC インターネットの使用目的

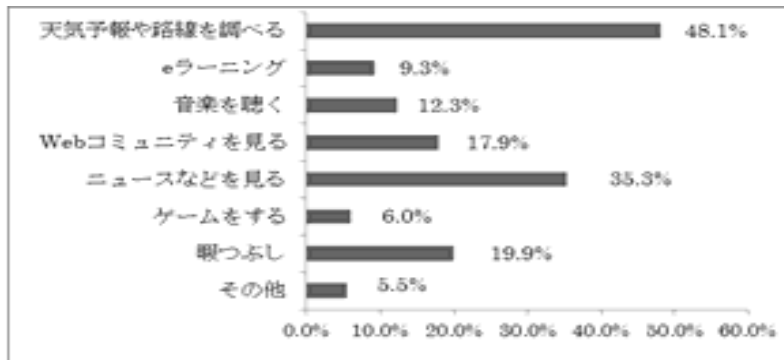


図 3-4 携帯インターネットの使用目的

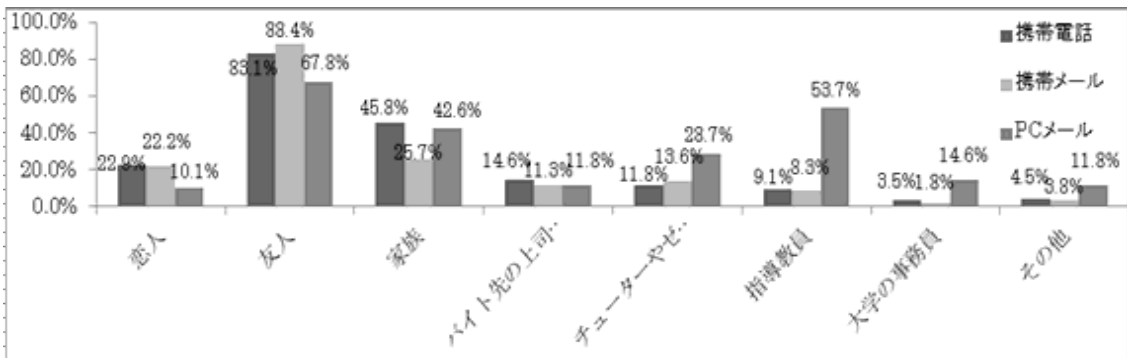


図 3-5 携帯電話・携帯メール・PCメールの使用対象

続いて、PC インターネットと携帯インターネットの使用時間を表 3-4 と 3-5 に示す。表

3-4 のとおり、PC について、1/4 以上は「6 時間以上」、その次に 1/4 弱は「2～3 時間」を利用していることが分かった。一方で、ケータイについては、「全く利用しない」と答えたのは半分弱であり、その次に 1/5 ほどは「0～20 分」と答え、1 時間以上とした人はごく少数であることが分かった。

また、PC インターネットと携帯インターネットの使用目的は図3-3と図3-4に示す。図3-3より、留学生らはPC インターネットを主として、「ニュースなどの社会情報を調べる」、「学業・仕事に関するものを調べる」と「ヤフーやmsnのようなメッセージで母国と連絡する」などであった。一方、携帯インターネットの使用について、利用しない留学生は約半数であったが、利用すると答えた留学生のうち、最も多かったのは「天気予報や路線を調べる」、次に「ニュースなどを見る」と「暇つぶし」などであった。

さらに、携帯電話・携帯メール・PCメール（いずれも発信のみ）の使用対象は図3-5の通り、いずれも最もよく連絡する相手は「友人」であった。その次に、携帯メールと携帯電話の両方は「家族」と「恋人」に使用していたのに対して、PCメールは「指導教員」に対する使用が多かった。

以上は留学生全体の使用状況であったが、次に日本語能力によって使用状況に相違があるかどうかを究明するため、日本語能力試験1級・2級に合格していた留学生217名（以下「高群」）とそうでない留学生180名（以下「低群」）に分けて、独立したサンプルの*t*検定による分析を行い、比較した。結果を表3-6に示す。この結果から、以下の2点が看取される。

- (1) 携帯電話に関しては、日本語能力と関係なく、高・低両群とも使用していた。
- (2) 高群は携帯メールを多用し、携帯インターネットへのアクセスも多かった。一方、低群はPCメールを多用し、PCインターネットの使用時間が長かった。

表3-6 日本語能力による各コミュニケーションメディア使用における相違

項目	高低群における平均値の比較	有意確率
携帯電話の使用頻度	高群対低群 $M_s=3.53$ vs 3.36	$t(357)=.95, ns.$
携帯メールの送信頻度	高群対低群 $M_s=1.79$ vs 1.51	$t(393)=2.65, p<.01.$
携帯インターネットの使用時間	高群対低群 $M_s=2.69$ vs 2.17	$t(392)=2.75, p<.01.$
PCメールの送信頻度	高群対低群 $M_s=1.22$ vs 1.39	$t(354)=5.62, p<.001.$
PCインターネットの使用時間	高群対低群 $M_s=3.85$ vs 4.92	$t(306)=2.2, p<.05.$

3.2.3.3 日本語能力によるコミュニケーションメディア観の相違

ここでは、留学生らの3つのコミュニケーションメディアによる評価に相違があるかどうかを明らかにする。そのため、彼らの「情報伝達」「友情増進」「交際範囲」「対人緊張」における得点を *t* 検定（対応あり）で分析した。結果を表 3-7 に示す。

表 3-7 より、留学生全体のコミュニケーションメディア観について以下のことが分かった。

(1) 情報伝達の面では、携帯電話と PC メールを同様に高く評価したことが分かった。また、PC メールに比べて、携帯メールのほうがやや劣っているように評価された。

(2) 友情増進の面では、PC メールに比べて、携帯電話と携帯メールの効果が同様に高く評価された。

(3) 交際範囲の面では、3つのコミュニケーションメディアによる差は見られなかった。

(4) 対人緊張の面では、携帯メールと PC メールに比べて、携帯電話の方が最も緊張感が高かった。

これらの評価得点の差は性別によって異なるかどうかについて、以上の分析で得られたコミュニケーションメディア間に有意差が見られた項目得点の差を検定変数として、分析を行った。その結果、男女によって有意差が見られたのは、友情増進における携帯メールと PC メールの間だけであった ($t(395)=2.16, p<.05, Ms=.17$ vs $.53$)。男性に比べて、女性の方が2つのメディアに対する認識の差が大きかった。すなわち、男性は携帯メールと PC メールを同じように捉えているのに対して、女性は携帯メールの効果をより高く評価した。

表3-7 留学生全体のコミュニケーションメディアによる評価における相違

	携帯電話対携帯メール	携帯メール対 PC メール	携帯電話対 PC メール
情報伝達	$Ms= 5.59$ vs 5.35 $(t(395)=3.23, p<.01)$	$Ms= 5.35$ vs 5.49 $(t(396)=1.87, p<.10)$	$Ms= 5.59$ vs 5.49 $(t(395)=1.25, ns)$
友情増進	$Ms= 5.08$ vs 5.00 $(t(396)=1.11, ns)$	$Ms= 5.00$ vs 4.68 $(t(396)=3.81, p<.001)$	$Ms= 5.08$ vs 4.68 $(t(396)=4.16, p<.001)$
交際範囲	$Ms= 4.64$ & 4.72 $(t(396)=1.05, ns)$	$Ms= 4.72$ vs 4.58 $(t(396)=1.65, ns)$	$Ms= 4.64$ vs 4.58 $(t(396)=.62, ns)$
対人緊張	$Ms=3.06$ & 2.43 $(t(395)=7.35, p<.001)$	$Ms=2.43$ vs 2.32 $(t(396)=1.42, ns)$	$Ms=3.06$ vs 2.32 $(t(396)=8.45, p<.001)$

さらに、日本人大学生のケータイ使用に経済状況が影響を及ぼしたことが示されたため (e.g.,松田, 2005), 留学生の使用にも影響を及ぼすと考えられる。そこで, 上記の分析で相違が見られたコミュニケーションメディア間の得点の差を検定変数として, 国費・私費¹⁷によって異なるかどうかに関する分析も行った。その結果を表 3-8 に示す。

表 3-8 から, (1) 情報伝達において, 私費留学生に比べて, 国費留学生の方が携帯メールと PC メールに対する認識の差が大きかった; (2) 友情増進において, 携帯電話と PC メールの差においても, 携帯メールと PC メールの差においても, 私費留学生はポジティブな評価をしたのに対して, 国費留学生の方はネガティブな評価をした。これは, 私費留学生は情報伝達と友情増進における携帯電話と携帯メールの効果を高く評価したのに対して, 国費留学生の方は PC メールの効果を高く評価したことを意味する。

以上は留学生全体の携帯電話・携帯メール・PC メールに関するコミュニケーションメディア観の分析結果であったが, 次にこれらの評価は日本語能力によって異なるかどうかを検討した。前項と同様に, 日本語能力によって, 高群と低群に分けて, 比較・分析した。高群・低群の 4 側面におけるコミュニケーションメディア観の分析結果はそれぞれ表 3-9 と表 3-10 に示す。これらの結果より, 以下のようなことが明らかになった。

(1) 日本語能力と関係なく, 携帯電話に対する評価は同様に高かった

(2) 情報伝達と対人緊張の面では, 高群は携帯メールと PC メールを同様に評価したが, 低群は情報伝達において PC メールの効果を高く評価し, 対人緊張の面でも携帯メールよりやや低かった。

(3) 友情増進と交際範囲の面では, 高群はコミュニケーションメディアごとに評価の差が見られ, とりわけ PC メールより携帯メールの効果を高く評価した。一方, 低群はいずれのコミュニケーションメディアに対する評価は同様であった。

これらの結果に基づき, 日本語能力によるコミュニケーションメディア観の相違を表 3-11 に示す。

¹⁷本研究の対象大学では, 通念の「国費」(文部科学省)と「私費」以外に, 「政府派遣」と「日韓共同理工系学部留学生」(以下「日韓韓」と「日韓日」と略す)の身分で来日する留学生もいる。「政府派遣」と「日韓韓」は私費扱いで, 「日韓日」は国費扱いとされている。そのため, 本研究でいう「国費」とは「文部科学省奨学金」と「日韓日」, 「私費」とは「個人」, 「政府派遣」と「日韓韓」を指す。

表3-8 経済状況によるコミュニケーションメディア観の差異

	携帯電話対携帯メール	携帯電話対 PC メール	携帯メール対 PC メール
情報伝達	—	—	$t(395)=3.5, p<.01$ ($M_s=.76$ vs $.01$)
友情増進	—	$t(395)=2.89, p<.01$ ($M_s=.21$ vs $.53$)	$t(395)=4.92, p<.001$ ($M_s=.56$ vs $.50$)
対人緊張	—	—	—

表3-9 高群留学生のコミュニケーションメディア観

	携帯電話対携帯メール	携帯メール対 PC メール	携帯電話対 PC メール
情報伝達	$M_s= 5.69$ vs 5.44 ($t(217)=2.85, p<.01$)	$M_s= 5.44$ vs 5.33 ($t(217)=1.48, ns$)	$M_s= 5.69$ vs 5.33 ($t(217)=3.87, p<.001$)
友情増進	$M_s= 5.21$ vs 5.08 ($t(217)=1.61, ns$)	$M_s= 5.08$ vs 4.46 ($t(217)=6.51, p<.001$)	$M_s= 5.21$ vs 4.46 ($t(217)=6.74, p<.001$)
交際範囲	$M_s= 4.56$ & 4.70 ($t(217)=1.77, p<.10$)	$M_s= 4.70$ vs 4.28 ($t(217)=4.12, p<.001$)	$M_s= 4.56$ vs 4.28 ($t(217)= 2.38, p<.05$)
対人緊張	$M_s=3.01$ & 2.34 ($t(217)=6.00, p<.001$)	$M_s=2.34$ vs 2.34 ($t(217)=.06, ns$)	$M_s=3.01$ vs 2.34 ($t(217)=5.74, p<.001$)

表3-10 低群留学生のコミュニケーションメディア観

	携帯電話対携帯メール	携帯メール対 PC メール	携帯電話対 PC メール
情報伝達	$M_s= 5.47$ vs 5.23 ($t(177)=1.86, p<.10$)	$M_s= 5.23$ vs 5.68 ($t(178)=3.35, p<.01$)	$M_s= 5.47$ vs 5.68 ($t(177)=1.42, ns$)
友情増進	$M_s= 4.93$ vs 4.90 ($t(178)=.21, ns$)	$M_s= 4.90$ vs 4.94 ($t(178)=.32, ns$)	$M_s= 4.93$ vs 4.94 ($t(178)=1.10, ns$)
交際範囲	$M_s= 4.74$ & 4.75 ($t(178)=.04, ns$)	$M_s= 4.75$ vs 4.96 ($t(178)=1.58, ns$)	$M_s= 4.74$ vs 4.96 ($t(178)= 1.43, ns$)
対人緊張	$M_s=3.12$ & 2.53 ($t(177)=4.37, p<.001$)	$M_s=2.53$ vs 2.28 ($t(178)=1.96, p<.10$)	$M_s=3.12$ vs 2.28 ($t(177)=6.22, p<.001$)

表3-11 日本語能力によるコミュニケーションメディア観の特徴

コミュニケーションメディア観	日本語能力による相違
情報伝達	高群：携帯電話＞携帯メール＝PC メール 低群：PC メール＝携帯電話＞携帯メール
友情増進	高群：携帯電話＝携帯メール＞PC メール 低群：携帯電話＝携帯メール＝PC メール
交際範囲	高群：携帯メール \geq 携帯電話＞PC メール 低群：PC メール＝携帯メール＝携帯電話
対人緊張	高群：携帯電話＞携帯メール＝PC メール 低群：携帯電話＞携帯メール \geq PC メール

表3-12 日本語能力によるコミュニケーションメディア観の相違

	携帯電話：高群対低群	携帯メール：高群対低群	PCメール：高群対低群
情報伝達	5.69 vs 5.47 ($t(329)=1.76, p<.10$)	5.44 vs 5.23 ($t(320)=1.84, p<.10$)	5.33 vs 5.68 ($t(331)=2.66, p<.01$)
友情増進	5.21 vs 4.93 ($t(327)=2.05, p<.05$)	5.08 vs 4.90 ($t(335)=1.31, ns$)	4.46 vs 4.94 ($t(395)=3.08, p<.01$)
交際範囲	4.56 vs 4.74 ($t(395)=1.14, ns$)	4.70 vs 4.75 ($t(395)=.34, ns$)	4.28 vs 4.96 ($t(395)=4.28, p<.001$)
対人緊張	3.01 vs 3.12 ($t(394)=.60, ns$)	2.34 vs 2.53 ($t(395)=1.25, ns$)	2.34 vs 2.30 ($t(395)=.28, ns$)

更に、各コミュニケーションメディアの4側面に対する評価は、両群の間に差があるかどうかについても分析した。具体的には、4側面における評価得点の差を従属変数とし、独立したサンプルのt検定を行った。結果を表3-12に示す。

表3-11と3-12の結果より、日本語能力によって、3つのコミュニケーションメディアに対する評価には、以下のような相違が認められた。

(1) 携帯電話について、友情増進の面では高群の留学生は低群より評価が有意に高く、情報伝達の面においてもやや高かった。

(2) 携帯メールについて、情報伝達の面では高群のほうが評価がやや高かったが、他の3側面においては相違が見られなかった。

(3) PCメールについて、情報伝達・友情増進・交際範囲において、高群より低群のほうはその使用に対する評価が有意に高かった。低群の留学生の友情増進と交際範囲におけるPCメールに対する評価は表3-7に示した全体留学生の結果とは逆であった。

前項と本項の分析結果をまとめると、留学生全体はPCメールより携帯メールを多用し、とりわけ中上級日本語能力を有する留学生は携帯メールを多用し、その使用が情報伝達における効果を高く評価した。一方、日本語能力の低い留学生は情報伝達・友情増進及び交際範囲におけるPCメールの方を高く評価した。これらの結果より、仮説は概ね支持された。

3.2.3.4 コミュニケーションメディア観と使用状況・個人的要因との関係

ここでは留学生のコミュニケーションメディア観が諸属性（年齢、性別、経済状況、滞日歴、日本語能力¹⁸）とともに、各コミュニケーションメディアの使用状況といかに関係するかについて分析する。なお、携帯メールの使用頻度は入力熟練度にも影響されると思われるので、「携帯メールの使用頻度」をモデルに投入する場合は「入力の熟練度」も投入

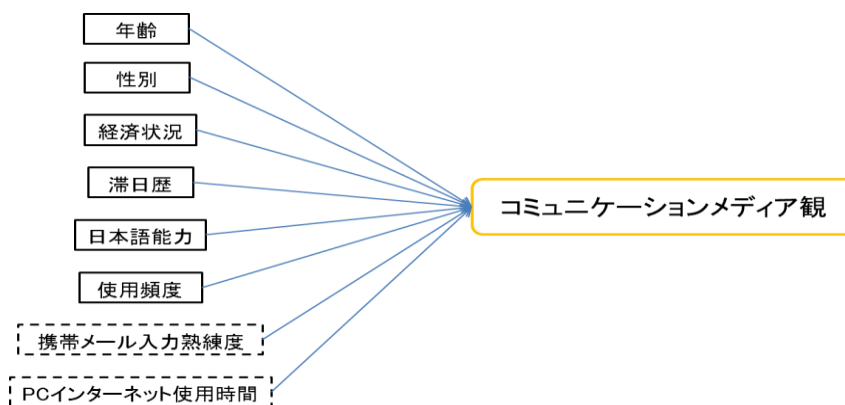


図3-6 重回帰分析をするモデル

¹⁸調査票には、留学生らに日本語能力を客観的尺度（日本語能力試験1・2級）と自己評価（「聞く・話す・読む・書く」の各レベルにおけるパーセンテージ）を記入してもらった。分析をする際には、日本語能力試験1級・2級に合格していた人はその点数を用いたが、受験していない人は自己評価における得点の合計を用いた。なお、日本語能力試験は新旧の評価・得点基準が異なるため、そのまま点数を用いることはできなかった。それゆえ、分析に当たっては、以下の通りで計算する：日本語能力試験L1を受験する人は「実際の点数/400」とし（L2の場合は「実際の点数/400×0.8」、2級レベルは1級レベルの8割に相当するため）、N1を受験した人は「実際の点数/180」（N2の場合は「実際の点数/180×0.8」）に換算した上計算した。

する。また、PCメールの使用はインターネットに接続しなければならないため、「PCメールの使用頻度」をモデルに投入する際には、「PCインターネットの接続時間」も変数として投入する。本研究では図3-6に示すモデルを用いて分析を行う¹⁹。なお、携帯メールの入力熟練度とPCインターネットの接続時間が全ての分析には必要ではないため、点線で示す。

その結果、以下のようなことが明らかになった。

(1) 情報伝達における携帯電話と携帯メールに対する評価得点の差 ($M_s=5.59$ vs 5.35) について、携帯電話の使用頻度は正の影響、携帯メールの入力熟練度は負の影響を及ぼしたことが分かった(それぞれ $\beta=.26, p<.001$; $\beta=-.16, p<.01$)。回帰式全体の決定係数は $R^2=.10, p<.001$ であった。つまり、携帯メールの入力があまり上手ではなく、かつ携帯電話をよく利用する人が、より携帯電話の効果を高く評価した。

(2) 情報伝達における携帯メールとPCメールに対する評価得点の差 ($M_s=5.35$ vs 5.49) について、留学生の年齢は正の影響、携帯メールの入力熟練度は負の影響を及ぼしたことが分かった(それぞれ $\beta=.18, p<.01$; $\beta=-.18, p<.001$)。回帰式全体の決定係数は $R^2=.15, p<.001$ であった。この結果から、年齢とともに、かつ携帯メールの入力があまり上手ではない人が、よりPCメールの効果を評価したことが読み取れた。

(3) 友情増進における携帯メールとPCメールに対する評価得点の差 ($M_s=5.00$ vs 4.68) について、経済状況と入力の熟練度は正の影響、年齢とPCインターネットの接続時間は負の影響を及ぼしたことが分かった(それぞれ $\beta=.10, p<.05$; $\beta=.15, p<.01$; $\beta=-.25, p<.001$; $\beta=-.12, p<.05$)。回帰式全体の決定係数は $R^2=.21, p<.001$ であった。この結果は、比較的若い私費留学生の中、PCインターネットの使用時間が短く、かつ携帯メールの入力が上手な人が、より携帯メールの効果を高く評価したことを意味する。

(4) 友情増進における携帯電話とPCメールに対する評価得点の差 ($M_s=5.08$ vs 4.68) について、年齢は負の影響、携帯電話の使用頻度は正の影響を及ぼした(それぞれ $\beta=-.22, p<.001$; $\beta=.24, p<.001$)。回帰式全体の決定係数は $R^2=.15, p<.001$ であった。つまり、携帯電話の使用頻度が高く、かつ比較的若い留学生の方が、より携帯電話の効果を評価した。

(5) 対人緊張における携帯電話と携帯メールに対する評価得点の差 ($M_s=3.06$ vs 2.43) について、携帯メールの使用頻度と入力の熟練度による正の影響、携帯電話の使用頻度による負の影響が見られた(それぞれ $\beta=.12, p<.05$; $\beta=.13, p<.05$; $\beta=-.22, p<.001$)。回帰式

¹⁹性別と経済状況は名義尺度であるため、重回帰分析を行った際、それぞれダミー変数(性別: 男性を1, 女性を2, 経済状況: 国費を1, 私費を2)としてモデルに投入した。以下同様。

全体の決定係数は $R^2=.10, p<.001$ であった。この結果から、ケータイの使用について、対人緊張であるかどうかは他の要因ではなく、携帯電話と携帯メールの使用頻度、及びメール入力の熟練度に由来したことが示された。

(6) 対人緊張における携帯電話と PC メールに対する評価得点の差 ($M_s=3.06$ vs 2.32) について、上記 (3) の分析と同じ独立変数を投入した重回帰分析では、回帰式全体の有意水準は .05 以上となり、そのまま適用できなかつた。それゆえ、年齢・性別・経済状況・滞日歴・日本語能力・ケータイの使用歴を 1 つずつ取り除いた。その結果、携帯電話と PC メールの使用頻度、PC インターネットの接続時間、PC の使用歴を投入したところ、投入した回帰式全体の決定係数は $R^2=.30, p<.05$ になった。各独立変数の中、携帯電話の使用頻度のみ有意な負の効果が見られた ($\beta=-.14, p<.01$)。つまり、携帯電話の使用頻度が高ければ、対人緊張感が低くなる。

更に、日本語能力によって、交際範囲における PC メールに対する評価の差が見られたため、それに影響を及ぼす諸要因を明らかにするため、上記と同様の重回帰分析を行った。結果、年齢 ($\beta=.28, p<.001$)、滞日歴 ($\beta=-.12, p<.05$)、PC インターネットの使用時間 ($\beta=.12, p<.05$) 及び PC メールの使用頻度 ($\beta=.10, p<.05$) による有意な影響が見られた。回帰式全体の決定係数は $R^2=.12, p<.001$ であり、日本語能力による影響は見られなかつた。つまり、滞日歴が短く、しかも PC インターネットと PC メールを多用したい年長の留学生が、PC メールの使用が交際範囲を広げるには効果があると高く評価した。

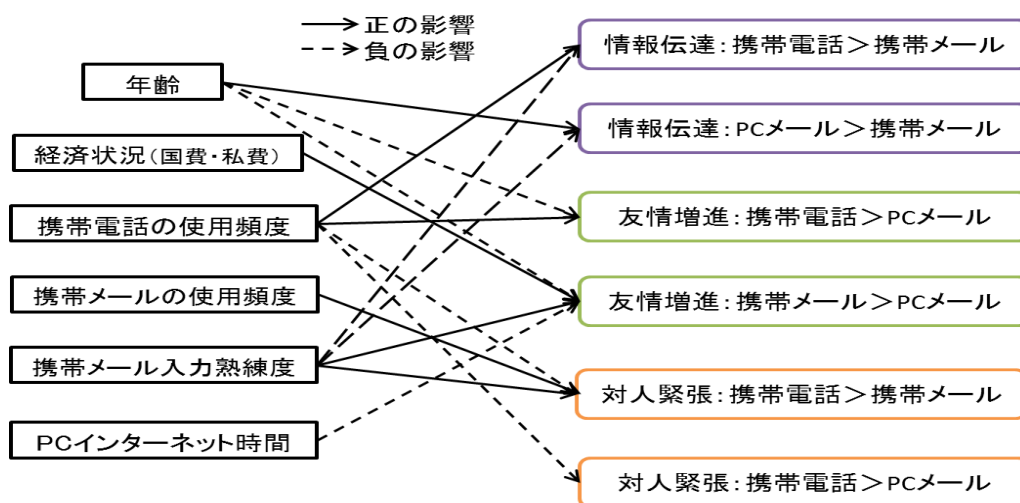


図 3-7 留学生のコミュニケーションメディア観と使用状況・個人的要因との関係

留学生全体のコミュニケーションメディア観，及びそれらに影響を及ぼす諸要因について，前項及び本項の分析結果をまとめて図3-7に示す。

3.2.4 考察

本研究の目的は，留学生の日本語能力に係る諸要因が携帯電話・携帯メール・PCメールの使用といかに関係するか，その使用に伴い，コミュニケーションメディア観がいかに異なるのか。また，コミュニケーションメディア観とコミュニケーションメディアの使用の間にどのような関係が存在するのか，の2点を明らかにすることであった。

3.2.4.1 日本語能力によるコミュニケーションメディア観の相違について

本研究の分析対象397名であり，全体としてPCメールより携帯メールを多用していた。また，半数以上は日本語能力試験1級・2級に合格していた。この様な中上級日本語能力を有する留学生（以降「高群」と称す）とそうでない留学生（以降「低群」と称す）の間に，携帯電話の使用頻度には差が見られなかったが，高群の留学生は携帯メールと携帯インターネットを多用したのに対して，低群の留学生はPCメールとPCインターネットを多用した（表3-6）。すなわち，高群の留学生はケータイ全般を多用したのに対して，低群の留学生は携帯電話とPCメール，PCインターネットを多用したことである。この違いは主として両者の日本語能力に由来したと考えられる。なぜならば，本研究の調査が実施した2011年6月中上旬の時点では，スマホの普及率はまだ低く，主としては日本語と英語しか入力できない一般ケータイであったからである。

留学生全体の携帯電話・携帯メール・PCメールに対する評価の相違は，情報伝達・友情増進・対人緊張といった面に存在したことが確認できた（表3-7）。これは日本人大学生を対象にした調査結果と類似している（e.g.,都築・木村，2000）。しかし，日本語能力，即ち，高・低両群に分けて分析したところ（表3-9），高群は情報伝達における携帯電話と携帯メール，そして，友情増進の面では携帯電話の効果を高く評価したのに対して，低群はすべてPCメールの効果を高く評価した。とりわけ，友情増進と交際範囲の面における評価は留学生全体のものとは逆であった。

図3-5に示したように，留学生は携帯電話と携帯メールを主として友人，家族，恋人に使用したのに対して，PCメールは友人，指導教員等に使用した。即ち，携帯電話と携帯メー

ルによる社会的ネットワークの構成員は比較的親密な関係になりやすい者であるのに対して、PCメールによる社会的ネットワークの構成員は指導教員や大学の職員といったオフィシャルな者であった。それゆえ、低群の留学生にとっては、PCメールは即時性が劣っているが、使用言語に制限がなく、伝達する情報量が多いため、友情を深めることができるだけでなく、指導教員や大学の職員らに対しては時間をかければ情報を伝達することができる、と捉えられたのではないかと考えられる。

3.2.4.2 コミュニケーションメディア観と使用状況・個人的要因との関係について

本研究では、留学生のコミュニケーションメディア観がその使用状況と個人的要因といかに関係するかを明らかにするため、年齢・性別・経済状況といったデモグラフィック属性に加え、滞日歴・日本語能力とともに、各コミュニケーションメディアの使用歴、使用頻度と熟練度を独立変数として重回帰分析を行った。その結果、以下のことが明らかになった（図3-7）。

①携帯電話と携帯メールの効果に対する評価の相違は、情報伝達と対人緊張の両方において見られた。それは、携帯電話・携帯メールの使用頻度、及び入力熟練度に由来したことであった。

②携帯メールとPCメールの間に、認識の相違が見られたのは情報伝達と友情増進であった。この2つの認識差に共通して影響を及ぼしたのは年齢と携帯メールの入力熟練度であったが、友情増進の方は、経済状況とPCインターネットの接続時間にも影響された。

③携帯電話とPCメールに対する評価の相違は、友情増進と対人緊張の両方において見られた。この2つの相違に共通して影響を及ぼしたのは携帯電話の使用頻度であったが、友情増進においては年齢による影響も認められた。

第一に、携帯電話と携帯メールに対する評価の相違について、これまで日本人大学生を対象にした結果は親密度や地理的距離に由来したとされている（古谷・坂田，2006；岡本・高橋，2006）。しかし、本研究の結果に示したように、留学生のコミュニケーションメディア観に影響を及ぼしたのは携帯電話・携帯メールの使用頻度と携帯メールの入力熟練度であった。携帯電話の使用頻度が高ければ高いほど情報伝達における携帯電話の効果を高く評価し、対人緊張感が低くなった。一方、携帯メールの入力が熟練した留学生のほうはその使用が情報伝達における効果を高く評価し、対人緊張感が低くなった。また、表3-9に示したように、情報伝達における携帯電話と携帯メールに対する評価は、低群の留学生に比

べて、高群の留学生のほうはやや高かった。これらは、携帯電話の使用頻度と携帯メールの入力熟練度が変われば、留学生の情報伝達と対人緊張における認識も変わる可能性を示唆している。

第二に、携帯電話と PC メールに対する認識の相違に影響を及ぼした共通した要因は、携帯電話の使用頻度であった。また、友情増進において、留学生らの年齢も影響を及ぼしたことが確認された。本研究の結果から、若い留学生が携帯電話をよく利用し、それが友情を深めるには効果があると評価し、実際に電話で話すときもあまり緊張を感じなかったことが示された。一方、年齢とともに、あまり携帯電話を使用しなかった留学生は、それを利用した際に、緊張したり、ストレスを感じたりした。それゆえ、携帯電話に比べて、PCメールの効果を高く評価したのである。これについて、1つ考えられる大きな理由は留学生の日本語能力である。表 3-9 に示したように、低群の留学生は情報伝達・友情増進・交際範囲という3側面において、いずれも高群より PC メールに対する評価が高かった。これは、前節「調査協力者の属性」に示されたように、大学院生に比べて、学部生の日本語能力試験合格率も高く、平均滞日歴も長かった。これは、日本語で受験し、かつ合格した学部生の方は高度の日本語能力を備えるのに対して、比較的年上である大学院生の多くは日本語ができない実態の反映だと思われる。それに由来して、携帯電話と PC メールの使用頻度が異なったのである。日本語のできない大学院生（特に博士課程の学生）にとって、相手が英語が話せなければ、コミュニケーション自体ができないのは現実である。それゆえ、コミュニケーションメディア観に差が生じたのではないかと考えられる。

第三に、携帯メールと PC メールに対する認識の相違は、情報伝達と友情増進の両方において見られた。情報伝達においては全体として携帯メールより PC メールに対する評価が高かったことは先行研究と異なっている (e.g., 都築・木村, 2000)。しかし、表 3-9 に示したように、高群の留学生は PC メールより携帯電話と携帯メールの効果を高く評価した。また、図 3-7 に示したように、携帯メールの入力が熟練した若い留学生は携帯メールの効果を高く評価した。PC メールでは入力の言語制限がなく、また携帯メールより一度に伝える情報量が多いという利点はある一方、即時性が劣るため、携帯メールの入力に慣れている若い留学生のほうは携帯メールの効果を重要視したと言える。即ち、中上級日本語能力を有する留学生に限っては、1999年7月に実施した日本人学生を対象にした調査結果と同様であった。

一方、友情増進においては、全体として PC メールより、携帯メールの効果に対する評価

が高かった。これは日本人大学生を対象にした結果と類似している。なお、先行研究では（岡本・高橋，2006），この2つのコミュニケーションメディアにおける認識の相違は親密度に由来したとされているが，本研究では年齢や経済状況，携帯メールの入力熟練度，PCインターネットの使用時間も原因であったことを前節の分析結果に示した。私費留学生の中，経済的な理由でアルバイトなどをするのが多く，必然的に他者と接触することになっているのだろう。彼らは比較的年齢が若く（私費留学生と国費留学生の平均年齢はそれぞれ26.4歳と29.5歳であった），携帯メールの入力も熟練しており，PCインターネットの接続時間も短かった。彼らには，外出先でも友人と連絡が取れ，常につながりを確認することができるだけでなく，自分の都合に合わせて使える携帯メールには，その利便性を感じたのではないかと考えられる。

図3-7に示したように，留学生のコミュニケーションメディア観は一部の個人的要因とコミュニケーションメディアの使用頻度（時間）に影響された。これは日本人学生を対象とした都築・木村（2000）の検討結果と逆の方向を示している。両者の差異について，主としては以下のような理由が考えられる。

都築・木村（2000）の調査は1999年7月に実施したものであり，2011年6月に実施した本研究の調査との間に約12年の間隔もある。日本では1999年2月にiモードサービスが始まり，当時大学生のケータイ所持率はそれほど高くなかった。また，1999年のインターネット世代普及率も2割未満であった²⁰。そのような状況の中，ユーザがどのメディアを使用するかを選択する際は意識的にコストや効果に応じて考えなければならなかったと思われる。その結果，コミュニケーションメディア観がコミュニケーションメディアの使用頻度を規定したのだと考えられる。一方，前述したように，2011年6月の時点では，日本人学生のケータイ（少数はスマホ）所持率はほぼ100%で，インターネットの人口普及率も79.1%に達した²¹。また，本調査の回答者のうち，99%以上がケータイ・スマホを所持していた。つまり，1999年7月に比べると，人々のおかれたメディア環境が大きく変わっていた。ユーザが手軽に様々なコミュニケーションメディアを利用しているうちに，コミュニケーションメディア観が生まれたのではないかと考えられる。

²⁰ 参考 URL : <http://www.jri.co.jp/company/publicity/2000/detail/netbreak/>

²¹ 参考 URL : <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h24/html/nc243120.html>

3.2.5 まとめと今後の課題

本研究の検討結果から、以下の3点に要約することができる。

(1) 留学生全体はPCメールより携帯メールを多用し、中上級日本語能力を有する留学生は携帯電話・携帯メール・携帯インターネットを多用したが、日本語能力の低い留学生は携帯電話・PCメール・PCインターネットを多用した。

(2) 留学生全体の携帯電話・携帯メール・PCメールに対するコミュニケーションメディア観はそれぞれ、情報伝達、友情増進及び対人緊張の3側面において評価の差が見られた。具体的には、①情報伝達をするには、携帯電話＝PCメール>携帯メール、②友情増進の面では、携帯電話＝携帯メール>PCメール；③対人緊張の面では、携帯電話>携帯メール＝PCメール、であった。

中上級日本語能力を有する留学生は情報伝達の面では携帯電話と携帯メール、友情増進の面では携帯電話に対する評価は高かった。一方、日本語能力の低い留学生は、情報伝達・友情増進・交際範囲という3側面において、いずれもPCメールに対する評価は高かった。

(3) 留学生全体のコミュニケーションメディア観について、一部の個人的要因とともに、各コミュニケーションメディアの使用頻度が情報伝達と友情増進における評価、及び対人緊張感の低減に正の影響を及ぼした。また、交際範囲において、日本語能力の低い留学生のPCメールに対する評価がPCインターネットの使用時間とPCメールの使用頻度に影響されたことも分かった。

なお、3.2.3.4の分析で見られたように、重回帰分析の結果において、いずれも決定係数はそれほど高くなかった。それは、本研究が取り上げた変数以外、ほかに影響を及ぼす変数が存在するかもしれないことを示唆している。今後、検討すべき課題と考えられる。

そして、本研究の調査は、留学生らの所持するケータイの台数、月々の使用料金、及び出身国のケータイ使用に関しては取り上げていない。これらも含め、彼らのコミュニケーションメディア観が実際の対人コミュニケーションにいかに関与しているかは、詳細な検討が必要であろう。

さらに、本研究では、携帯電話・携帯メール・PCメールを取り上げたが、対面との相違はまだ検討していない。それゆえ、今回の調査結果より、留学生携帯電話と携帯メールの使用頻度、PCインターネットの接続時間がコミュニケーションメディア観の相違に影響を及ぼしたことが確認されたが、対面でコミュニケーションをする際に、どのような要因が影響を及ぼすかという点はまだ不明である。それを検討することも今後の課題である。

3.3 研究4：留学生のメディアリテラシーに対する認識とコミュニケーション メディア使用の関係

3.3.1 目的と仮説

本研究では、以下の2点を明らかにすることを目的とする。

(1) 留学生がケータイ・スマホ・PCによるインターネット使用に対するメディアリテラシーに対して、どのような認識をもっているのか。それは各メディア特にスマホの使用によっていかに異なるのか。

(2) 留学生のメディアリテラシーに対する認識が各コミュニケーションメディアの使用状況、及び個人的要因といかに関係するのか。

研究3の検討結果に示したように、2011年6月の時点ではケータイ使用者の半数ほど全くインターネットを利用しなかった。しかし、2011年の秋以降スマホの普及率が急増しはじめた。ケータイに比べて、スマホは使用言語に制限がなく、またインターネットアクセスがよりしやすいため、ケータイ使用者に比べて、スマホ使用者はメディアリテラシーに対する認識が高いだろう。特に、インターネット使用に関係する情報検索や閲覧に対する認識が異なるだろう。一方、PCは随時性が劣るため、スマホよりメディアリテラシーに対する認識が低くなる。

上記の仮説を検証するために、本研究では以下の4つについて調べて検討を行う。

(1) 留学生らのケータイとスマホ（メール・電話・インターネット）、及びPC（メールとインターネット）の使用状況

(2) ケータイ・スマホ・PCによるインターネット使用に対するメディアリテラシーに対する認識

(3) 諸コミュニケーションメディア使用とメディアリテラシーに対する認識の関係

(4) 年齢、性別、経済状況（国費・私費）というデモグラフィック属性と滞日歴、日本語学習歴、日本語能力などを含めた個人的要因の、コミュニケーションメディアの使用頻度とメディアリテラシーに対する認識における影響の有無

本研究では、質問紙調査法を用いて検討を行うが、回答者のメディアリテラシーを直接測定するのではない。質問紙調査法では、回答者個人の自己認知と自己評価に依存するため、ここでは「メディアリテラシー」ではなく、「メディアリテラシーに対する認識」という表現を用いることにした。

3.3.2 方法

(1) 調査回答者

関東地域の国立大学に在籍する留学生 66 名（男性 28，女性 34，未回答 4 名）を調査対象者とした。なお、実際の分析では、回答に不備があった者を除いた 56 名（男性 25，女性 31）分を使用した。

(2) 調査項目

個人情報：性別，年齢，出身国・地域，現在の大学における身分，専攻，滞日歴，日本語学習歴，日本語能力試験を受験した経験の有無・点数とレベル，日本人成人の日本語能力を100%とした時の，自分の聞く・話す・書く・読む能力をパーセンテージでの記入を求めた（表3-7）。

各コミュニケーションメディアの使用状況：使用している①日本のケータイとスマホの種類・キャリア・使用歴，それぞれの1日あたりの電話・メール・インターネットの使用頻度，日本語によるメール入力の熟練度；②これまでのPC使用歴，1日あたりのインターネットの接続時間・電子メールの送信頻度，等を単一選択式で回答を求めた（表3-13）。

メディアリテラシーに対する認識：深山（2011）が用いた尺度をもとに，本研究の目的と関連すると思われる内容を選び出し，「インターネット使用と関連する」項目とそうでない項目に分けて，適宜修正したうえ，それぞれ7件法（「7. とてもそう思う；4. どちらともいえない；1. 全くそう思わない」）で回答を求めた。具体的には，①メディアのコンテンツ（4項目），②情報収集（4項目），③情報の信頼性と選択（3項目），④情報発信（3項目），及び⑤ネチケット（1項目）の合計14項目であった（表3-14）。

本研究に使用した調査票（日本語版）は付録17を参照されたい。

(3) 手続き

調査票は日本語版・英語版・中国語版（簡体字）で作成された。そして，調査票の信頼性を確かめるため，本調査を行う前に，4名の留学生に予備調査の回答に協力してもらった。彼らの意見やフィードバックに基づいて調査票を改善，修正した。

調査を行った際に，中国系留学生には中国語版，他の留学生らには日本語版もしくは英語版を配布した。本調査は2012年1月上旬から2月中旬の間に，知り合いの教員を通して，調査などに協力できるメーリングリストに登録されている学生に，調査の趣旨を説明し，協力を受諾した学生のみに質問紙を配布した。

3.3.3 結果

3.3.3.1 調査協力者に関する情報

本研究の分析対象になった56名の情報を表3-13に示す。表3-7の通り、分析対象は、男性より女性の方がやや多く、全体の平均年齢は 26.9歳であった。出身国・地域としては、7割近くは中国系（台湾も含む）、ほかは韓国系、バングラデシュ・タイ・ネパール、などであった。身分としては、1割ほどは学部生であり、半数以上は大学院生で、3割以上は交換留学生・研究生等であった。滞日歴については、4割弱は「1年以内」で、2割弱は「4年以上」であり、「1年以上3年以内」が全体の4割以上を占めていた。また、日本語学習歴は「4年以上」が最も多く、その次に「3～4年」であり、1年以内は1割であった。日本語能力に関しては、7割以上は日本語能力試験1級、2級に合格していた。全体の8割以上が私費留学生であった。さらに、ケータイに比べて、スマホのほうが所持率が高かった。

3.3.3.2 各コミュニケーションメディアの使用状況

留学生の1日あたりのケータイ（電話・メール・インターネット）、スマホ（電話・メール・インターネット）とPC（メールとインターネット）の使用状況を表3-14に示す。この結果より、約7割のケータイ使用者と8割以上のスマホ使用者が一日「1回」～「5～10回」電話をかけることが分かった。メールに関しては、ケータイ使用者の6割ほどは「5通以下」を送信していたのに対して、スマホ使用者の6割以上は「5通以上」を送信していた。さらに、インターネットへのアクセスについては、ケータイ使用者の6割以上は「全くしない」としたのに対して、スマホ使用者の9割以上は使用しており、半分以上は「80分-120分」「120分以上」アクセスしていたことが分かった。

また、ケータイとスマホによって、それぞれの電話・メール・インターネットの使用頻度に差があるかどうかについて、独立したサンプルの t 検定を行った。その結果、電話使用においては差が見られなかったが（ケータイ対スマホ： $M_s=3.73$ vs 3.90 , $t(50)=.38$, ns ）、メール使用においては有意傾向が認められた（ケータイ対スマホ： $M_s=1.59$ vs 2.30 , $t(43.8)=1.89$, $p<.10$ ）。インターネット使用においては有意差が見られた（ケータイ対スマホ： $M_s=1.82$ vs 5.07 , $t(43.8)=49.4$, $p<.001$ ）。

一方、PCに関しては、全体としてメールの使用頻度がスマホと同様の傾向にあり、半数以上は「一日4時間以上」インターネットにアクセスしていたことが分かった。PCインターネットの使用はケータイ所持者かスマホ所持者のいずれかによって異なるかどうかを分

析するため、独立したサンプルの t 検定を行った。その結果、両者の間に有意差が認められなかった（ケータイ対スマホ： $M_s=5.00$ vs 4.30 , $t(43.8)=1.26$, ns ）。

表3-13 分析対象者に関する情報

性別	男性 25名(44.6%)	女性 31名 (55.4%)
平均年齢	26.9歳 (SD=4.95, レンジ=20.1~47.2歳)	
出身国	中国系69.6%	韓国系7.1% その他23.3%
在籍身分	学部生10.7%	大学院生 (修士・博士) 53.6% その他35.7%
専攻	日本語及び関連領域37.5%	その他 62.5%
滞日歴	1年以下：39.3%	1~2年：14.3% 2~3年：14.3%
	3~4年：12.5%	4年以上：19.6%
日本語学習歴	1年以下：10.7%	1~2年：14.3% 2~3年：16.1%
	3~4年：19.6%	4年以上：35.7%
日本語能力 (JLPT)	L1/N1：64.3%	L2/N2：7.1%
自己評価	40%以下：19.6%	40%~70%：60.7% 70.1%~100%:19.6%
経済区分	国費：10名 (17.9%)	私費：46名 (82.1%)
使用するデバイス	ケータイ：39.3%	スマホ：53.1% 両方：7.1%

表3-14 各コミュニケーションメディアの1日あたりの使用頻度

	電話		メール				インターネット					
ケータイ	1. しない	4.5%	2. 2-3日/回	27.3%	1. 5通以下	59.1%	2. 5-10通	27.3%	1. しない	63.6%	2. 0-20分	22.7%
	3. 1回	4.5%	4. 2回	22.7%	3. 10-20通	9.1%	4. 20-30通	4.5%	3. 20-40分	0.0%	4. 40-60分	4.5%
	5. 3-5回	36.4%	6. 5-10回	4.5%	5. 30-40通	0.0%	6. 40-50通	0.0%	5. 60-80分	4.5%	6. 80-2時間	0.0%
	7. 10回以上	0.0%			7. 50通以上	0.0%			7. 2時間以上	4.5%		
スマホ	1. しない	13.3%	2. 2-3日/回	6.7%	1. 5通以下	43.3%	2. 5-10通	33.3%	1. しない	6.7%	2. 0-20分	3.3%
	3. 1回	20.0%	4. 2回	23.3%	3. 10-20通	3.3%	4. 20-30通	6.7%	3. 20-40分	13.3%	4. 40-60分	16.7%
	5. 3-5回	13.3%	6. 5-10回	20.0%	5. 30-40通	3.3%	6. 40-50通	3.3%	5. 60-80分	6.7%	6. 80-2時間	20.0%
	7. 10回以上	3.3%			7. 50通以上	6.7%			7. 2時間以上	33.3%		
PC	x				1. 5通以下	46.4%	2. 5-10通	32.1%	1. 1時間未満	7.1%	2. 1-2時間	14.3%
					3. 10-20通	8.9%	4. 20-30通	5.4%	3. 2-3時間	14.3%	4. 3-4時間	8.9%
					5. 30-40通	1.8%	6. 40-50通	1.8%	5. 4-5時間	17.9%	6. 5-6時間	12.5%
					7. 50通以上	3.6%			7. 6時間以上	25.0%		

3.3.3.3 メディアリテラシーに対する認識の因子分析

留学生らのメディアリテラシーに対する認識を明らかにするために、深山（2011）を参考に作成した14項目のうち、共通性が著しく低かった項目を除いた13項目について因子分析（最尤法，Varimax回転）を行った。その前に、尺度の信頼性を確かめるため、 α 係数を算出した。結果、 $\alpha = .69$ であり、本尺度の内的整合性が信頼できると言える。

次に、56名分²²の13項目の評定結果をもとに、因子分析を行い、固有値の推移と解釈可能性から、4因子が最も適切な因子数と判断した。回転後の因子負荷量と固有値、及び寄与率を表3-15に示す。

第Ⅰ因子には、「情報を探す」、「情報を得る」などの項目が含まれ、深山（2011）の「情報の収集」とほぼ同様であった。第Ⅱ因子には、「ブログを書く/書きたい」、「作品を他人に見せたい」などの項目が含まれ、深山（2011）の「情報の発信」と類似している。第Ⅲ因子には、「インターネット版の新聞を読む」、「インターネットで新聞やニュース」、「語学番組、教育番組、教養番組」などを読むのが好きだという項目が含まれ、深山（2011）の「メディアのコンテンツ」と同様である。以上のことから、留学生のケータイ、スマホとPCによる

表3-15 メディアリテラシーに対する認識の因子分析

質問項目	因子				共通性
	I	II	III	IV	
5. インターネットで必要な情報を探するのが上手だ	.94	.15	.07	.12	.93
6. 他の学生よりも情報を探す能力が高い	.66	.10	-.18	.16	.50
7. インターネットを利用すれば、知りたい情報をほとんど得ることができる	.78	-.06	.19	-.01	.66
10. インターネットを利用すれば、いいレポート・論文を書くことができる	.46	.14	.08	-.12	.25
12. インターネットでブログを書く・書いてみたい	.08	.84	-.06	-.06	.72
13. 新聞やインターネットのHPを作成し、様々な情報を発信している/したい	.19	.66	-.01	-.05	.48
11. カメラなどで撮影した画像を編集して作品として他人に見せるのが好きだ	-.05	.63	.02	-.05	.40
2. インターネットでアニメ、ドラマ、映画、音楽番組、スポーツなどを見るのが好きだ	.30	.41	.09	.18	.30
8. 紙版の新聞より、インターネット版の新聞をよく読む	.08	-.07	.78	-.14	.63
1. インターネットで新聞やニュースを見るのが好きだ	.17	-.03	.72	.11	.56
3. インターネットで語学番組、教育番組、教養番組などを見るのが好き	-.17	.22	.49	.31	.41
4. 図書館や資料室で必要な資料を探するのが上手だ	.28	.04	-.09	.96	1.00
14. インターネット上のマナー（ネチケット）を守っている	-.04	-.06	.06	.31	.10
因子寄与	2.42	1.82	1.46	1.23	
累積寄与率	18.61	32.59	43.82	53.26	
注1) 項目前の数字は、質問紙における項目番号					
注2) 項目9「新聞やニュースは事実を客観的に伝えている」は共通性が低かったため、削除					

²² 因子分析に使用したのは56名分であるが、ケータイとスマホそれぞれの使用者に分けて分析するため、以下はケータイ使用者20名とスマホ使用者30名のデータを用いて分析を行った。それゆえ、両方とも所持する留学生のデータは今回の分析対象としなかった。

インターネット使用のリテラシーに対する意識は、情報検索（第Ⅰ因子）、情報発信（第Ⅱ因子）、情報閲覧（第Ⅲ因子）という構造であることが示された。

本研究では、ケータイ・スマホ・PCの使用状況とメディアリテラシーに対する認識の関係を明らかにすることが目的である。それゆえ、因子Ⅳ「図書館や資料室で資料を探す」は、インターネット使用と無関係のため、ここでは因子Ⅰ～Ⅲについて分析した。各因子の平均得点をそれぞれケータイ使用者とスマホ使用者に分けて比較したところ、因子Ⅰ情報検索のみにおいて、スマホ使用者のほうが有意に高かった（ $M_s=19.41$ vs 21.93 , $p<.05$ 。図3-8に示す）。

3.3.3.4 メディアリテラシーに対する認識の特徴

ここでは、ケータイ使用者とスマホ使用者に分けて、それぞれによるインターネットとPCインターネットの使用時間を基にクラスタ分析を行った。そのうえ、得られたクラスタ（グループ）を独立変数として、ケータイ・スマホインターネットの使用時間とPCインターネットの使用時間を従属変数として、一元配置分散分析を行った。

ケータイ使用者に関して分析した結果、携帯インターネットの使用時間は $F(2, 19)=52.48$, $p<.001$; PCインターネットは $F(2,19)=39.65$, $p<.001$ であった。Tukey法による多重比較の結果、携帯インターネット使用の場合、グループⅠとグループⅡ、そしてグループⅡとグループⅢの間に、それぞれ有意差が見られた（前者 $M_s=1.15$ vs 5.33 , $t(2.1)=4.71$, $p<.001$; 後者 $M_s=5.33$ vs 1.50 , $t(7)=5.78$, $p<.001$ ）。一方、PCインターネット使用の場合、グループⅠとグループⅡ（ $M_s=6.38$ vs 3.67 , $t(17)=4.63$, $p<.001$ ）、グループⅠとグループⅢの間に（ $M_s=6.38$ vs 2.67 ,

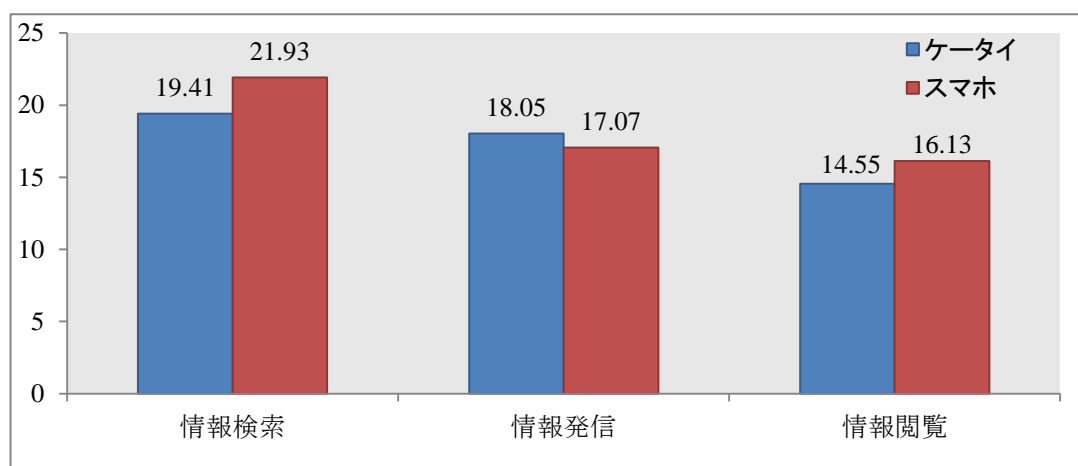


図 3-8 ケータイとスマホ使用者の 3 因子における得点の比較

$t(17)=9.63, p<.001$), それぞれ有意差が認められた (図 3-9, 縦軸にある「インターネット使用時間のレベル」とは表 3-8 にある選択肢 1~7 であった, 図 3-10 も同様)。

以上の結果から, ケータイ使用者に関して, クラスタ分析で分類された 3 つのグループには以下の特徴がある:

- ・グループ 1: 携帯インターネットの使用時間は短く, PC インターネットの使用時間は長い。

- ・グループ 2: 携帯インターネットの使用時間は長く, PC インターネットの使用時間は中程度である。

- ・グループ 3: 携帯インターネットの使用時間も PC インターネットの使用時間も短い。

また, 各グループの割合としては, それぞれ 59.1%, 13.6%, 27.3% であった。これらのことから, ケータイ使用者の半数以上は主として PC インターネットを利用し, 1/3 弱 (グループ 3) は殆どインターネットを利用していないことが分かった。

次に, スマホ使用者 に関して分析した結果, スマホインターネットの使用時間は $F(2, 27)=19.76, p<.001$; PC インターネットは $F(2,27)=43.03, p<.001$ であった。Tukey 法による多重比較の結果, スマホインターネット使用の場合, グループ 4 とグループ 5, そしてグループ 4 とグループ 6 の間に, それぞれ有意差が見られた (前者 $M_s=2.89$ vs $5.67, t(19)=4.37, p<.001$; 後者 $M_s=2.89$ vs $6.44, t(16)=7.29, p<.001$)。一方, PC インターネット使用の場合, グループ 4 とグループ 5, 及びグループ 5 とグループ 6 の間に, それぞれ有意差が認められた (前者 $M_s=5.33$ vs $2.25, t(19)=6.19, p<.001$; 後者 $M_s=2.25$ vs $6.00, t(19)=8.68, p<.001$) (図 3-10)。

以上の結果から, スマホ使用者に関して, クラスタ分析で分類された 3 つのグループには以下の特徴がある:

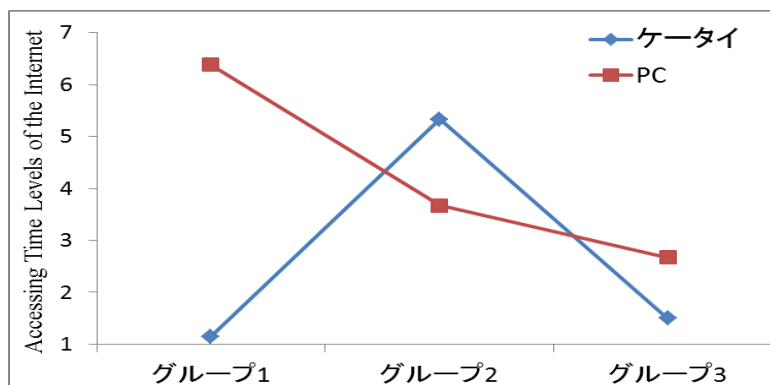


図 3-9 ケータイ・PC によるインターネットの使用レベルに関するグループ分け

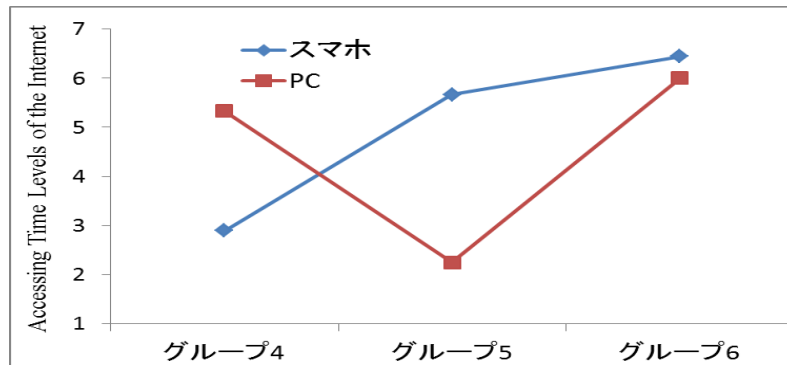


図 3-10 スマホ・PC によるインターネットの 3 グループの使用レベル

- ・グループ 4：スマホインターネットの使用時間は短く，PC インターネットの使用時間は長い。

- ・グループ 5：スマホインターネットの使用時間は長く，PC インターネットの使用時間は短い。

- ・グループ 6：スマホインターネットの使用時間も PC インターネットの使用時間も長い。

また，各グループの割合としては，それぞれ 30.0%，40.0%，30.0%であった。これらの結果から，スマホ使用者の 7 割（グループ 5 と 6）はスマホインターネットを利用し，また 3 割（グループ 6）はスマホ及び PC の両方によるインターネットを利用していることから，このグループは「インターネット使用のヘビーユーザ」とも言える。

図 3-9 及び図 3-10 より，ケータイ使用者とスマホ使用者のケータイ/PC によるインターネット，そしてスマホ/PC 使用においては，グループ 1 とグループ 4，グループ 2 とグループ 5 は類似しており，グループ 3 とグループ 6 には大きな差が存在することも示された。

3.3.3.5 メディアリテラシーに対する認識に係る 3 因子の特徴

3.3.3.3 に示したように，3 因子のうち，因子 I 「情報検索」のみににおいて，スマホ使用者の方が有意に高かった（図 3-8）。そして，具体的に，ケータイ使用者とスマホ使用者の間に，各因子に対する認識に差があるかどうか，あるとすればどこにあるのかを検討するため，各因子の平均得点²³を従属変数とする 1 要因の分散分析（実験参加者内計画，反復測定）を行った。結果は以下の通りであった。

²³ 因子 I と因子 II は 4 項目で，因子 III は 3 項目であるため，そのまま合計得点を比較することができないため，ここでは各因子の平均得点を従属変数とした。

ケータイ使用者の場合：モデル自体は成立しなかった ($F(2,42)=.73, ns$)。

スマホ使用者の場合： $F(2, 58)=11.45, p<.01$ であり，因子 I と因子 II の間 ($M_s=5.48$ vs $4.27, p<.001$)，そして，因子 II 「情報発信」と因子 III 「情報閲覧」の間に有意差が認められた ($M_s=4.27$ vs $5.38, p<.01$) (図 3-11)。これらの結果からは，スマホ使用者が，「情報検索」と「情報発信」に対する認識に差があるだけでなく，「情報発信」と「情報閲覧」に対する認識にも差があった，ということが示された。そして，ここでは，これらの認識はスマホと PC によるインターネットの使用時間と関係するかどうか，相関係数を計算したところ，スマホによるインターネットの使用時間と因子 I 「情報検索」のみ有意な相関関係が見られた ($r=.37, p<.05$)。上述したように，スマホ使用者にはグループ 4 とグループ 5 ($M_s=5.33$ vs $2.25, t(19)=6.19, p<.001$)，そしてグループ 4 とグループ 6 の間に差があった ($M_s=2.25$ vs $6.00, t(19)=8.68, p<.001$)。これらの結果はグループ 5 とグループ 6 の使用者が，因子 I 「情報検索」に対する認識が最も高かったことを示している。

これらの結果から，スマホ使用者は，情報検索と情報閲覧を同様に重要だと認識していたことが示唆された。

3.3.3.6 メディアリテラシーに対する認識と各コミュニケーションメディアの使用状況・個人的要因との関係

ここでは，留学生のデモグラフィック属性（性別・年齢・国籍²⁴・経済区分）とともに，日本のケータイ・スマホ使用に最も影響を与えると思われる個人的要因（滞日歴・日本語

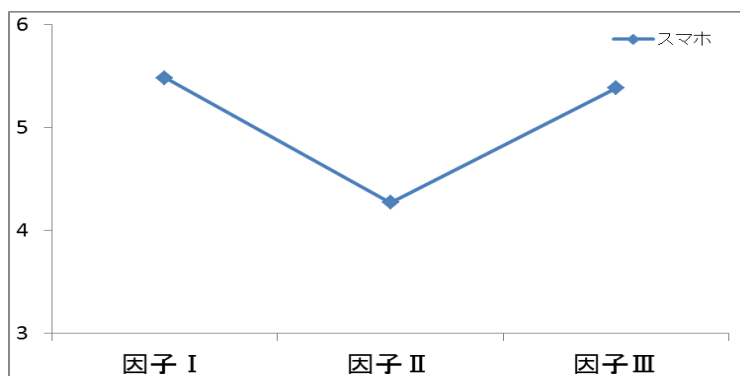


図 3-11 スマホ使用者のメディアリテラシーに対する認識の因子間の差

²⁴ 「国籍」は名義変数であるため，本研究では，「中国系」を「1」，「それ以外の国籍」を「2」とし，分析を行った。以降同様。

能力・日本語学習歴・日本ケータイ/スマホの使用歴・ケータイ/スマホによるメール入力
の熟練度)の、諸コミュニケーションメディア使用、及びメディアリテラシーに対する認識
における影響について分析し、検討を行った。結果は以下の通りであった。

(1) 携帯電話・スマホ電話の使用において、いずれのモデルも回帰式が.05以上であ
ったため、諸独立変数の効果を検出することができなかった。

(2) 携帯メール・スマホメールの使用において、経済状況と所持するケータイの種類を
独立変数とした場合のみ、モデルが成立した(回帰式の決定係数が $R^2=.13, p<.05$)。それぞ
れの効果は $\beta = -.27, p<.05$; $\beta = .27, p<.10$ 。すなわち国費留学生のほうがよりスマホメ
ールを利用した、ということである。

(3) 携帯インターネット・スマホインターネットの使用において、上述した変数を独立
変数とした場合、回帰式の決定係数が $R^2=.60, p<.001$ であり、メディアとメールの使用頻度
による有意な主効果が見られた。それぞれの効果は前者 $\beta = .66, p<.001$; $\beta = .23, p<.05$ 。即ち、
スマホ利用者で、かつスマホメールを頻繁に利用していた留学生のほうがよりスマホイン
ターネットを利用していたことである。

(4) PCメールの使用において、モデルの回帰式が.05以上であったため、諸独立変数の
効果を検出することができなかった。

(5) PCインターネットの使用において、上述した変数のうち、年齢とケータイ所持歴以
外の諸変数を独立変数とした際のモデルは $R^2=.35, p<.05$ で、PC使用歴の有意な効果($\beta = .32,$
 $p<.05$)、滞日歴と日本語学習歴による有意傾向が見られた(それぞれ $\beta = -.29, p<.10$; β
 $= .29, p<.10$)。即ち、滞日歴が短く、日本語学習歴が長く、PC使用歴が長い留学生がより
PCインターネットを使用していることであった。

次に、メディアリテラシーに対する認識は、留学生の個人的要因、各コミュニケーション
メディアの使用状況といかに関連するかを分析した。結果はまとめて図3-12に示すが、
詳しくは以下の通りである。

(1) 因子I「情報検索」において、年齢・国籍・滞日歴・日本語能力・インターネット
の使用時間を独立変数として投入した場合、回帰式の決定係数が $R^2=.34, p<.05$ であった。
そして、ケータイ/スマホインターネット使用時間による有意な効果が見られた($\beta = .37,$
 $p<.05$)。

(2) 因子II「情報発信」について、年齢・滞日歴・ケータイ/スマホ所持歴・PC使用歴・
PCインターネットを独立変数として投入した場合、回帰式の決定係数が $R^2=.23, p<.05$ であ

った。年齢による有意な効果 ($\beta = -.43, p < .01$), 滞日歴と PC インターネットによる有意傾向が見られた (それぞれ $\beta = .72, p < .10$; $\beta = .25, p < .10$)。

(3) 因子Ⅲ「情報閲覧」について、年齢・滞日歴・経済状況・日本語能力・所持するケータイ・スマホの種類/所持歴・ケータイ/スマホ/PC によるインターネットの使用時間を独立変数とした場合の回帰式は決定係数が $R^2 = .31, p < .05$ であった。PC インターネットの使用時間による有意な効果が見られた ($\beta = .30, p < .05$)。

以上の結果をまとめると、「情報発信」に対する認識のみ、留学生の年齢による有意な効果が見られており、「情報検索」と「情報閲覧」に対する認識は、個人的要因ではなく、スマホ・PC インターネットの使用時間に影響されたことが分かった。

さらに、ケータイ使用者とスマホ使用者には、日本語能力やメール入力の熟練度に差があるかどうかについても、独立したサンプルの t 検定を行い、分析した。その結果、日本語能力においてもメール入力の熟練度においても有意差は認められなかった (前者 $t(50) = .78, ns$; $t(50) = 1.43, ns$)。

3.3.4 考察

本研究では、留学生のコミュニケーションメディア観をメディアリテラシーに対する認識まで広げて、スマホの使用によって、留学生のコミュニケーションメディアリテラシーに対する認識とコミュニケーションメディア使用の関係がどの様に異なるかを明らかにすることを目的とする。そのため、以下の2つについて調べて、検討を行った。

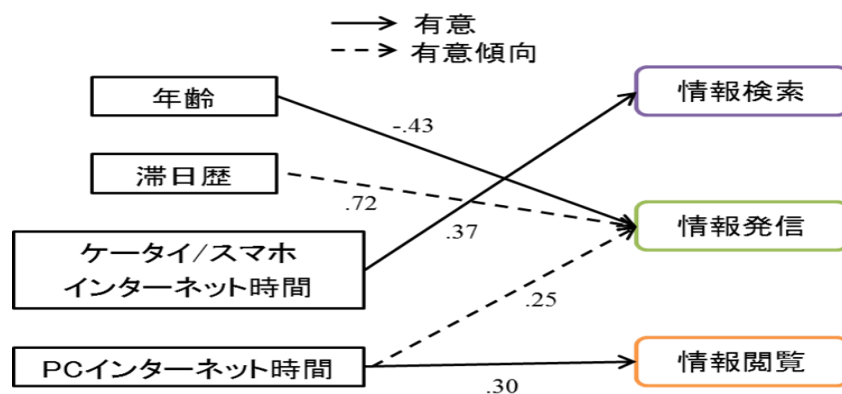


図 3-12 メディアリテラシーに対する認識に影響を及ぼす諸要因

(1) 留学生がケータイ・スマホ・PCを用いたインターネット使用に対するメディアリテラシーに対する認識がどのような因子から構成されるのか。それは各メディアによっていかに異なるのか。

(2) 留学生のメディアリテラシーに対する認識が各コミュニケーションメディアの使用状況、及び個人的要因とどう関係するのか。

以下、本研究の検討で得られた結果に基づき、それぞれの関係を以下のように整理する。

3.3.4.1 留学生のケータイ・スマホとPCの使用について

留学生のケータイ使用とスマホ使用に差異が存在していることが本研究で確認できた。留学生は主として、ケータイを電話によるコミュニケーションツールとして使用していたが、スマホのほうは電話のみならず、メール送信、インターネットへのアクセスにも使用していた。中には、メール使用に関しては、ケータイよりスマホのほうやや多く、インターネット使用に関しては、ケータイ使用者の6割以上は「全くしない」のに対して、スマホ使用者の9割以上は利用しており、半数以上は一日「80分～2時間」「2時間以上」利用していた。また、ケータイ使用者とスマホ使用者の間に、PCインターネットの使用時間に差が見られなかった。前節の分析結果に示したように、ケータイ使用者の86.4%は殆ど携帯インターネットを利用しないのに対して、スマホ使用者のほう7割はスマホインターネットを利用しており、中には3割ほどがスマホとPCの両方を併用していた。

ケータイとスマホの違いについて、藤川(2012)は「ケータイは電話機から発展したものであるのに対して、スマホはパソコンから発展したものである」としている。すなわち、ケータイは電話にいろいろな機能が加わったものであるのに対して、スマホでは通話も含めてあらゆる機能がアプリとして提供されているということである。この意味では、本研究で得られた留学生の使用結果はこの違いを反映していたと考えられる。

本研究の結果に示したように、留学生は、ケータイを主に電話によるコミュニケーション、スマホは電話のみならず、メールもインターネットも使用していることは、今後スマホの更なる普及に伴い、メールとインターネット機能がより多用されると予想される。

3.3.4.2 メディアリテラシーに対する認識と各コミュニケーションメディアの使用状況・個人的要因の関係について

本研究では、留学生のメディアリテラシーに対する認識とコミュニケーションメディア

使用頻度、個人的要因との関係についても分析した。3.3.3.6 の分析結果に示したように、諸コミュニケーションメディア使用中、デモグラフィック属性を含めた個人的要因による影響が見られたのは携帯メールとスマホメール、及びPCインターネット使用のみであった。国費留学生在がスマホメール、私費留学生在が携帯メールを利用していた。これはスマホでは使用言語の制限がなく、比較的日本語能力の低い国費留学生在にとっては使用しやすいことに由来したと考えられる。一方、日本語能力の高い私費留学生在のほうが、日本語・英語しか入力できない携帯メールでも特に困難を感じせず、使用していたと思われる。研究3の検討結果に示されたように、国費留学生在は私費留学生在より日本語能力が低く、また日本語能力の低い留学生在は携帯メールよりPCメールを多用した。スマホはPCより即時性が優れており、また使用言語に制限がない点においては同様であるため、今後、日本語能力の低い留学生在は益々スマホメールを多用するのではないかと予想される。

そして、携帯インターネットとスマホインターネットの使用に影響を及ぼすのは単なるメディアとメールの使用頻度であった。つまり、スマホ使用者が多くのメールを送信し、インターネットを多く利用していたことであった。これはケータイに比べて、低いコストでパケットの使い放題を利用できるスマホのほうが使用しやすいからと推測できる。

また、携帯電話・スマホ電話とPCメールにおいては、いずれも有意な回帰式が得られず、これらの使用に影響を及ぼす諸要因が見られなかった。それはおそらく、携帯電話・スマホ電話、PCメールの使用は特に言語能力における制限がないからではないかと考えられる。しかし、PCインターネットの使用には、PC使用歴による有意な効果、滞日歴と日本語学習歴によるやや有意な効果が見られた。これについておそらく、来日する以前から日本語を学習していたが、滞日歴が短いため、日本のケータイ・スマホを使い慣れていないと思われる。それゆえ、PCインターネットのほうを多用していたと考えられる。

さらに、留学生的のメディアリテラシーに対する認識に影響を及ぼす諸要因について検討した結果では(図3-11)、因子Ⅰ「情報検索」に関してはケータイ・スマホによるインターネットの使用時間、因子Ⅱ「情報発信」に関しては年齢による有意な効果、滞日歴とPCインターネットによる有意傾向、そして因子Ⅲ「情報閲覧」に関してはPCインターネットの使用時間による有意な効果が見られた。即ち、留学生的の情報検索に関する認識はケータイ・スマホによるインターネットの使用時間に影響されるのに対して、情報閲覧に対する認識はPCインターネットの使用時間に影響されたことである。図3-10に示したように、スマホ使用者には因子ⅠとⅡ、因子ⅡとⅢの間にそれぞれ差が見られたが、ケータイ使用者に

は同様の結果が得られなかった。これらを含めて考えると、留学生とりわけスマホ使用者の情報検索に関する認識が、日頃スマホ等を使い慣れていることに由来したと考えられる。一方、因子Ⅲ「情報閲覧」に対する認識は、大きな画面で短時間で多くの情報収集ができるPCのほうが便利であることに由来したと考えられる。つまり、スマホによるインターネットは主に情報検索に利用し、PCインターネットは主に情報閲覧に利用していることが、本研究の検討結果より明らかになった。

3.4 本章のまとめ

本章は、2つの研究から構成された。研究3ではケータイとPCを中心に、留学生の日本語能力によって、携帯メール・携帯電話・PCメールの使用がどの様に異なるのかを調べるとともに、それに伴うコミュニケーションメディア観がどのように異なるのか。また、コミュニケーションメディア観とコミュニケーションメディアの使用及び個人的要因といかに関係するのかについて検討を行った。結果、以下の3点が明らかになった。

(1) 中上級日本語能力を有する留学生は携帯メールと携帯インターネットを多用したのに対して、日本語能力の低い留学生はPCメールとPCインターネットを多用した。

(2) 留学生全体のコミュニケーションメディア観は情報伝達・友情増進・対人緊張の3側面において相違が存在することが確認できた。また、中上級日本語能力を有する留学生は携帯メールに対する評価が総じて高かったが、日本語能力の低い留学生は概してPCメールに対する評価が高かった。

(3) 留学生の一部の個人的要因とともに、各コミュニケーションメディアの使用頻度がそのコミュニケーションメディアの情報伝達と友情増進における効果に正の影響、対人緊張の低減に有効であった。

研究4では、ケータイとPCに加えて、スマホも取り上げ、ケータイ・スマホによる電話・メール・インターネットの使用、及びPCによるメールとインターネット使用の状況を調べるとともに、諸使用に関するメディアリテラシーに対する認識、及びそれらに影響を及ぼす諸要因についても検討した。その結果、留学生のケータイ使用とスマホ使用の間に差異が見られ、ケータイは主として電話機能として使用されるのに対して、スマホは電話だけでなく、メールやインターネット機能も使用されていることが分かった。また、メディアリテラシーに対する認識は「情報検索」「情報発信」「情報閲覧」という3因子で構成され、ケータイ使用者に比べて、スマホ使用者の情報検索に対する認識が有意に高かった。また、スマホによるインターネットの使用時間は情報検索に対する認識、PCインターネットの使用時間は情報閲覧に対する認識に正の影響を及ぼしたことが分かった。つまり、スマホインターネットを主に情報検索に、PCインターネットは主に情報閲覧に利用していることが、本研究の検討結果より明らかになった。

なお、研究3と研究4はいずれも質問紙調査法による検討であったため、携帯メール（研究4ではスマホメールも含めた）とPCメールの送信した文字数等に関する諸属性の違いについては統制できなかつた。今後より厳密に区別して検討する必要がある。

第4章 留学生のコミュニケーションメディア使用が異文化適応状況に及ぼす影響

4.1 本章の背景、目的及び仮説

本章では、留学生らのコミュニケーションメディア使用がいかに異文化適応状況に影響を与えるのかについて検討を行う。

異文化適応の定義について、田中（2000）は「心身が健康で、社会的にも良好な状態で課題達成を遂げており、異文化性に基づく困難を乗り越えて異文化理解を果たしていること」としている。異文化接触における態度は、自他文化に対する好意的・否定的態度の組み合わせによってことなり（Berry, 1990）、また、文化学習が行われれば、多文化対応能力が育つ（江淵, 1994）とされ、留学生の場合でも、言語獲得や文化的習慣の摂取など、ある程度ホスト文化への文化適応が行われる（田中, 2000）。このような多文化対応能力は留学生にとって、健康的な生活と学業達成を確保したり、文化学習や成長発達を促したりするには非常に極めて重要だとしている。そこで、本章では、留学生の「異文化適応状況」を日本文化という環境におかれてどれほど適応できているかに関する「適応感」と、留学目的の達成「満足度」、という2側面から取り上げ、検討を行う。加えて、留学生らの一般的な日本人学生に対する好意度が高ければ高いほど、より活発な異文化コミュニケーションを行い、情報提供などを含むソーシャル・サポートを獲得することができ、その結果、よりよい適応状況になると考えられる。そこで、本章でいう「異文化適応状況」には「一般的な日本人学生に対する好意度」も含める。

本章では、留学生のコミュニケーションメディア使用が異文化適応状況の向上にどの様に寄与しているかを明らかにすることを目的とする。近年、ケータイの機能は進化し、通話機能のみならず、SMSを含めた携帯メールや携帯インターネットの使用も一般的になっている。携帯メールや携帯インターネットは、PCメールやPCインターネットに比べて、常時利用可能であることに特徴がある。即ち、携帯メールや携帯インターネットの使用は、ユーザを時間的・空間的束縛から解放し、他者と随時に連絡し、即時に情報収集し、気軽に悩み相談などをすることも可能にしている。これらのことから、留学生の様々なコミュニケーションメディア使用が異文化適応状況を高めることが予想される。

これまで、PCインターネットや携帯メールを含むCMC使用が日本人学生の孤独感の低

減に及ぼした影響は、大学生の場合は孤独感の低減に悪影響が見られ（安藤ほか，2003），中学生の場合は孤独感の低減にポジティブな効果が見られた（安藤ほか，2005）。つまり，発達段階（年齢）によって異なっている。また，携帯メールによる社会的ネットワークの形成も男性に比べて，女性のほうがより積極的であることが明らかになっている（Igarashi et al., 2010）。そして，第3章・研究3の検討で明らかになったように，年長の男性国費留学生はPCメールを多用しているのに対して，若い女性私費留学生は携帯メールを多用している。これらのことより，年齢や性別によって，留学生らは異なるコミュニケーションメディアを使用し，その結果，異文化適応状況に異なる影響を与えると予想される²⁵。

さらに，これまで在日留学生の異文化適応状況に関する検討では，彼らの滞日歴，日本語能力，日本語学習歴による効果に関する知見は一貫していない（譚ほか，2011）。一般的には，留学生の滞日歴もしくは日本語学習歴が長ければ長いほど，日本語能力が上達し，日本語によるコミュニケーションも多くなることが予想される。それに伴い，様々なコミュニケーションメディアを使い分け，より適切なソーシャル・サポートを獲得することができ，その結果として異文化適応状況がよりよくなると考えられる。そこで，本章では，留学生のデモグラフィック属性（年齢・性別・経済状況）とともに，滞日歴・日本語学習歴・日本語能力を統制変数として取り上げ，それぞれの「コミュニケーションメディア使用」と「異文化適応状況」に及ぼす効果を検証する。これを第2の目的とする。

上記の議論を踏まえ，本章の仮説は次の2つとなる。

仮説1：留学生の様々なコミュニケーションメディア使用が異文化適応状況を向上するだろう。つまり，在日生活における適応感と満足度を高め，一般的な日本人学生に対する好意度を高めることができるだろう。

仮説2：留学生の滞日歴もしくは日本語学習歴が長ければ長いほど，日本語能力が上達し，日本語によるコミュニケーションも多くなり，それに伴い，様々なコミュニケーションメディアを適切に使い分けることができ，その結果，異文化適応状況がよくなるだろう。

本章ではこの2つの仮説を検証するために，図4-1に示すモデルを構成し（共分散構造分析，以下「SEM」と略す），諸変数間の関係を分析する。

²⁵ 新明解国語辞書によると，「デモグラフィック属性」とは，性別，年齢，居住地域，収入，職業など，そのひとつもつ人口統計学的属性である，としている。この定義に従い，本章では，性別・年齢・経済状況（国費・私費）の3つの要因を「デモグラフィック属性」として扱う。一方，日本語能力や滞日歴等の個人的要因は人口統計学的属性ではないため，本章ではこれらを「統制変数」として扱う。

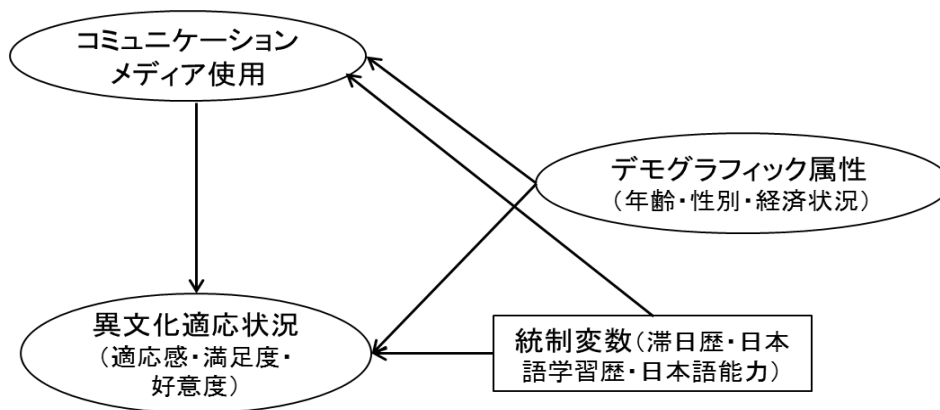


図 4-1 分析するパスモデル (SEM)

4.2 方法

調査回答者と手続き 第3章・研究3「留学生のコミュニケーションメディア観及びそれに影響を及ぼす諸要因」と同様である。

調査項目 個人情報・来日後のケータイ使用・これまでのPC使用、などに関する項目は第3章・研究3と同様である(付録16)。本章では、「異文化適応状況」に関する項目を作成した。

まず、「適応感」に関する5項目(表4-1の項目1~5)は岡ら(1996)と湯(2004)の使用した項目から抽出した。岡ら(1996)は、留学生の留学目的重視度が最も高かったのは「研究・勉強」であり、その次は「交流」、「文化体験」と「言語」である。そこで、本章でいう「満足度」もこの4つの面から取り上げ検討する。「満足度」(表4-1の項目6~15)は、岡ら(1996)の使用した項目のうち、文化体験2項目を抽出して本調査に使用した(表4-1の項目9と10)。また、適応状況は心理的適応だけでなく、社会文化適応も含まれるため、Simic-Yamashitaら(2010)の項目のうち、関連する4項目を抽出した(表4-1の項目6, 11~13)。加えて、多くの学生は学位取得するために来日したため(e.g., 葛, 1999), 「研究方法や専門技術が学べる」と「学位を取得する自信がある」の2項目(表4-1の項目7と8)も作成した。更に、異文化間の対人関係を形成し難い原因は滞在国の言語能力の欠如とされているため(湯, 2004), 本調査では「日本語が上達になった」「他の外国語も習得できた」の2項目も作成した。これらの項目に対して、7件法「7. 非常に当てはまる; 4. どちらでもない; 1. 全く当てはまらない」で評定させた(表4-1)。

また、留学生の「一般的な日本人学生に対する好意度」に関する尺度は、第 2 章の実験（付録 3）で使用した「1. あなたは、一般的な日本人学生を、どれくらい好きですか」「あなたはどれほど、一般的な日本人学生と一緒に勉強したり、仕事をしたりしたいと思いますか」の 1 項目を使用し、それぞれ 7 件法（項目 1 に対しては「7. 非常に好きだ」「4. どちらとも言えない」「1. 全く好きではない」であり、項目 2 は「7. 非常にそう思う」「4. どちらとも言えない」「1. 全くそう思わない」）を用いて評定させた。

4.3 結果

4.3.1 調査回答者に関する情報・各コミュニケーションメディアの使用状況

第 3 章・研究 3 の結果と同様であるため、ここでは以下の通り簡単にまとめておく。

調査回答者に関する情報 397 名の回答が分析対象となり、男女の割合は 6 対 4 であり、全体の平均年齢は 26.9 歳であった。出身国の前 6 位は中国系（55.4%）、韓国系（11.8%）、マレーシア（5.3%）、バングラデシュ（5.0%）、ベトナム（4.3%）とスリランカ（3.5%）であった。在籍身分に関しては 1/3 以上は学部生で、半数以上は大学院生（修士・博士）であり、残りは「その他」であった。そして、8 割以上は私費留学生であった。滞日歴に関しては、7 割以上は 1～4 年を有し、平均日本語学習歴は 4 年以上であった。さらに、4 割以上は日本語能力試験 1 級に合格しており、「学部生」、「大学院生」、「その他」の合格割合は、それぞれ 55.2%、31.6%、43.3%であった。すなわち、学部生の日本語能力が最も高かった、ということである。

コミュニケーションメディアの使用状況 留学生のケータイと PC の使用状況に関する調査結果は前章に示している。ここでは以下に簡単にまとめる。

(1) 半数以上の留学生は日本のケータイを「1～4 年」使用しており、6 割以上は PC を 8 年上使用していた。

(2) ケータイによる電話・メール・インターネットの使用頻度はそれぞれ以下ようになった。①1/4 は一日 3～5 回電話をしていた；②8 割の学生は 1 日 10 通以下のメールを送信していた；③半数以上はインターネットを利用していた。

(3) PC によるメールとインターネットの使用頻度は、9 割以上は 1 日 10 通のメールを送信しており、1/4 ほどは一日 6 時間以上インターネットを使用していた。

なお、第 3 章研究 4 では、ケータイとスマホに分けて検討を行ったが、本章は研究 3 と

同様に 2011 年 6 月に実施されたもので、当時のスマホ普及率は 2 割程度であるため、厳密にケータイとスマホを区別せず、「ケータイ」と称すことを留意されたい。

4.3.2 異文化適応状況

留学生の適応感と満足度に関する 15 項目及び各項目の平均得点・標準偏差は表 4-1 に示している。15 項目の評定信頼性係数は $\alpha=.67$ 、内的整合性が確認できた。また、15 項目の合計の平均得点は 76.97 ($SD=10.10$, レンジ: 47-126) であり、これは留学生の異文化適応状況が比較的良好だと言える。また、留学生の「適応感」(表 4-1 の項目 1~5) 項目における合計の平均得点は 22.25 ($SD=4.88$, レンジ: 12~33) であり、これはやや適合していると言える。そして、「満足度」に係わる 10 項目 (6~15) の合計の平均得点は 54.59 であった ($SD=7.92$, レンジ: 25~70)。これは、留学生らが在日生活に対して「やや満足している」と示す結果であった。「満足度」に係る 10 項目をコミュニケーションと関連する項目 (表 4-1 の 9, 10, 11, 14 と 15, ここでは「交流感」と名付ける) とそれ以外の項目 (表 4-1 の 6, 7, 8, 12 と 13, ここでは「知識・体験」と名付ける) に分けて、対応ありの t 検定を行ったところ、両者に有意差が見られた。「知識・体験」対「交流感」は 28.94 vs 25.65

適応感と満足度に関する項目	平均得点 (SD)
1. 大学での研究や勉強が楽しい	4.93 (1.73)
2. 日本人の挨拶や礼儀が分からなくて困ることがある*	4.02 (3.08)
3. 自分が外国人で目立つので、自分の行動が制限される*	4.69 (1.67)
4. 日本に来てから感情の変化が激しくなった*	5.02 (1.73)
5. 日本に来てから寂しくなることがよくある*	3.74 (1.84)
6. 専門的知識を深めることができた	5.66 (1.15)
7. 研究方法や専門技術が学べる	5.79 (1.14)
8. 学位を取得する自信がある	5.94 (1.12)
9. いろいろな人と付き合っている	5.28 (1.36)
10. 外国人の友人がいる	5.65 (1.25)
11. 教員らとの交流が深まる	4.92 (1.57)
12. 日本の文化を体験することができる	5.58 (1.15)
13. 日本に関する知識・理解が深まる	5.97 (.96)
14. 日本語が上達になった	5.79 (1.17)
15. 他の外国語も習得できた	4.01 (1.80)
*逆点項目	
好意度に関する項目	平均得点 (SD)
1. あなたは、一般的な日本人学生を、どれくらい好きですか?	5.14 (1.18)
2. あなたはどれほど、一般的な日本人学生と一緒に勉強したり、仕事をしたりしたいと思いますか?	5.46 (1.10)

であった ($t(396)=17.71, p<.001$)。即ち、「知識・体験」に係る満足度は友人や教員との交流に係る満足度より有意に高かった。

また、「一般的な日本人学生に対する好意度」の合計の平均得点は 10.6 ($SD=2.1$, レンジ: 4-14) であった。これは「やや好きだ」と示す 10.0 より高かったので、比較的「好意的に知覚した」ことが示された。そして、独立したサンプルによる t 検定を行った結果、女性に比べて、男性の方がやや高い好意度を示したことが分かった (男&女: $M_s=10.75$ vs 10.30 , $t(395)=2.19, p<.05$)。

4.3.3 諸変数の相関関係

各仮説の検討に入る前に、本研究の分析に取り上げる各変数間の相関関係を算出した。各変数とは、「デモグラフィック属性」としての「性別・年齢・経済状況」、統制変数としての「滞日歴・日本語学習歴・日本語能力」、ケータイ使用 (ケータイ使用歴・1日の携帯電話使用頻度・携帯メール送信頻度・携帯インターネットの使用時間・メール入力の熟練度)、PC使用 (これまでの使用歴, 1日のインターネットの使用時間とメールの送信頻度)、及び異文化適応状況 (適応感, 満足度, 一般的な日本人学生に対する好意度) である。

結果を表 4-2 に示す。表 4-2 より、性別と PC メール送信頻度はいずれの変数とも相関しないことが分かった。一方、年齢は経済状況・日本語能力・携帯メール送信頻度とは負の相関関係、日本人学生に対する好意度とは正の相関関係が見られた。また、滞日歴は

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
1. 性別	—																
2. 年齢		—															
3. 経済状況		-.27**	—														
4. 滞日歴				—													
5. 日本語学習歴				.25**	—												
6. 日本語能力		-.37**	.33**	.41**	.42**	—											
7. ケータイ使用歴				.65**	.23**	.32**	—										
8. 携帯電話の使用頻度								—									
9. 携帯メールの送信頻度		-.24**				.21**		.26**	—								
10. 携帯メール入力熟練度								.30**	—								
11. 携帯インターネット使用時間								.29**	.21**	—							
12. PC使用歴											—						
13. PCインターネット使用時間			-.21**			-.42**					.20**	—					
14. PCメールの送信頻度													—				
15. 適応感						.32**								—			
16. 満足度														.20**	—		
17. 好意度		.28**				-.33**										.36**	—

日本語学習歴・日本語能力・ケータイ使用歴と有意な正の相関関係があった。さらに、日本語能力は年齢・PCによるインターネットの使用時間、日本人学生に対する好意度との間に負の相関関係、経済状況・滞日歴・日本語学習歴・日本ケータイの使用歴・携帯メールの送信頻度・適応感との間に、有意な正の相関関係が認められた。また、PCによるインターネットの使用時間は経済状況・日本語能力との間に負の相関関係、PC使用歴とは正の相関関係があった。最後に、好意度は年齢・満足度との間にも正の相関関係が見られた。

以上の結果から、留学生のデモグラフィック属性と日本語能力に係る諸要因は様々なコミュニケーションメディアの使用及び異文化適応状況と関係することが示された。即ち、SEMを分析する条件が満たされた。

4.3.4 SEMに関する検討

ここでは、留学生のコミュニケーションメディア使用と異文化適応状況の関係、及びデモグラフィック属性・各統制変数の両者に及ぼす影響について分析した。図4-1に示したSEMをもとに、統制変数を1つずつ投入したモデルと、2つ以上の統制変数を投入したモデルの比較をし、全体のモデル構成を試みた。結果は以下の通りであった。

まず、図4-1に示したモデルに、日本語能力を統制変数として投入した場合、SEMは成立できなかった(適合度は良くなかった)。そこで、「デモグラフィック属性」から「コミュニケーションメディア使用」への矢印の標準化係数が有意ではなかったため、この矢印を取り除いた。同様に、日本語学習歴・滞日歴をそれぞれ統制変数として投入したモデル、2つずつを組み合わせて統制変数としたモデル、3つの変数を統制変数としたモデルをそれぞれ検討した。その結果、日本語学習歴と滞日歴をそれぞれ投入したモデルと、2つの変数を同時に投入したモデルは成立した。3モデルの適合度指標(GFI: Goodness of Fit Index, 適合度; AGFI: Adjusted Goodness of Fit Index, 修正適合度指標; RMR Root Mean square Residual: 残差平方平均平方根), 及び情報量基準(AIC: Akaike's Information Criterion, 赤池情報量基準), RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation)を表4-3に示す。表4-3から、「日本語学習歴」を統制変数として投入したモデル1の適合度が最も良かったため、本章ではモデル1、つまり、日本語学習歴のみを統制変数としたモデルの結果を用いて、検討を行った。図4-2にSEMの分析結果を示す。

図4-2より、留学生のコミュニケーションメディア使用もデモグラフィック属性も、異文化適応状況に有意な正の影響を及ぼしており、一方、統制変数としての日本語学習歴は異

文化適応状況に負の影響を及ぼしたことが分かった。なお、デモグラフィック属性と日本語学習歴は、いずれもコミュニケーションメディア使用への効果は認められなかった。

コミュニケーションメディア使用において、ケータイ使用特に「携帯メールの送信頻度」のパス係数が非常に大きな正の値となり、「携帯インターネットの使用時間」「携帯メールの入力熟練度」「携帯電話をする頻度」も正のパス係数であった。また、PC使用については、いずれもパス係数の値は小さく、「PCインターネットの使用時間」のパス係数は負であった。これは、ユビキタス性がより優れているケータイのほうが異文化適応状況の向上により大きく寄与しており、特に携帯メールの使用が大きな影響を与えたことを意味する。

表 4-3 得られた各モデルの指標

モデル	統制変数名	GFI	AGFI	RMR	RMSEA	AIC
1	日本語学習歴	.946	.907	1.301	.079	157.316
2	滞日歴	.939	.895	5.085	.088	175.348
3	日本語学習歴及び滞日歴	.923	.873	5.262	.092	226.669

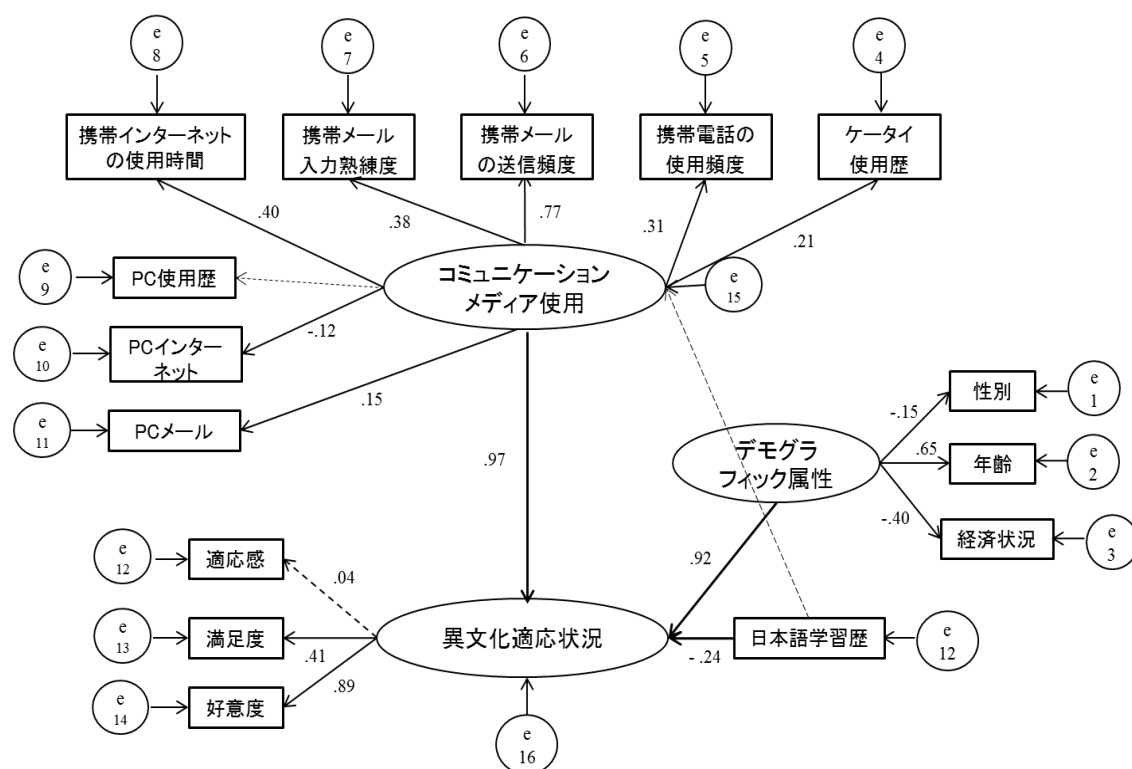


図 4-2 コミュニケーションメディア使用と異文化適応状況に係る SEM 分析結果

次に、「デモグラフィック属性」が「異文化適応状況」に対して大きな効果があり、具体的には年長の男性国費留学生のほうが全体の適応状況が比較的良好であったことが分かった。

統制変数の効果について、「日本語学習歴」が異文化適応状況に負の影響を及ぼしたことが分かった。これは、留学生の日本語能力が異文化適応に負の影響を与えると示した多くの先行研究 (e.g., 高井, 1989) と同様の結果であった。

「異文化適応状況」において、留学生の「日本人学生に対する好意度」が最も大きなパス係数を示しており、「満足度」は中程度、「適応感」とは有意なパス係数が得られなかった。これは、留学生らはコミュニケーションメディアの使用により「一般的な日本人学生に対する好意度」と「満足度」は向上しているが、日本文化に適応できていない、即ちコミュニケーションメディア使用が適応感の向上に効果がなかったことを意味する。

4.4 考察

本研究には主として2つの検討目的があった。第1の目的は留学生のコミュニケーションメディア使用が彼らの在日生活における異文化適応状況を高めることができるかどうかを明らかにすることである。SEM分析の結果より、全体として、留学生のコミュニケーションメディア使用が異文化適応状況に正の影響を及ぼしており、特にPC使用より、ケータイ使用の影響が大きいことが分かった。これは、PC使用には入力言語の制限がない等の利点はあるが、他者と随時に連絡し、手軽に使用できるケータイに比べて、ユビキタス性がそれほど優れていないことに由来したと考えられる。

金(2003)は、「在日留学生が携帯電話をよくする相手は、母語話者の親しい友人が多く、その利用が増えるにつれ、留学生の社会的ネットワークが母語話者中心のものに収斂してしまう可能性が示唆される」としている。即ち、ケータイの使用は、「留学生の交友関係を同言語話者と異言語話者との『分層化』することを助長し」、また、ケータイを持っている方が異文化適応が良くないため、「携帯電話の高頻度の利用は、留学生の一部の人々を外国人としての孤立化に拍車をかける可能性がある」、とも指摘している。

金(2003)が取り上げた「異文化適応」に係る項目は、「よくいらいらした気持ちを感じる」「孤独で寂しいと感じるほうだ」「日本の生活に不安を感じている」「よく疲れを感じるほうだ」「日本の生活に満足している」を含む「一般的適応」と、「日本人の礼儀正しさに

関してイメージダウンした」「日本の大衆文化に関してイメージダウンした」の「対日イメージ」に関するもの、「最近日本人と交友関係が一般的に希薄になったと思う」「母語話者と日本と母国の違いについてよく話す」「いつも母国について情報が必要だと思う」「母国の文化は一般的に日本文化より優れていると思う」といった母国と日本の関係に関する項目、および「日本的価値観にある程度なじんでいるほうだ」「日本の文化についてかなり理解できない部分がある」といった内容であった。つまり、この類の適応は、日本人と深く交流しない限りでは、適応できないものである。金（2003）の調査が実施された2002年の時点では、iモードは使われているが、ケータイは主として音声機能として使われたため、その使用対象が母語話者同士ということは日本人との交流を阻むことになってしまったのではないかと考えられる。

一方、2011年に調査を実施した本章の結果（図4-2）では、留学生らのケータイ使用の形態は、携帯電話の使用頻度に比べて、携帯メールの送信頻度は非常に大きなパス係数を示した。それだけでなく、携帯インターネットの使用時間と携帯メールの入力熟練度も携帯電話の使用頻度より大きなパス係数を示していた。これは、携帯電話に比べて、留学生らが携帯メールと携帯インターネットをより頻繁に利用していたことを意味する。第3章・研究3の結果で明らかになったように、留学生全体としてPCメールより携帯メールのほうを多用し、友情増進の面では携帯メールと携帯電話の効果を同様に高く評価した（表3-7）。また、情報伝達の面では全体としてPCメールの効果が高く評価されたが、日本語能力の高い留学生は携帯メールの効果をPCメールと同様に高く評価した（表3-11）。更に表4-2に示したように、携帯インターネットの使用時間と携帯メールの使用頻度に正の相関関係があった。つまり、留学生のケータイ使用は従来の音声によるコミュニケーションから携帯メールと携帯インターネットに変わってきたのである。

携帯メールや携帯インターネットの使用は、ユーザを時間的・空間的束縛から解放し、常に他者と連絡し、気軽に悩み相談をすることを可能にしている。また、携帯インターネットにアクセスすれば、掲示板や、参加するコミュニティへの書き込み、MixiやFacebookのようなSNSを気軽に利用することもできる。これらの使用は、留学生の自己開示のみならず、他者に意見を求めたり、共感を示したり、情報を共有したりすることもできる。その結果、彼らは必要な情報を入手することができ、社会的不安が低減され、異文化適応状況が良好に保てられたと自己評価したのではないかと考えられる。つまり、今まで対面でなければできなかったことはコミュニケーションメディアとりわけ携帯メールと携帯イン

ターネットを使用することによって随時に、手軽にできるようになったため、留学生らは在日生活に対する満足度を高めることができ、日本人学生に対する好意度も高いまま保たれたのである。この意味では、ケータイ使用が留学生の在日生活に対する満足度と一般的な日本人学生に対する好意度の向上に寄与していると言える。

しかしながら、図 4-2 に示したように、異文化適応状況のうち適応感との間に殆ど関係がなかった。これは、留学生らは日本文化に適応できていない、すなわちコミュニケーションメディアの使用が適応感の向上に効果がないことを意味する。本研究で取り上げた適応感とは、大学での研究や勉強が楽しいかどうか、日本人の挨拶や礼儀に困ることがあるかどうか、自分の行動が制限されていると思うかどうか、感情変化が激しくなるかどうか、寂しくなることがあるかどうか、といった内容であった。これらは前述した金（2003）の取り上げた「一般的適応」の項目と同様に、日本人と接触し、本格的なコミュニケーションを行わない限りではカルチャーショックを緩和できないものである。田中（2000）が指摘しているように、留学生の異文化適応において、日本人学生との交友関係が重要であり、とりわけ日本人学生を含む充実した社会的ネットワークの形成が、留学生らの日本式のソーシャルスキルの習得に役立ち、その結果、在日生活への適応に有効である。しかし、携帯メールはユーザの同質性を高め、異質な他者に対する寛容性が低いため（小林・池田，2007；2008）、留学生と日本人学生が携帯メールを用いて、互いに緊密な社会的ネットワークを形成することは難しかったのではないかと考えられる。その結果、母国語話者同士や他国籍の友人がいても、日本語が上手になり、外国語の習得ができて、日本人学生と接触せずに単なる高い好意度を保ただけでは、日本文化への理解や本格的な適応ができなかった。つまり、本研究の検討結果に示したように、満足度と一般的な日本人学生に対する好意度のみの異文化適応状況が向上したということは、ケータイ使用により日本における居心地はよくなっているが、真の異文化コミュニケーションによる適応を促進することができない。この意味では、本研究が取り上げた異文化適応状況に関する内容は金（2003）と異なっているが、留学生のケータイ使用が日本人学生との交流に影響を及ぼし、同言語話者と異言語話者との「分層化」に拍車をかけるのは同様だと言える。

本研究のもう 1 つの目的は、留学生の「デモグラフィック属性」（年齢・性別・経済状況）及び滞日歴・日本語学習歴・日本語能力といった統制変数の「異文化適応状況」と「コミュニケーションメディア使用」における効果を明らかにすることである。

まず、デモグラフィック属性について、図 4-2 に示したように、異文化適応状況に対して

は有意な影響を及ぼしたが、コミュニケーションメディア使用に対しては効果が見られなかった。本章の結果より、比較的年長の男性国費留学生のほうが異文化適応状況に対して良好だと自己評価した結果が示された。

これまでに、私費留学生を対象に、異文化適応に関する検討は多くされてきているが、国費留学生に関する検討はほとんどされていない。当然のことではあるが、日本政府より奨学金が支給される国費留学生のほうが経済的に豊かで、自力で生活費や学費等を解決しなければならない私費留学生と比べて精神的に安定していたと思われる。つまり、研究に専念できる環境が整っているため、多くの人と交流し、外国語の習得をすると同時に、日本に関する知識や理解も深まった。また、井上・メリノ（2007）が指摘しているように、研究室の一員としての留学生にとっては、大学での日本人学生との交友関係は彼らの勉強上の成功や所属意識に必要不可欠だと捉えられる。これは、国費留学生においてはより顕著であろう。本研究の結果に示したように（表 4-2）、国費留学生より私費留学生のほうが日本語能力高かった。比較的日本語能力が低い国費留学生は、日本人学生の助けをより多く求めており、それゆえ、たくさんサポートしてくれた日本人学生に対する好意度も高かったのだと考えられる。

また、統制変数の効果については、図 4-2 に示したように、日本語学習歴のみ、異文化適応状況に対して有意な負の効果が見られた。しかし、表 4-2 に示したように、日本語学習歴と適応感・満足度・好意度との間に、負の相関関係は見られなかった。なぜ SEM に投入した場合、日本語学習歴が異文化適応状況に負の影響を及ぼすことになったかは今後引き続き検討すべきと言える。

以上の結果をまとめると、仮説 1 は部分的に支持されたが、仮説 2 は支持されなかった。

現在、スマホの使用が増加している。スマホは、Skype や LINE, Facebook など、多くのメッセージを手軽に使用することができ、また入力の言語制限もないため、留学生同士の交流がより活発化されると予想される。それだけでなく、第 3 章・研究 4 の検討結果に示したように、留学生はスマホによるインターネットを主に情報検索に使用していたことから、留学生らが情報収集をしたい時、日本語もしくは英語で身近の日本人学生に尋ねるより、スマホを用いて母語による情報検索をしたほうがより便利だと思われる。この点においては、スマホ使用が増加しても、日本人学生との交友関係は増進しないのではないかと予想される。

なお、孫（2013）が明らかにしているように、留学生のパーソナリティ特性も異文化適

応（社会文化的と心理的）に影響を与えた。例えば、損害回避や新奇性追求といった気質特性が社会文化的適応を左右するのに対して、自己志向性や自己超越性のような性格特性はより心理的適応に直接影響を及ぼした。異文化適応は 1 つの要因によって決められるものではないため、今後多方面から検討する必要があるだろう。

さらに、コミュニケーションメディアの使用において、ユーザの性格特性、とりわけ社交性が同期的・非同期的 CMC の使用にも影響を及ぼす、と示した先行研究があった（e.g., Chan, 2011; Harbaugh, 2010 ; 齊藤・野村, 2012）。これらの研究結果より、今後、留学生のコミュニケーションメディア使用と異文化適応に関して検討をする際に、コミュニケーションメディアの諸特徴だけでなく、留学生らの個人特性も含める必要があると示唆された。

4.5 本章のまとめ

本研究の検討結果から、以下の 2 点に要約することができる。

(1) 留学生のコミュニケーションメディア使用が全体として異文化適応状況に正の影響があり、とりわけ PC 使用よりもケータイ使用のほうが大きな影響が見られた。つまり、ユビキタス性がより優れているケータイ、特に携帯メールの使用が異文化適応状況の向上により大きく寄与していた。しかしながら、異文化適応状況のうち適応感との間に有意なパス係数は得られなかった。これは、留学生らは日本文化に適応できていない、即ちコミュニケーションメディアの使用が適応感の向上に効果がないことを意味する。つまり、満足度と好意度のみ異文化適応状況があがっているということは、ケータイ使用により日本における居心地はよくなっているが、真の異文化コミュニケーションによる適応を促進することはできない。

(2) 留学生の異文化適応状況において、日本語学習歴による有意な負の効果は見られたが、日本語能力と滞日歴の影響は認められなかった。

現在、スマホの使用が増加している。スマホは、LINE や Facebook などのメッセージを手軽に使用することができ、また入力と言語制限もないため、留学生同士の交流がより活発化され、日本人学生との交友関係は増進しないのではないかと予想される。この点においては、スマホの更なる使用に伴い、本研究の結果は、益々強化されるとも考えられる。

なお、第 3 章と同様に、本研究は質問紙調査による検討であったため、調査項目としては「ケータイ使用」と「PC 使用」に分けて尋ねたが、携帯メールと PC メールを送信量な

どにおいては区別できなかった。今後より詳細な分類を行い検討していきたい。

本研究の知見の一般性に注意する必要がある。本研究の調査対象は関東地域の国立大学に在籍する留学生のみであり、留学生の所属する大学の所在地や規模、研究分野によって異文化適応状況も異なると考えられる。また、本研究は 1 時点の調査であるため、今後他の地域も視野に入れ、パネル調査を実施し、コミュニケーションメディア使用が留学生の異文化適応と社会的ネットワークに及ぼす影響及びその影響過程のモデルについて、本研究の結果を参考に、更なる検討を行っていくことが望まれる。さらに、ケータイとスマホを明確に区別し、それぞれの使用と異文化適応の関係について詳しく検討することも必要であろう。

第5章 結 論

5.1 得られた成果

本論文の目的は、ケータイや、スマホ、PC といったメディアの使用が、いかに留学生と日本人学生の異文化コミュニケーションに影響を及ぼすのかを明らかにすることであった。そこで、異文化コミュニケーションの主な理論、即ち対人関係中心の理論、メッセージ中心の理論、及び異文化接触中心の理論に基づき、それぞれ①日本人学生の中国人留学生に対する印象形成、②中国人留学生の日本語使用及び日本人学生の印象形成への影響、③留学生の異文化適応状況、という 3 側面から取り上げ、検討を行った。加えて、ユーザのコミュニケーション行動と深く関係するとされた心理的要因としてのコミュニケーションメディア観にも焦点を当て、留学生の日本語能力によって、コミュニケーションメディアの使用とコミュニケーションメディア観にどのような相違点があるのか、両者はどう関係するのかについても検討した。

本研究で得られた主な成果は、①中国人留学生と日本人学生の異文化コミュニケーションにおけるケータイ使用の影響、②留学生のコミュニケーションメディア観と使用状況・個人的要因との関係、③留学生のコミュニケーションメディア使用が異文化適応状況に及ぼす影響、の 3 点に整理できる。

成果 1: 中国人留学生と日本人学生の異文化コミュニケーションにおけるケータイ使用の影響を解明した

第 2 章・研究 1 では、日本人学生の中国人留学生に対する印象形成は携帯メール（テキスト）と携帯電話（音声）という 2 つのコミュニケーションメディアによって違いがあるのか、あるとすればその媒介要因は何なのかを明らかにすることを目的とし、日本人学生 40 名と中国人留学生 40 名を対象に、実験法による検討を行った。

35 組のデータを分析した結果、日本人学生の中国人留学生に対する印象形成は、携帯電話に比べて、携帯メールの方がよりステレオタイプのものになった。これは、Epley & Kruger (2005) の研究知見を確証するものである。

また、携帯電話群に比べて、携帯メール群の中国人留学生の発話量がやや少なく、その発話がより曖昧に解釈され、日本語の文法的誤用も多かった。それだけでなく、携帯メー

ル群の中国人留学生の発話内容のステレオタイプ度が高かったため、携帯メール群の日本人学生の記憶内容のステレオタイプ度も有意に高かった。一体どの変数が日本人学生の印象形成に媒介効果を与えるかについて分析をした結果、中国人留学生の日本語の文法的誤用による有意な正の影響が見られた ($\beta=.40, p<.05$)。つまり、中国人留学生の日本語の文法的誤用が多ければ多いほど、日本人学生の中国人留学生に対する印象がよりステレオタイプの的になったことが明らかになった。

また、中上級日本語能力を有する中国人留学生のケータイ使用による日本語の文法的誤用は、携帯電話に比べて、携帯メールのほうが全体の文法的誤用が多く、とりわけ誤用率が最も高かった助詞（単純平均誤用率は 9.5%）においても、携帯メールのほうが誤用が多かった（携帯メール対携帯電話は 12.7%対 6.5%）。

第 2 章・研究 2 では、携帯メールと携帯電話に加えて、携帯インターネットも取り上げ、中国人留学生と日本人学生の使用においてどのような相違点があるのか、またそれぞれの使用において個人的要因が影響を及ぼすかどうかを含め、日本人学生と中国人留学生を対象に調査を行い、分析・比較した。その結果、①日本人学生は中国人留学生に比べて、携帯メールを多用したが、中国人留学生は日本人学生より携帯電話を多用した；②日本人学生のケータイ使用には個人的要因による有意な影響は見られなかったが、中国人留学生の携帯電話・携帯メール・携帯インターネットの使用においては個人的要因による有意な影響は認められた。コミュニケーションメディアの使用頻度とユーザのコミュニケーションメディア観が深く関連することから（都築・木村，2000），携帯メールと携帯電話の使用嗜好に相違が見られた中国人留学生のコミュニケーションメディア観が日本人学生と異なっている可能性も示唆された。

なお、研究 2（表 2-10）に示したように、4 割以上の中国人留学生は一日に 5 通以上の携帯メールを送信していた。つまり、本研究の結果は、中国人留学生が携帯メールより携帯電話を多用したことを意味するものではなく、日本人学生の 7 割以上が一日に 5 通以上の携帯メールを送信したことに比べて少なかったことである。これはこれまで留学生のケータイ使用について検討した先行研究（e.g., 馬場・福田，2010）の知見と異なっているものである。

成果2：留学生のコミュニケーションメディア観と使用状況，個人的要因との関係を究明した

第3章・研究3では，関東地域の国立大学に在籍する留学生518名を対象に大規模な質問紙調査を実施し，以下の2つの仮説について検討を行った。

仮説1：留学生の滞日歴・日本語学習歴が長く，日本語能力が高く，携帯メールの入力熟練度が高ければ高いほど，より携帯メールを頻繁に使用すると予想される。

仮説2：日本語能力の高い留学生は携帯メールも多用するため，それに伴い，携帯メールと携帯電話に対するコミュニケーションメディア観が日本語能力の低い留学生と異なると考えられる。また，PCメールは使用言語に制限がないため，日本語能力の高い留学生に比べて，日本語能力の低い留学生はPCメールを多用すると予想される。即ち，PCメールや携帯メールに対するコミュニケーションメディア観も日本語能力によって異なると考えられる。

397名を対象に分析した結果，以下の3点が明らかになった。

(1) 中上級の日本語能力を有する留学生は携帯メール・携帯インターネットを多用したが，日本語能力の低い留学生はPCメール・PCインターネットを多用した。また，留学生全体はPCメールより携帯メールを多用した。

(2) 留学生全体の携帯電話・携帯メール・PCメールに対するコミュニケーションメディア観はそれぞれ，情報伝達，友情増進及び対人緊張の3側面において評価の差が見られた。具体的には，①情報伝達をするには，携帯電話＝PCメール>携帯メール，②友情増進の面では，携帯電話＝携帯メール>PCメール；③対人緊張の面では，携帯電話>携帯メール＝PCメール，であった。

中上級の日本語能力を有する留学生は情報伝達の面では携帯電話と携帯メール，友情増進の面では携帯電話の効果に対して高く評価した。一方，日本語能力の低い留学生は，情報伝達・友情増進・交際範囲という3側面において，いずれもPCメールの効果をもっと高く評価した。

(3) 留学生全体のコミュニケーションメディア観について，一部の個人的要因とともに，各コミュニケーションメディアの使用頻度が情報伝達と友情増進における評価，及び対人緊張感の低減に正の影響を及ぼした。また，交際範囲において，日本語能力の低い留学生のPCメールに対する評価がPCインターネットの使用時間とPCメールの使用頻度に影響されたことも分かった。

第3章・研究4では、留学生のコミュニケーションメディア観をメディアリテラシーに対する認識まで広げて、スマホの使用によって、留学生のメディアリテラシーに対する認識とコミュニケーションメディアの使用がいかに関係するかを究明することを目的とした。そのため、66名の留学生を対象に質問紙調査を実施し、以下の仮説について検討を行った。

仮説：ケータイに比べて、スマホでは使用言語に制限がなく、またインターネットアクセスがよりしやすいため、ケータイ使用者に比べて、スマホ使用者のほうがメディアリテラシーに対する認識が高いただろう。特に、インターネット使用に関する情報検索や閲覧に対する認識が高くなるだろう。一方、PCは随時性が劣るため、スマホよりメディアリテラシーに対する認識が低くなると予想される。

56名を対象に分析した結果、留学生のメディアリテラシーに対する認識は、情報検索・情報発信・情報閲覧の3因子で構成され、スマホ使用者は情報検索と情報閲覧に対する認識が同様に高かったが、ケータイ使用者には3因子による得点の差が見られなかった。また、情報検索に対する認識に関しては、ケータイ使用者に比べて、スマホ使用者のほうが有意に高かったことが分かった。

また、ケータイ・スマホによるインターネットの使用時間は情報検索に対する認識、PCインターネットの使用時間は情報閲覧に対する認識に正の影響を及ぼしたことが分かった。ケータイ使用者の6割以上は携帯インターネットを全く利用しないため、情報検索に対する認識に影響を及ぼしたのは主としてスマホインターネットの使用時間であった。つまり、留学生らはスマホインターネットを主に情報検索に利用し、PCインターネットは主に情報閲覧に利用していたことが、本研究の検討結果より明らかになった。

第3章（研究3と研究4）の結果をまとめると、以下の2点が明らかになった。

(1) 留学生は日本語能力によって、携帯メールとPCメールの使用が異なっており、それに伴い、2つのコミュニケーションメディアの効果に対する評価も情報伝達・友情増進・交際範囲という3側面において異なっていた。

(2) スマホインターネットは情報検索に、PCインターネットは情報閲覧に利用されていた。つまり、留学生にとってスマホは情報検索をするための重要なツールになってきている。

成果3：コミュニケーションメディア使用が異文化適応状況に及ぼす影響を明らかにした

第4章では留学生のコミュニケーションメディア使用が異文化適応状況（在日生活にお

ける適応感と満足度、一般的な日本人学生に対する好意度)を高めることができるかどうかを究明するため、第3章・研究3の調査結果をもとに、共分散構造分析を用いて、以下の2つの仮説について検討を行った。

仮説1:近年、ケータイの機能が進化し、音声通話、SMSを含めた携帯メールやインターネット使用も一般的になってきている。携帯メールや携帯インターネットの使用は、ユーザを時間的・空間的束縛から解放し、他者と随時に連絡し、即時に情報収集し、気軽に悩み相談などをすることも可能にしている。それゆえ、留学生らの様々なコミュニケーションメディア使用が、在日生活における適応感と満足度を高め、日本人学生に対する好意度を高めることができるだろう。

仮説2:留学生の滞日歴もしくは日本語学習歴が長ければ長いほど、日本語能力が上達し、日本語によるコミュニケーションも多くなると予想される。それに伴い、様々なコミュニケーションメディアを使い分けることができ、その結果異文化適応状況がよくなるだろう。

検討した結果、留学生のコミュニケーションメディア使用が全体として異文化適応状況に正の影響があった。また、PC使用よりもケータイ使用特に携帯メールの送信頻度に大きな影響が見られた。これは、ユビキタス性がより優れているケータイのほうが異文化適応状況の向上により大きく寄与したことを意味する。また、異文化適応状況のうち、一般的な日本人学生に対する好意度と在日生活における満足度との間、有意なパス係数が見られた。つまり、ケータイ使用がこの2つの側面の向上に効果があったことを意味する。一方、異文化適応状況のうち適応感との間にほとんど関係がなかった。これは、留学生らは日本文化に適応できていない、即ち、コミュニケーションメディアの使用が適応感の向上に効果がないことを意味する。つまり、満足度と好意度のみの異文化適応状況が向上したということは、ケータイ使用により日本における居心地はよくなっているが、真の異文化コミュニケーションによる適応を促進することはできない。

現在、スマホの使用が増加している。スマホには、LINEやFacebookなど、多くのメッセージングやアプリケーションがあり、ユーザはそれらを手軽に使用することができる。スマホでは入力の言語制限がなく、また、研究4の検討結果に示したように、スマホインターネットは主として情報検索に使用されていたことも含めて、留学生らは情報を収集したい時、日本語や英語で身近の日本人学生に尋ねるより、スマホを用いて母語による検索をしたほうが便利だと思われる。つまり、今後スマホの使用が増加しても、留学生と日本人学生の交友関係は促進できないのではないかと考えられる。この点においては、本研究の

結果は、益々強化されるとも予想される。

5.2 異文化コミュニケーションにおけるメディア使用の影響及びそれに基づいた提言

本節では、先に示した 3 つの成果をもとに、留学生と日本人学生の異文化コミュニケーションにおけるメディア使用の影響について、コミュニケーションメディア観との連動という観点から、①日本人学生の中国人留学生に対する印象形成、②中国人留学生の日本語使用の特徴と日本人学生の印象形成における効果、及び③留学生の異文化適応状況、の 3 側面を整理する。そのうえ、今後いかにすれば、留学生と日本人学生の異文化コミュニケーションにおけるメディア使用の負の影響を低減し、留学生の異文化適応状況を改善することができるかに関する提言を行う。

第一に、対人関係（印象形成）における影響である。第 2 章・研究 1 では日本人学生の中国人留学生に対する印象形成に関する検討結果より、携帯電話（音声）に比べて、携帯メール（テキスト）のほうがよりステレオタイプのものになった。

Epley & Kruger (2005) が明らかにしているように、英語母語話者同士においても、固定電話（音声）に比べて、PC メールのほうがよりステレオタイプの印象になりやすい側面がある。本研究が明らかにしたことと先行研究の知見を合わせて考えると、今後スマホがさらに普及しても、スマホメール（テキスト）によるコミュニケーションは、対面のような非言語的の手がかりのあるコミュニケーションメディアに比べて、よりステレオタイプに沿いやすい点は同様であると予想される。今後携帯メール・スマホメールを利用して異なる文化背景をもつ相手とコミュニケーションをする際には、互いに注意する必要があると考えられる。

また、第 1 章で述べたように、日本人は古くからテキストによるコミュニケーションを好んでいるが、研究 2 の検討結果に示したように、日本人学生に比べて、中国人留学生は携帯電話（音声）のほうを多用していた。また、研究 3 の検討結果に示したように、中上級日本語能力を有する留学生（日本語能力試験 1 級・2 級に合格した者）は日本語能力の低い留学生に比べて携帯メールと携帯インターネットを多用したが、携帯電話も使用していた。これらのことより、留学生と日本人学生の間異なるコミュニケーションスタイルが存在することが示された。馬場（2010）が指摘しているように、来日する外国人が日本に

おける生活に慣れるためには、日本式のソーシャルスキルを学ばなければならないが、同時に、外国人を受け入れる地域の日本人にとっても、外国人を受け入れるための異文化理解や新しい受入れ体制等のスキルが必要である。この意味では、メール（テキスト）によるコミュニケーションを好む日本人、とりわけ若年層の日本人学生とそうではない留学生が互いに認識する必要があると考えられる。

第二に、日本語使用における影響である。第 3 章・研究 3 に示したように、中上級日本語能力を有する留学生は携帯メールを多用した。しかし、第 2 章・研究 1 が明らかにしたように、中上級日本語能力を有する中国人留学生のケータイ使用においても、日本語の文法的誤用は助詞、普通体・丁寧体の使い分け、時制などにおいて誤用が多かった。また、全体の誤用率が 34.01% で、携帯電話に比べて、携帯メールのほうが誤用率が高かった。このような誤用は日本人学生の中国人留学生に対する印象形成に媒介効果を与えたことも分かった。

これまで、留学生を対象に、携帯メールを利用した日本語指導を行う研究がいくつか見受けられる (e.g., 山本ほか, 2005; 佐々木・水野, 2010)。本研究の結果に示したように、中上級日本語能力を有する中国人留学生にとっても、文法的誤用は助詞が最も多く、その次に自他動詞以外の動詞の誤用が多かった。また、これらは、いずれも携帯メールのほうが誤用が多かった。日本語による携帯メール（今後はスマホメール）の使用では、入力変換などの機械操作が必要なため、日本語学習者にとって認知的負荷の高い活動と言える。研究 1 の結果に示したように、中上級日本語能力を有する学習者でも、文法的誤用が生じやすかったことから、日本語能力が中上級以下の留学生が携帯メール・スマホメールを用いて、日本語によるコミュニケーションを行った際にはより注意する必要がある。第 3 章・研究 3 の結果を含めて、中上級日本語能力を有する留学生にとっても、携帯メールは文法的誤用、とりわけ助詞、自他動詞以外の動詞が起りやすいため、より多くの指導が必要であることが示唆された。

第三に、異文化適応状況における影響である。第 4 章の検討で明らかになったように、ユビキタス性がより優れているケータイのほうが留学生の異文化適応状況の向上により大きく寄与したが、適応感の向上に効果がなかった。

本研究の取り上げた異文化適応状況は、一般的な日本人学生に対する好意度以外に、専門知識の習得、日本に関する知識・理解の深まり、母語話者同士を含むいろいろな外国人の友人との付き合いなどに対する満足度を含めた。これらの面においては、日本語学習歴

が短く、日本語能力が低くても、ケータイなどを利用すれば、在日生活に必要な情報をある程度収集することができ、留学生同士の社会的ネットワークを形成し、それらを通じて留学生同士がサポートし合っていたのではないかと考えられる。その結果、日本語の壁はあったが、自分が適応できているという認識を持っていたと思われる。同時に、日本人学生と頻繁に接触せず、日本人学生によるサポートがなくても、一般的な日本人学生に対する好意度が高いまま保たれたのだと思われる。

しかし、日本語学習歴が長くなるにつれ、日本語能力が上手になれば、当然異文化適応状況がより高いレベルで、より広い範囲で求めるようになる。その場合、日本人学生との接触も多くなり、在日生活・研究等に由来するストレス、自身の健康に加え、対人ストレスとりわけ日本人との人間関係の適応、日本式のソーシャルスキルの習得などが求められるようになる(田中, 2000)。前述したように、携帯メール(今後はスマホメール)も、携帯電話もユーザの個人的ネットワークの同質性を高めるコミュニケーションメディアであることを踏まえ、本研究の検討対象となった留学生らがケータイを用いて、日本人学生と頻繁にコミュニケーションを行い、緊密な社会的ネットワークを形成することができなかつたのではないかと考えられる。留学生にとってケータイ使用は即時に情報を収集したり、気軽にコミュニティに参加したりするにはポジティブな効果はあるが、日本文化への理解や日本式のソーシャルスキルの習得など、真の異文化コミュニケーションを促進することができない点に留意する必要があると示唆された。そして、大学内では日本人の教職員や日本人学生とは、必要に応じて、対面などを含む多様なコミュニケーションがあることが示唆された。

5.3 残された課題

残された課題として、次の点が挙げられる。

まず、近年、新しいメディアの登場やそれに伴い、様々なアプリケーションが使用されつつある。例えば、LINEはメッセージのみならず、音声通話・ビデオ通話もでき、タイムラインへの投稿もできる。このような、テキストメッセージ・音声・インターネットが同時に利用できることは、留学生の対人関係にどのような影響を及ぼすのか、また、本研究の検討で得られた知見とどのような相違点があるのか、更なる検討が必要である。

また、FacebookやLINEのような、メッセージングとして個人間のコミュニケーションを

するために使用する「パーソナル」な面と、タイムライン・近況の更新、投稿、リンクのシェアなどを利用したり、コミュニティの形成・参加したりするために使用する「ソーシャル」な面の両方を同時に有するものが普及・使用されつつある。これらの使用は、留学生の対人コミュニケーションにいかに関与を及ぼすのか詳細な検討が必要である。また、それに伴い、社会的ネットワークの構成との関係、例えば、パーソナルな面では同言語話者、ソーシャルの面では異言語話者、もしくは逆パターン、ないしは混合しているのか。これらの構成は留学生らの異文化適応、日本人との異文化コミュニケーションにいかに関与を及ぼすのか、詳細な検討が必要である。

そして、異文化適応の諸側面について、田中（2000）は、留学生の異文化適応尺度が主として、①一般的適応（対人ストレス、日常生活ストレス、孤独感、心身の不適応）、②セルフ・コントロール型適応（健康・人間関係に対する対処、セルフ・コントロール型ストレス対処、研究に関する適応）、③親和型適応（対人志向性・満足度）と④「依存型適応」（日本語文化に関する適応と依存型ストレス対処）の4因子で構成された、と明らかにしている。留学生が日本という異文化に適応していく過程では、日本文化に対する理解も含まれる。これらの諸側面、そして従来の対面だけでなく、様々なコミュニケーションメディア・アプリケーションを使用することによって、留学生の異文化適応状況、日本人学生との社会的ネットワークの構築・維持する仕方がどのように変化していくか、今後、縦断調査法などを用いて、引き続き検討していきたい。

さらに、ユーザのメディアリテラシーについて検討する必要がある。第2章・研究1が明らかにしたように、日本人学生の中国人留学生に対する印象を形成する際に、携帯メールの中国人留学生の発話内容がよりステレオタイプにそった傾向があり、それは日本人学生の記憶に残った時さらに強化される側面があった。テキストメッセージを利用するにはこの様なリスクもあることから、今後、いかにすればメディア使用の負の影響を低減することができるかを検討するためには、ユーザ（日本人学生も留学生も）のメディアリテラシーを視野に入れる必要もあると考えられる。

最後に、研究対象について、第2章は中国人留学生を対象とした。それは、在日留学生の6割以上が中国人留学生であり、一般的な中国人留学生に対するステレオタイプ項目の抽出が比較的しやすかったためである。また、日本人学生とケータイを用いて日本語でコミュニケーションをするために、中上級日本語能力を有する留学生を確保する必要があったからである。一方、第3章・第4章では、中国人留学生以外の、様々な日本語能力を有

する他国籍の留学生も含めた。それは日本にいる 4 割ほどが他国籍の留学生であり、彼らのコミュニケーションメディア使用、異文化適応状況に関する検討も必要だと考えたからである。アジア系の留学生と欧米系の留学生の間に、コミュニケーションメディアの使用状況や異文化適応状況等において相違があると思われるが、在日留学生の 9 割以上を占めるアジア系留学生と 1 割未満の欧米系留学生を同様のサンプル数で取り上げることは現実として非常に困難であった。それゆえ、本研究では、研究 4 以外は文化背景に基づいた考察は行わなかった。また、本研究は主として関東地域の国立大学に在籍する留学生を対象にしたが、経済的プレッシャーや留学目的・達成度によって異文化適応状況やコミュニケーションメディアの使い方も異なる可能性があるだろう。今後は、地域差や在籍する大学の種類（国立・市立・私立）による差異も視野に入れて検討していきたい。

謝 辞

本研究を遂行し博士論文をまとめるにあたり、多くの方々のご指導、ご支援を頂きましたことを深く感謝いたします。ここにて紙面をお借りして謝辞を述べたいと思います。

指導教員である室田真男教授には、研究の進め方、論文のまとめ方など懇切丁寧にご指導して頂きました。深く感謝の念を申し上げます。室田先生には常に自分の興味・関心のある研究内容を徹底的に優先させて頂き、そして全力で支えて頂きました。博士課程を半年短縮することができたのは室田先生のおかげです。心より感謝いたします。

また、お忙しい中、本学位論文をご審査くださいました本学大学院社会理工学研究科人間行動システム専攻の中川正宣教授、前川眞一教授、中山 実教授、及び留学生センターの武井直紀教授に感謝の意を表します。論文審査員の先生方には、多数の有益なご指摘と貴重なコメントを頂きました。深く御礼申し上げます。また、予備審査の際、大変貴重なご意見を下さった西原明法教授や松田稔樹准教授にもどうもありがとうございました。

そして、大変ご多忙の中、博士論文全体の構成などについて何度もご相談頂き、励ましを頂きました本学名誉教授・監事の清水康敬教授に、心より感謝の意を申し上げます。

私の前職である本学国際部留学生交流課青木 彰課長（現学生支援課長）をはじめ、在職中にも関わらず学ぶ機会を与えて下さいましたこと、どうもありがとうございました。職場の皆様にも色々ご協力頂きました。ありがとうございました。

私が研究者の道を志したのは、学部生であった2003年4月に静岡大学（当時）の堀田龍也准教授（現東北大学教授・日本教育工学協会会長）と富山大学の高橋純講師（現准教授）に出会ってからのことでした。お2人の先生には、素晴らしい研究者の見本として、色々教えて頂きました。その後、ICT教育の最先端である富山大学の山西潤一教授（現日本教育工学協会会長）の研究室に在籍し、教育工学のみならず、メディアリテラシーや、メディアと心理学の関係などについて、多様な視点から学ぶ機会を頂きました。心理学の視点からメディアと対人認知の研究に興味・関心を持ち、それに携わろうとした私に、諸先生方より「自分の興味ある研究テーマで良い」と励まし、そして様々な面からご応援頂きました。特に、専門分野を社会心理学に変更し、博士前期課程からやり直すことを決意した私に、堀田先生は私の必要な書籍をご購入、研究室までお送り下さいました。博士前期課程1年生の際、堀田先生のお勤めになるメディア教育開発センターの特別共同利用研究員としてお引き受けくださり、学ぶ機会を与えて下さいました。長年、堀田先生には多くの面で

ご応援頂いていること、心より感謝申し上げます。また、いつもご相談に乗って頂き、適切なコメントや意見を頂いた高橋先生にも心より感謝致します。諸先生方の長年の応援のおかげで、ようやく学位論文の完成までたどり着きました。ありがとうございました。

私の学位論文は、多くの方々にご指導・ご協力頂くことによって進めてきました。

第2章のデータはほとんどお茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士前期課程に在籍した際に収集したものであり、当時の指導教員である坂元 章教授に大変ご丁寧にご指導頂きました。論文執筆の仕方や統計知識の習得など、色々とお教え頂きました。厚く御礼を申し上げます。また、実験やデータ収集に協力くださった祥雲暁代さん・相田麻里さんにもお世話になりました。ありがとうございました。

研究2の留学生に係わるデータ、及び第3・4章のデータは埼玉大学に勤務した際に実施した調査であり、当時の国際交流支援室高尾敏史室長（現国立科学博物館連携協力課長）に全力でサポートして頂きました。また、同学国際交流センター長・安藤 陽教授、留学生相談室の中本進一教授にも大変お世話になりました。誠にありがとうございました。

そして、本博士論文の実験と調査にご協力頂きました、お茶の水女子大学・東京大学・埼玉大学・東京学芸大学・東京女子大学に在籍していた留学生・日本人学生の皆様には、深く感謝いたします。とりわけ、第2章の実験に係わる予備調査にご協力頂きました、放送大学の森 津太子准教授、東京大学の山内祐平教授、坂本篤郎さん（現株式会社ベネッセコーポレーション）、徳島文理大学の林 向達准教授、及び東北大学の堀田龍也教授に、深く感謝いたします。

研究生時代・博士前期課程に際して、松岡温彦理事長をはじめとする国際人材交流支援協力機構（IPEX）、及び中村維夫理事長をはじめとする NPO 法人モバイルコミュニケーション・ファンドより奨学金を頂きました。皆様のおかげで、研究に専念することができ、成果をあげることができました。心より感謝いたします。

さらに、室田研の皆様にも、たいへんお世話になりました。研究を進めるにあたり、ご支援・ご協力を頂きながら、ここにお名前を記すことができなかつた多くの方々にも心より感謝申し上げます。

最後に、これまで自分の思う道を進むことに対して、温かく見守りそして辛抱強くサポートしてくれた親や姉、本学位論文の執筆から提出まで、ずっと応援してくれた川中宣太さん、多くの友人の皆様に対しても深い感謝の意を表して謝辞と致します。

本論文に関する研究発表

【査読論文】

- (1) **Shaoyu Ye**, Akira Sakamoto, Akiyo Shoun & Mari Aita. (2011). Japanese students' impressions formed of Chinese students through cell phone communication: Comparing text and voice messages. *Progress in Asian Social Psychology: Identity, Multiculturalism and Changing Societies: Psychological, Group and Cultural Processes*, 8, Pp43-57. (第2章)
- (2) Shaoyu Ye (2011). Chinese learners' Japanese verbal behavior styles when using cell phones: Comparing text and voice text messages. *International Journal for Educational Media and Technology*, 5(1), Pp39-49. (第2章)
- (3) 叶少瑜 (2012) 「留学生のコミュニケーションメディア観及びそれに影響を及ぼす諸要因」『日本教育工学会論文誌』36巻1号, Pp59-68. (第3章)
- (4) **叶少瑜**・室田真男 (2014) 「留学生のコミュニケーションメディア使用が異文化適応状況に及ぼす影響—ケータイとPCを中心に—」『社会情報学』3巻1号, Pp1-15. (第4章)

【査読付き国際会議】

I フルペーパー採択

- (1) **Shaoyu Ye** & Masao Murota (2014). International students' perception of media literacy in Japan: Focusing on cell phones and smartphones. *Proceedings of World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia and Telecommunications, Vol. 2014, No. 1*. Pp.666-675. (第3章)

II アブストラクト採択

- (1) **Shaoyu Ye**, Akiyo Shoun, Mari Aita & Akira Sakamoto (2009). Impression formation of Chinese students through cell phone communication: Comparing text and voice messages. *The 8th Biennial Conference of the Asian Association of Social Psychology, India*. P303. (第2章)
- (2) **Shaoyu Ye** (2010). Chinese learners' Japanese language verbal behavior style when using cell phones: Comparing text and voice messages. *8th International Conference for Media in*

Education 2010 (ICoME), Kumamoto University, Japan. Pp249-256. (第2章)

- (3) **Shaoyu Ye** (2012). The relationship between international students' media usages and their cultural competency in Japan. *10th International Conference for Media in Education 2012 (ICoME)*, Beijing Normal University, China. P14. (第4章)

【一般口頭発表】

- (1) **Shaoyu Ye**, Akiyo Shoun, Mari Aita & Akira Sakamoto (2009). Impression formation of Chinese students through cell phone communication: Comparing text and voice messages. 日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会合同大会(大阪大学)発表論文集 Pp86-87. (第2章)
- (2) **叶少瑜**・祥雲暁代・相田麻里・坂元章(2009)「ケータイを利用した際の日本語学習者の誤用：メールと電話の比較」日本教育工学会第25回全国大会(東京大学)講演論文集, Pp569-570. (第2章)
- (3) **叶少瑜**(2011)「在日外国人留学生のPCとケータイの使用について」日本教育工学会第27回全国大会(首都大学東京)論文集, Pp747-748. (第3章)
- (4) **叶少瑜**・室田真男(2013)「留学生のコミュニケーションメディア使用とメディアリテラシーに対する意識について」日本教育工学会第29回全国大会(秋田大学)講演論文集, Pp329-330. (第3章)
- (5) **Shaoyu Ye & Masao Murota** (2013). Japanese students and Chinese students' cell phone usage. 日本教育工学会第29回全国大会(秋田大学)講演論文集, Pp1033-1034. (第2章)
- (6) **叶少瑜**・室田真男(2015)「留学生のメディアリテラシーに対する認識に影響を及ぼす諸要因—ケータイとスマホを中心に—」日本計画行政学会・社会情報学会共催第9回若手研究交流会(東京工業大学)提出済み(第3章)

本論文以外の研究業績

【査読論文】

- (1) **Shaoyu Ye**, Kyoko Uru, Rui Akasaka & Akira Sakamoto (2009). Characteristics of mobile phone e-learning systems in Japan. *International Journal for Educational Media and Technology*, 3(1), Pp. 68-80.

【査読付き国際会議】（アブストラクト採択）

- (1) **Shaoyu Ye** & Masao Murota (2013). Relationship between international students' information-gathering capacity and behavior patterns after the Great East Japan Earthquake. *11th International Conference for Media in Education 2013 (ICoME)*, Nihon Fukushi University, Japan. P52.
- (2) **Shaoyu Ye**, Kyoko Uryu, Rui Akasaka & Akira Sakamoto (2008). Evaluation of e-learning content and systems in mobile phones. *6th International Conference for Media in Education 2008 (ICoME)*, Kansai University Takatsuki Campus, Osaka, Japan. Pp.282-289.

【一般口頭発表】

- (1) **叶少瑜**・室田真男（2014）「日中学生の相互好意度と社会的ネットワークの関係について」日本教育工学会第30回全国大会（岐阜大学）講演論文集，Pp.125-126.
- (2) Shaoyu Ye (2011). How international students in Japan reacted to the 2011 Tohoku Earthquake and Tsunami? 日本教育工学会第27回全国大会（首都大学東京）講演論文集，Pp.949-950.
- (3) 叶少瑜（2010）「マスメディアが日本語学習者の『話し言葉の男女差』に対するジェンダー意識に及ぼす影響」日本教育メディア学会第17回全国大会（熊本大学）発表論文集，Pp.111-112.
- (4) 叶少瑜（2005）「複合終助詞ヨネ，ヨナと個々の終助詞ヨ，ネ，ナの相関関係—『フォーマル度』の相違から—」現代日本語研究会 ワークショップ

【編著書】

- (1) 吳大綱編（2005）『日語筆訳実務 2 級 全国翻訳専門資格水準試験指定教材』中国外文出版社 所収のうち，第十三，四，五章の執筆担当

【翻訳】

- (1) 叶少瑜（2013）《領導的法則》，中国南海出版社（松下幸之助著『指導者の条件』（2006），HP 研究所出版社, 207p.

学・協会への貢献

1. 2007年6月19～20日 第二回日中教育工学会研究推進フォーラム於大阪 資料翻訳・大会通訳 日本教育工学会ニューズレターNo. 153 に記載されている。
参考 URL : <http://www.jset.gr.jp/letter/pdf/JSET153.pdf>
2. 2008年4～11月 日本パーソナリティ心理学会第17回全国大会(2008) 事務委員
参考 URL : <http://jspp.gr.jp/doc/cong17/greet/index.html>
3. 2011年9月17～19日 日本教育工学会第25回全国大会(2011) International Session (1) Chairperson 担当。
参考 URL : http://www.jset.gr.jp/taikai27/program/program_session.php?tp=E
4. EdMedia 2014 – World Conference on Educational Media and Technology, Presider for Concurrent Sessions (10:00-11:00 AM, & 5:15-6:15 PM)
参考 URL : <https://academicexperts.org/conf/edmedia/2014/planner/>
5. 2014年9月19～21日 日本教育工学会第30回全国大会(2014) 一般研究発表1(語学教育・国際理解) 座長担当
参考 URL : http://www.jset.gr.jp/taikai30/program/program_session.php?tp=1a
6. 2015年3月7日 日本計画行政学会・社会情報学会共催 第9回「若手研究交流会」
実行委員

参考文献

- 安藤玲子・坂元章・鈴木佳苗・森津太子（2003）「コミュニケーション・メディアと孤独感・対人不安」日本心理学会第 67 回大会発表論文集, p.207.
- 安藤玲子・高比良美詠子・坂元章（2005）「インターネット使用が中学生の孤独感・ソーシャルサポートに与える影響」, 『パーソナリティ研究』 14(1), pp.69-79.
- 甘佐京子・藤田きみゑ・牧野耕次・比嘉勇人（2004）「女子学生の携帯電話によるメール中毒状況とその心理的特徴（第 2 報）」『人間看護学研究』 3, 43-49.
- 荒川歩・鈴木直人（2004）「謝罪文に付与された顔文字が受け手の感情に与える感情」『対人社会心理学研究』 4, 128-133.
- 足立由美・高田茂樹・雄山真弓・松本和雄（2003）「携帯電話コミュニケーションから見た対学生の対人関係」『教育学科研究年報』 関西学院大学 29, 7-14.
- 馬場眞知子（2010）「日本の多文化共生社会にむけての ICT の現状と課題—日本に在住する外国人留学生の ICT 利用を中心に—」電気通信大学平成 22 年度博士論文 【参照日:2014 年 7 月 24 日】 http://ir.lib.uec.ac.jp/infolib/user_contents/9000000528/9000000528.pdf
- 馬場眞知子・福田豊（2010）「外国人留学生の ICT 利用とコミュニケーション—多文化共生と ICT の課題—」『情報社会学会誌』 4(2) : 15-30.
- Berry, J. W. (1990). Psychology of acculturation. In R. W. British (Ed.), Applied Cross-cultural Psychology. Newbury Park, California: Sage. 232-253.
- Chan, M. (2011). Shyness, sociability, and the role of media synchronicity in the use of computer-mediated communication for interpersonal communication. *Asian Journal of Social Psychology*, 14: 84-90.
- Connell, J. B., Mendelsohn, G. A. & Canny, J. (2011). Effects of communication medium on interpersonal perceptions: Don't hang Up on the telephone Yet! *GROUP '01 Proceeding of the 2001 International ACM SIGGROUP Conference on Supporting Group Work* : 117-126
- 大坊郁夫（1993）「親密さの心理学とコミュニケーションの機能」『電子情報通信学会技術研究報告. HC, ヒューマンコミュニケーション』 93(346), 33-40.
- 江淵一公（1994）『異文化間教育学序説』九州大学出版部
- Epley, E. & Kruger, J. (2005). When what you type isn't what they read: The perseverance of stereotypes and expectancies over e-mail. *Journal of Experimental Social Psychology*, 41,

414-422.

- 藤川大祐 (2012) 「親子で考えるネットの上手の利用法」『国民生活・ウェブ版：消費者問題をやむ・しる・かんがえる』(1): 1-4
- 深田博巳 (2007) 『インターパーソナルコミュニケーション』北大路書房
- 古谷嘉一郎・坂田桐子 (2006) 「対面、携帯電話、携帯メールでのコミュニケーションが友人との関係維持に及ぼす効果—コミュニケーションのメディアと内容の適合性に注目して—」『社会心理学研究』22, 72-84.
- 古谷嘉一郎・坂田桐子・高口央 (2005) 「友人関係における親密度と対面・携帯メールの自己開示との関連」『対人社会心理学研究』5, 21-29.
- 葛文綺 (1999) 「留学生の異文化適応に関する研究—来日目的, 滞日イメージと適応度との関連を中心に—」『名古屋大学教育学部紀要』心理学, 46, 287-297.
- 原田悦子 (1993a) 「パソコン通信の心理学—認知の人工物としてのネットワーク」『日本語学』12(13), 75-83.
- 原田悦子 (1993b) 「受話器の心理学的効果—インタフェースとしての受話器」『現代のエスプリ』306, 75-83.
- 原田悦子 (1997) 「認知科学モノグラフ7：人の視点から見た人工物研究」共立出版
- 原田知沙 (2003) 「メールと人間関係」徳田克己編著『ヒューマンサービスに関わる人のための人間関係学』第13章 文化書房博文社, 248-260.
- Harasty, A.S. (1997). The interpersonal nature of social stereotypes: Differential discussion patterns about in-groups and out-groups. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 270-284.
- 原谷達夫・松山安雄・南寛 (1960) 「民族的ステレオタイプと好悪感情についての—考察」『教育心理学研究』第8巻, 1-7.
- Harbaugh, E. R. (2010). The effect of personality styles (Level of introversion-Extroversion) on social media use. *The Elon Journal of Undergraduate Research in Communications*, 1 (2): 70-86.
- Hargittai, E. (2008) Whose Space? Differences Among Users and Non-Users of Social Network Sites. *Journal of Computer-Mediated Communication*, 13: 276-297.
- 橋元良明 (2001) 「携帯メールの利用実態と使われ方—インターネットによるEメール利用との比較を中心に—」『日本語学』20 (10) , 23-31.
- Hays, W.L. (1994). *Statistics*. Wadsworth Publishing Company Press.

- 洞澤伸 (2005) 「若者たちのコミュニケーション空間の重層性—対面コミュニケーションと携帯メール—」『岐阜大学地域科学部研究報告』17号, 1-20.
- 五十嵐紀子・糸井江美 (2004) 「大学生の携帯メール絵文字使用によるメッセージ—その表現と解釈—」『九州コミュニケーション研究』2, 1-11.
- Igarashi, T., Takai, J. & Yoshida, T. (2010). Gender differences in social network development via mobile phone text messages: A longitudinal study, *Journal of Social and Personal Relationships* 22(5), pp. 691-713.
- 池田謙一 (1990) 「ニューメディアの利用と満足」竹内郁郎・児島和人・川本勝 (編) 『ニューメディアと社会生活』東京大学出版会 141-165.
- 井上奈良彦・アナ・クリスティナ・メリノ (2007) 「日本の国費留学生の異文化的適応—九州大学における複数の事例調査—」『九州コミュニケーション研究』5, 61-74.
- 石井敏・久米昭元・遠山淳編著 (2003) 『異文化コミュニケーションの理論：新しいパラダイムを求めて』有斐閣ブックス
- 石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔編 (1997) 『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣選書
- 地引泰人・北村智・秋山大志・堀田龍也 (2006) 「携帯電話の通話及び携帯メールの社会ネットワークの比較分析(2)—ネットワークの構成員(個人)に着目した分析—」日本社会情報学会 (JSIS) 第11回研究大会研究報告要旨集 (学習院大学), 95-96.
- 笠木理史・大坊郁夫 (2003) 「CMC と対面場面におけるコミュニケーション特徴に関する研究」『対人社会心理学研究』, 93-101.
- 加藤由樹・加藤尚吾・赤堀侃司 (2006a) 「携帯メールコミュニケーションの感情面に関する分析—教師あるいは友人がやりとりの相手の場合の検討—」『教育情報研究』21 (3), 3-12.
- 加藤由樹・加藤尚吾・赤堀侃司 (2006b) 「携帯メールを使用したコミュニケーションにおける怒りの感情の喚起に関する調査」『教育情報研究』22 (2), 35-43.
- Kato, S., Kato, Y., Scott, D. J., & Akahori, K. (2008). Analysis of anger in mobile phone email communication in Japan. *Waseda journal of Human Sciences*, 21 (1), 29-39.
- 河井大介 (2014) 「ソーシャルメディア・パラドクス—ソーシャルメディア利用は友人関係を抑制し精神的健康を悪化させるか」『社会情報学』3(1), 31-46.
- 川浦康至・山田紀代美・西田公昭 (2004) 「セルフサポートコミュニティにおけるコミュニケーション過程—在宅介護者のメーリングリスト実験—」『電子情報通信学会技術研究報

- 告』104 (198), 27-32.
- 木村泰之・都築誉史 (1998) 「集団意思決定とコミュニケーション・モード: コンピュータ・コミュニケーション条件と対面コミュニケーション条件の差異に関する実験社会心理学的検討」『実験社会心理学研究』38, 183-192.
- 北村智 (2005) 「対面および携帯メールの社会的ネットワークと孤独感—社交性と社会的ネットワークの交互作用を中心に—」『社会情報学研究』10 (1), 1-13.
- 北村智 (2006) 「要求の伝達における対人コミュニケーション手段の選択—丁寧さの観点からの分析—」『社会情報学研究』, 11(1), 49-61.
- 北村智・地引泰人・秋山大志・堀田龍也 (2006) 「携帯電話の通話及び携帯メールの社会ネットワークの比較分析(1)—ネットワーク構造の特徴に関する分析—」日本社会情報学会 (JSIS) 第11回研究大会研究報告要旨集, 93-94: 学習院大学
- 木村雅則 (2002) 「媒体に依存する表現—携帯メールの場合—」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』10, 35-48.
- 金相美 (2003) 「携帯電話利用とソーシャル・ネットワークとの関係: 在日留学生対象の調査結果を中心に」『東京大学社会情報研究所紀要』65, 363-394
- 金暲和 (2012) 「モバイル社会の多様性——韓国, フィンランド, ケニア」岡田朋之・松田美佐編『ケータイ社会論』, 199-224
- Klopf, D.W. (1998). *Intercultural Encounters: The Fundamentals of Intercultural Communication* (4th ed.). Englewood, CO: Morton.
- Klopf, D. W. & Park, M.S. (1982). *Cross-Cultural Communication: An Introduction to the Fundamentals*. Seoul, Korea; Han Shin Publishers.
- 小林哲郎・池田謙一 (2007) 「若年層の社会化過程における携帯メール利用の効果: パーソナル・ネットワークの同質性・異質性と寛容性に注目して」『社会心理学研究』23 (1), 82-94.
- 小林哲郎・池田謙一 (2008) 「PCによるメール利用が社会的寛容性に及ぼす効果: 異質な他者とのコミュニケーションの媒介効果に注目して」『社会心理学研究』24 (2), 120-130.
- 児玉真樹子・三根拓己・高本雪子・深田博巳 (2004) 「自己開示に及ぼす親密さとコミュニケーションメディアの影響」『広島大学心理学研究』4, 77-87.
- 小寺敦之 (2011) 「対人関係の親疎とコミュニケーションメディアの選択に関する研究」『情報通信学会誌』29(3), 13-23.
- 久保田健市 (2004) 「ステレオタイプと集団認知」大島尚・北村英哉編著『認知の社会心理

- 学』第6章, 北樹出版, 88-107.
- 黒角健太・深田博己 (2005) 「携帯電話・携帯メールコミュニケーションに及ぼす性と性役割の影響」『広島大学心理学研究』5, 69-92.
- 松田美佐 (2001) 「大学生の携帯電話・電子メール利用状況 2001」『情報研究』26, 167-179.
- 松田幸弘 (2005) 携帯電話と携帯メールの利用に影響する諸要因の分析. 大阪経大論集, 56(2) : 97-107.
- 松下慶太 (2012) 「若者とケータイ・メール文化」岡田朋之・松田美佐編『ケータイ社会論』有斐閣選書, 61-81.
- 水田直美・土井佳彦・山本健治 (2004) 「携帯メールにみられる日本語学習者の敬意表現の誤用」『倉敷芸術科学大学紀要』9, 237-247.
- 宮田加久子 (1993) 『電子メディア社会—新しいコミュニケーション環境の社会心理』誠信書房
- 三宅和子 (2000) 「ケータイと言語行動・非言語行動」『日本語学』19 (12), 6-17.
- 三宅和子 (2001) 「ポケベルからケータイ・メールへ—歴史的変遷とその必然性—」『日本語学』20 (10), 6-21.
- 村上知栄子・塩見式子 (2006) 「上級学習者の口頭伝達能力に関する一考察—ストーリーテリングにおける日本語母語話者の比較—」『山口幸二先生退職記念集』291-330.
- 中井陽子・大場美和子・土井真美 (2004) 「談話レベルでの会話教育における指導項目の提案—談話・会話分析的アプローチの観点から見た談話技能の項目—」『世界の日本語教育』14号, 75-91.
- 中丸茂 (2002) 「顔文字が文章の信頼度に及ぼす影響」『駒沢社会学研究』34, 91-114.
- 中村功 (2001a) 「携帯メールの人間関係」『日本人の情報行動 2000』東京大学社会情報研究所, 285-303.
- 中村功 (2001b) 「携帯電話の普及過程と社会的背景」川浦康至・松田美佐編集『現代のエスプリ 携帯電話と社会生活』至文堂 46-57.
- 中村功 (1997) 「携帯電話と 119 番通報」『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』9, 87-103.
- 日本学生支援機構 (2014) 「平成 25 年度外国人留学生在籍状況調査結果」【参照日 : 2014 年 6 月 16 日】 http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data13.pdf
- 日本学生支援機構 (2007) 「平成 19 年度外国人留学生在籍状況調査結果」【参照日 : 2014 年 6 月 16 日】 http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data07.pdf

- ニュースリリース (2011) 「日経 BP コンサルティング調べ スマートフォンの国内普及率は 9.5%, 20 歳代が市場を牽引—『携帯電話・スマートフォン“個人利用”実態調査 2011』を発行—」【参照日: 2014 年 8 月 10 日】
- <http://consult.nikkeibp.co.jp/consult/news/2011/0801mobile/>
- 岡直樹 (2008) 「第 4 章 質的データの検定法」森敏昭・吉田寿夫編著『心理学のためのデータ解析テクニカルブック』北大路書房 pp.177-203.
- 岡益巳・福田博己・周玉慧 (1996) 「中国人私費留学生の留学目的及び適応」, 『岡山大学経済学会雑誌』 27(4), pp.25-49.
- 岡本香・江川朋幸 (2003) 「携帯メディアコミュニケーションと大学生の友人関係態度との関連」『日本教育工学会論文誌』 27 (Suppl.), 137-140.
- 岡本香・高橋超 (2006) 「親密度の違いおよびコミュニケーション形態の違いがメディア・コミュニケーション観に及ぼす影響」『実験社会心理学研究』 45(2), 85-97.
- 尾上恵子 (2007) 「女子学生の間関係行為における諸要因について」『一宮女子短期大学紀要』 46 集, 15-22.
- 太田一郎 (2001) 「パソコン・メールとケータイ・メール—「メールの型」からの分析」『日本語学』 20 (10) , 44-53.
- 大津友美 (2014) 「留学生から非好意的に評価された日本人学生の会話行動—非好意的評価に至るまでの相互行為の記述—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 40, 125-136.
- 大津友美 (2013) 「留学生は日本人学生に会話行動をどう評価するか—中国人留学生と日本人学生の初対面会話の場合—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 39, 17-29.
- ライアン優子 (2014) 「博士課程における外国人留学生の受け入れに関する調査」『静岡大学国際交流センター紀要』 8, 81-102,
- Rich, A.L. & Ogawa, D.M. (1972). Intercultural and interracial communication: An analytical approach. *Intercultural Communication: A Reader*, 23-31.
- 斉藤裕成・野村竜也 (2012) 「SNS の使用状況と性格特性との間の関係」『研究報告ヒューマンコンピュータインタラクション (HCI)』 146(14), 1-5.
- 佐々木真理・石川久美子 (2006) 「パソコンメールと携帯メールで作成されたレポートの文章の比較」『京都教育大学紀要』 109 号, 99-110.

- 佐々木整・水野一徳（2010）「留学生を対象とした学習支援の取り組み」『電子情報通信学会技術研究報告』ET, 110(147), 33-36.
- Simic-Yamashita, M. & Tanaka, T. (2010). Exploratory Factor Analysis of the Sociocultural Adaptation Scale (SCAS) among International Students in Japan, *Journal of Humanities and Social Sciences* 29, 206-195.
- Smilowitz, M., Compton, D.C., & Flint, L. (1988). The effects of computer mediated communication on an individual's judgment: A study based on the methods of Asch's social influence experiment. *Computers in Human Behavior*, 4, 311-321.
- 総務省（2013）「平成 24 年通信利用動向調査ポイント」【参照日：2014 年 8 月 9 日】
http://www.soumu.go.jp/main_content/000230980.pdf
- 菅さやか・唐沢穰（2006）「人物の属性表現にみられる社会的ステレオタイプの影響」『社会心理学研究』22, 180-188.
- 隅田真理子・島谷まき子（2008）「思春期女子グループの友人関係と携帯メール使用—グループの友人への欲求および対面の友人関係との関連から—」『昭和女子大学生活心理研究処紀要』11, 37-48.
- 孫怡（2013）「在日中国人留学生の異文化適応に関する研究：パーソナリティ特性の視点から」お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科平成 25 年度博士学位論文 【参照日：2014 年 8 月 24 日】 <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/54608>
- 鈴木健（2013）レトリック理論 石井敏・久米昭元ら編集『異文化コミュニケーション』春風社, p.19.
- 高井次郎（1989）「在日外国人留学生の適応研究の総括」『名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科』36, 139-147.
- 高橋佳子・深田博巳・秋光恵子（2005）「携帯メールにおける送り手の顔文字付与が受け手の不安に及ぼす影響」『広島大学心理学研究』5, 93-107.
- 譚紅艶・渡邊勉・今野裕之（2011）「在日外国人留学生の異文化適応に関する心理学的研究の展望」『目白大学心理学研究』7, 95-114.
- 田中共子（2000）『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版.
- 湯玉梅（2004）「在日中国人留学生の異文化適応過程に関する研究—対人行動上の困難の観点から—」10, 293-328.

- 辻大介 (2006) 「つながりの不安と携帯メール」『社会学部紀要』関西大学 37 (2), 43-52.
- 都築誉志・木村泰之 (2000) 「大学生におけるメディア・コミュニケーションの心理的特性に関する分析—対面, 携帯電話, 携帯メール, 電子メール条件の比較—」『応用社会学研究』42, 15-24.
- 山岸みどり (1995) 「異文化間能力とその育成」渡辺文夫 (編) 『異文化接触の心理学とその現状と理論』川島書店
- 山本健治・水田直美・土井佳彦 (2005) 「携帯メールを利用した留学生に対する日本語指導の実践報告—日本語能力試験 1~2 級合格者に対する表現力指導の効果について」『倉敷芸術科学大学紀要』10, 211-220.
- 吉澤孝雄 (2006) 「電子メール・携帯電話の利用形態と社会的スキルに関する萌芽的研究」『情報コミュニケーション学会誌』2 (1), 16-21.
- Zhang, Q. (2007). Effect of culture, medium, and task on trust perception. 【参照日 : 2014 年 6 月 27 日】 <http://www.cs.cmu.edu/~sfussell/CHI2007/ZhangAbstract.pdf>
- Walther, J.B. (1996). Computer-mediated communication: Impersonal, interpersonal, and hyperpersonal interaction. *Communication Research*, 23(1), 3-43.

1. 中国人留学生のイメージに、最も当てはまると思われるものに○をつけてください。

	全く そう 思わない	ほとん どそう 思わない	あまり 思わない	ど ちら でも ない	やや そう 思う	かなり そう 思う	非 常に そう 思う
(1) 頭が良い。	1	2	3	4	5	6	7
(2) 英語が上手だ。	1	2	3	4	5	6	7
(3) 雄弁だ。	1	2	3	4	5	6	7
(4) 物知りだ。	1	2	3	4	5	6	7
.....							
(5) 頭の回転が速い。	1	2	3	4	5	6	7
(6) 機敏だ。	1	2	3	4	5	6	7
(7) 創造性がある。	1	2	3	4	5	6	7
(8) 授業や研究に真面目だ。	1	2	3	4	5	6	7
.....							
(9) 勤勉だ。	1	2	3	4	5	6	7
(10) 実践的だ。	1	2	3	4	5	6	7
(11) がめつい。	1	2	3	4	5	6	7
(12) 競争的だ。	1	2	3	4	5	6	7
.....							
(13) 情熱的だ。	1	2	3	4	5	6	7
(14) 堅実だ。	1	2	3	4	5	6	7
(15) 節約上手だ。	1	2	3	4	5	6	7
(16) 商売上手だ。	1	2	3	4	5	6	7
.....							
(17) 抜け目ない。	1	2	3	4	5	6	7
(18) 仕事に積極的だ。	1	2	3	4	5	6	7
(19) 親切だ。	1	2	3	4	5	6	7
(20) 自己主張が強い。	1	2	3	4	5	6	7

付録 1

	全くそう 思わない	ほとんど そう思わ ない	あまり 思わな い	どちら でもな い	やや そう 思う	かなり そう 思う	非常 にそう 思う
(21) 自画自賛をする。	1	2	3	4	5	6	7
(22) 自信過剰だ。	1	2	3	4	5	6	7
(23) 外向的だ。	1	2	3	4	5	6	7
(24) 独断的だ。	1	2	3	4	5	6	7
.....							
(25) 社交的だ。	1	2	3	4	5	6	7
(26) 人付き合いがうまい。	1	2	3	4	5	6	7
(27) ユーモアがある。	1	2	3	4	5	6	7
(28) 野心的だ。	1	2	3	4	5	6	7
.....							
(29) 疑い深い。	1	2	3	4	5	6	7
(30) 親族の絆が強い。	1	2	3	4	5	6	7
(31) 家族思いだ。	1	2	3	4	5	6	7
(32) マナーを守らない。	1	2	3	4	5	6	7
.....							
(33) 騒がしい。	1	2	3	4	5	6	7
(34) 勝手に人のものを使ってしまう。	1	2	3	4	5	6	7
(35) ズルをする。	1	2	3	4	5	6	7
(36) ウソをつく。	1	2	3	4	5	6	7
.....							
(37) 犯罪に走りやすい。	1	2	3	4	5	6	7
(38) 欲深い。	1	2	3	4	5	6	7

付録 1

	全く そう 思わ ない	ほと んど そう 思わ ない	あま り思 わな い	どち らど もな い	やや そう 思 う	かな りそ う思 う	非常 にそ う思 う
(39) 信頼できない。	1	2	3	4	5	6	7
(40) 利己主義だ。	1	2	3	4	5	6	7
(41) 乱暴だ。	1	2	3	4	5	6	7

2. あなたの性別に当てはまるものに○をつけてください。

(男性 ・ 女性)

3. 最後に、以下に当てはまるものに○をつけてください。

(日本人学生 ・ 中国人留学生 ・ それ以外)

資料 1 : まず, ご自分の情報を記入してください。

性別 : _____ 年齢 : 満 _____ 才 _____ ヲ月 _____

出身地 (都道府県名) : _____ 専攻 : _____

(1) あなたは, 普段, 一日どのぐらい携帯電話を使っているかを伺います。

a). 携帯によるメール量 (_____)

- ⑦50 通以上 ⑥40-50 通 ⑤30-40 通 ④20-30 通
③10-20 通 ②5-10 通 ①それ以下

b). 携帯による通話量 (_____) ⑦10 回以上 ⑥5-10 回 ⑤3-5 回

- ④2 回程度 ③1 回程度 ②2~3 日に一回程度 ①それ以下

c). 携帯でのインターネットへのアクセス時間 (_____)

- ⑦2 時間以上 ⑥1 時間 20 分-2 時間未満 ⑤1 時間-1 時間 20 分未満
④40 分-1 時間未満 ③20 分-40 分未満 ②0 分-20 分未満 ①全くしない

(2) あなたは, 携帯メールを早く打つことに慣れていると思いますか。(_____)

- ⑦非常にそう思う ⑥かなりそう思う ⑤ややそう思う ④どちらとも言えない
③あまり思わない ②ほとんどそう思わない ①全くそう思わない

(3) あなたは, 携帯メールの入力が上手だと思いますか。(_____)

- ⑦非常にそう思う ⑥かなりそう思う ⑤ややそう思う ④どちらとも言えない
③あまり思わない ②ほとんどそう思わない ①全くそう思わない

(4) あなたは, 中国人留学生の友達がどれほどいますか。(_____)

- ⑦25 人以上 ⑥20-25 人 ⑤15-20 人 ④10-15 人 ③5-10 人
②5 人以下 ①いない

(5) あなたは, 一般的な中国人留学生を, どれくらい好きですか。(_____)

- ⑦非常に好きだ ⑥かなり好きだ ⑤やや好きだ ④どちらとも言えない
③あまり好きではない ②ほとんど好きではない ①全く好きではない

(6) あなたは, 一般的な中国人留学生と一緒に勉強したり, 仕事をしたりしたいと思いますか。(_____)

- ⑦非常にそう思う ⑥かなりそう思う ⑤ややそう思う ④どちらとも言えない
③あまり思わない ②ほとんどそう思わない ①全くそう思わない

(次のページに続く 1/2)

(7) 中国人留学生について当てはまると思われるものに○をつけてください。

	全く そう 思わない	ほとん どそう 思わない	あまり 思わ ない	ど ちら でも ない	やや そう 思う	かなり そう 思う	非 常に そう 思う
① 雄弁だ。	1	2	3	4	5	6	7
② 情熱的だ。	1	2	3	4	5	6	7
③ 頭が良い。	1	2	3	4	5	6	7
④ 野心的だ。	1	2	3	4	5	6	7
.....							
⑤ 仕事に積極的だ。	1	2	3	4	5	6	7
⑥ 英語が上手だ。	1	2	3	4	5	6	7
⑦ 競争的だ。	1	2	3	4	5	6	7
⑧ 家族思いだ。	1	2	3	4	5	6	7
.....							
⑨ 親族の絆が強い。	1	2	3	4	5	6	7
⑩ 自己主張が強い。	1	2	3	4	5	6	7
⑪ 勤勉だ。	1	2	3	4	5	6	7
⑫ 授業や研究に真面目だ。	1	2	3	4	5	6	7
.....							

資料 2、ご自分の情報について記入して下さい

性別：_____ 年齢：満 才 カ月

出身地：_____省 _____市 専攻：_____ 留学暦：満 _____年 _____ヶ月

(1) 来日する前、日本語を勉強したことがありますか。 ()

- ①ある ②なし

「ある」と答えた方は (2) も記入してください。

(2) これまで何年間日本語を勉強してきましたか。 (年)

(3) 日本語能力試験を受けたことのある方は以下の項目もお答え下さい。

日本語能力試験級 (年) 点数：()

(4) 日本人の日本語能力を 100% としたら、ご自分の日本語はどれぐらいだと思いますか。

聞く：() 話す：() 書く：() 読む：()

(5) あなたはどれぐらい流暢な日本語がしゃべれると思いますか。()

- ⑦ネイティブに近い ⑥かなり流暢である ⑤ある程度できる ④どちらとも言えない
③あまり流暢ではない ②流暢ではない ①使わない

(6) あなたはこれまで、日常生活の中、どのぐらいの頻度で日本人学生と接しますか。

- a). 会って立ち話をする：⑦100 回以上 ⑥80－100 回 ⑤60－80 回 ④40－60 回
③20 回－40 回 ②5 回－20 回 ①0 回－5 回

- b). 一緒にご飯を食べる：⑦100 回以上 ⑥80－100 回 ⑤60－80 回 ④
40－60 回 ③20 回－40 回 ②5 回－20 回 ①0 回－5 回

- c). 電話で話をする：⑦100 回以上 ⑥80－100 回 ⑤60－80 回 ④40－60 回
③20 回－40 回 ②5 回－20 回 ①0－5 回

- d). 大学以外の場で個人的に会う：⑦100 回以上 ⑥80－100 回 ⑤60－80 回
④40－60 回 ③20 回－40 回 ②5 回－20 回 ①0 回－5 回

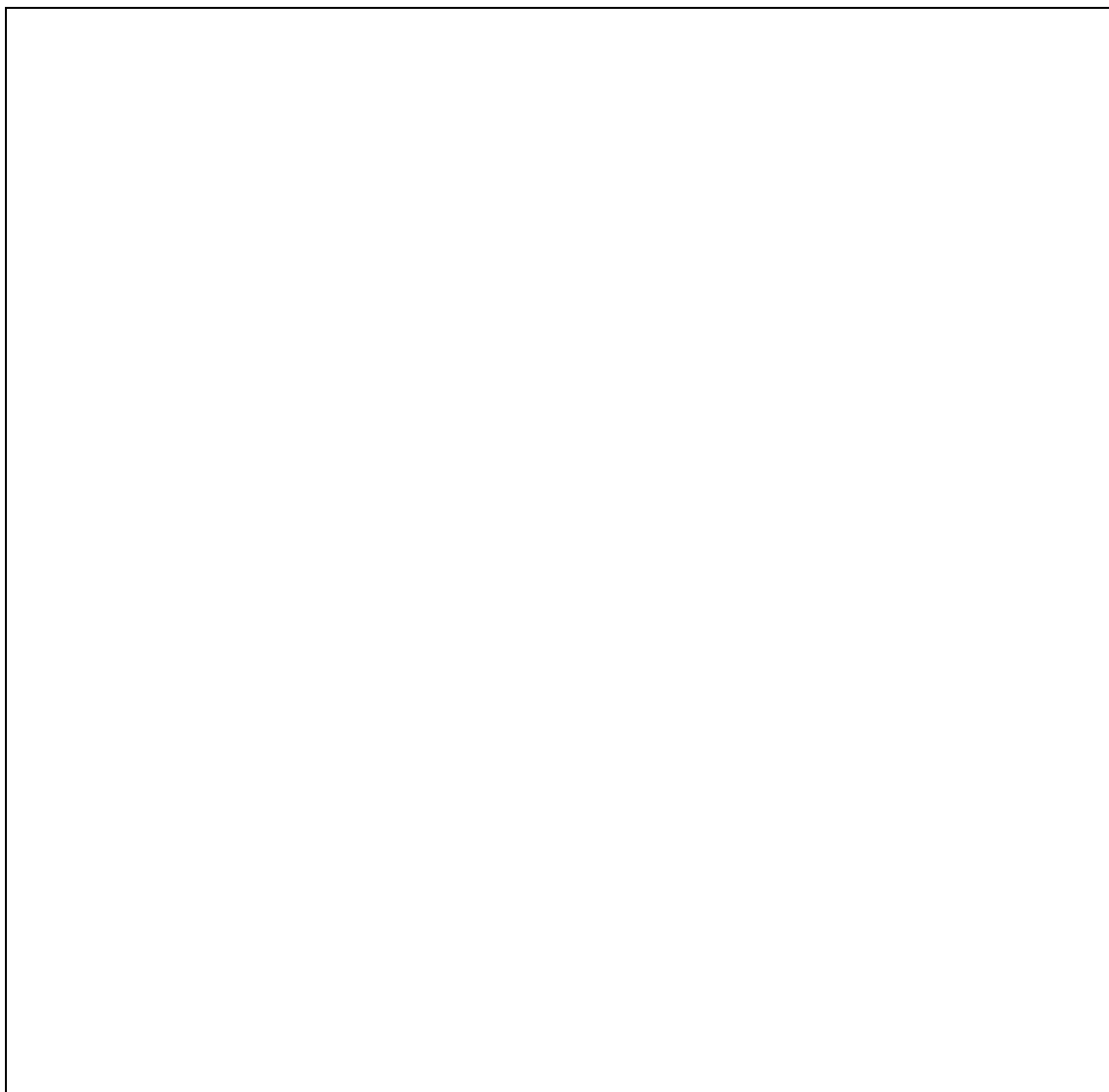
(7) あなたは、一般的な日本人学生を、どれくらい好きですか。

- ⑦非常に好きだ。 ⑥かなり好きだ。 ⑤やや好きだ。 ④どちらとも言えない。
③あまり好きではない。 ②ほとんど好きではない。 ①全く好きではない。

(8) あなたはどれほど、一般的な日本人学生と一緒に勉強したり、仕事をしたりしたいと思いますか。

- ⑦非常にそう思う ⑥かなりそう思 ⑤ややそう思う ④どちらとも言えない
③あまりそう思わない ②ほとんどそう思わない ①全くそう思わない

資料 3. 先ほどインタビューをした相手に対する印象について、300 字以内で自由に記述してください（箇条書きでも結構です）。

A large empty rectangular box with a thin black border, intended for the respondent to write their impressions within the 300-character limit.

資料 4. 先ほどインタビューした相手が各質問についてどう答えたか、それらの回答を思い出して、記述してください。回答した通りでなくても、思い出した順番に書いていただいて結構です。正確に思い出せない場合は、大体の内容を書いていただいてかまいません。

資料 5

(1) 先ほどインタビューした相手はどのような人なのか、当てはまると思われるものに○を付けてください。

	全く そう 思わない	ほとん どそう 思わない	あまり 思わ ない	ど ちら でも ない	やや そう 思う	か なり そう 思う	非 常 に そう 思う
①授業や研究に真面目だ。	1	2	3	4	5	6	7
②勤勉だ。	1	2	3	4	5	6	7
③自己主張が強い。	1	2	3	4	5	6	7
④親族の絆が強い。	1	2	3	4	5	6	7
.....							
⑤家族思いだ。	1	2	3	4	5	6	7
⑥競争的だ。	1	2	3	4	5	6	7
⑦英語が上手だ。	1	2	3	4	5	6	7
⑧仕事に積極的だ。	1	2	3	4	5	6	7
.....							
⑨野心的だ。	1	2	3	4	5	6	7
⑩頭が良い。	1	2	3	4	5	6	7
⑪情熱的だ。	1	2	3	4	5	6	7
⑫雄弁だ。	1	2	3	4	5	6	7
.....							

(2) あなたは、先ほどインタビューした相手を、どれくらい好きですか。()

- ⑦非常に好きだ ⑥かなり好きだ ⑤やや好きだ ④どちらとも言えない
 ③あまり好きではない ②ほとんど好きではない ①全く好きではない

(3) あなたはこの相手と一緒に勉強したり、仕事をしたりしたいと思いますか。()

- ⑦非常にそう思う ⑥かなりそう思う ⑤ややそう思う ④どちらとも言えない
 ③あまり思わない ②ほとんどそう思わない ①全くそう思わない

資料 x (印象の自由記述) の中、日本人学生の各自由記述は下記の 12 項目 (表 1) に言及したかかどうか、当てはまると思われる得点を選んでください (評定は Sheet 3)。

表 1 参照項目

	1、雄弁だ	2、情熱的だ	3、頭が良い	4、野心的だ	5、仕事に積極的だ	6、英語が上手だ	7、競争的だ	8、家族思いだ	9、親族の絆が強い	10、自己主張が強い	11、勤勉だ	12、授業や研究に真面目だ
			全く反対である	ほとんど該当しない	あまり該当しない	どちらでもない	やや該当する	かなり該当する	非常に該当する			
記述①	1	2	3	4	5	6	7					
記述②	1	2	3	4	5	6	7					
記述③	1	2	3	4	5	6	7					
記述④	1	2	3	4	5	6	7					
.....												
記述⑤	1	2	3	4	5	6	7					
記述⑥	1	2	3	4	5	6	7					
記述⑦	1	2	3	4	5	6	7					
記述⑧	1	2	3	4	5	6	7					
.....												
記述⑨	1	2	3	4	5	6	7					
記述⑩	1	2	3	4	5	6	7					
記述⑪	1	2	3	4	5	6	7					
記述⑫	1	2	3	4	5	6	7					
.....												
記述⑬	1	2	3	4	5	6	7					
記述⑭	1	2	3	4	5	6	7					

ターゲット人物の回答に対する解釈の評定

ターゲット人物（中国人留学生）の回答を読んだり，聞いたりしてください。当該人物の回答は複数の面で解釈できるかどうか，以下の基準に従って，評定してください。

例：意味が非常に明確な場合：「0」を選んでください。

どちらでもない場合：「5」を選んでください。

意味が非常に曖昧な場合：「10」を選んでください。

非常に明確	かなり明確	ある程度明確	やや明確	どちらかと言えば明確	どちらとも言えない	どちらかと言えば曖昧	やや曖昧	ある程度曖昧	かなり曖昧	非常に曖昧
-------	-------	--------	------	------------	-----------	------------	------	--------	-------	-------

回答 1: 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

回答 2: 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

回答 3: 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

回答 4: 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

回答 5: 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

回答 6: 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

回答 7: 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

日本語学習者のデータ分析（マニュアル）

以下の基準に参照して、留学生の各文（添付資料）が正しいかどうかを判断してください。間違った箇所を次のシートに記入してください。

- ①普通体・丁寧体の使い分け a)文中 b)文末(丁寧体を使用する必要があるにも関わらず、普通体を使用している誤用)
- ②人の呼び方・示し方（自称詞、対称詞）
- ③名詞に付属する「お」「ご」の使用（名詞への付属の誤用のみを扱う。「お～する」のような動詞に関するもの、接頭辞+形容詞については⑪で扱う。例えば、「お時間」「ご都合」など）
- ④助詞（「が」、「を」、「に」、「で」などのようなもの）
- ⑤接続助詞（逆説を表す「が、けれども」、矛盾を表す「のに」、原因や理由を表す「から、ので」）
- ⑥形容動詞・形容詞の誤用（連体修飾語として、形容詞が名詞を修飾する場合、「の」を入れたり、あるいは形容詞が名詞を修飾する場合、「な」を入れ忘れていたりするなど）
- ⑦動詞・形容詞・名詞の語尾変化（「メールが届いたかどうか心配」、「暇な時」、など）
- ⑧時制（過去形、現在形など）
- ⑨使役（「～せる/させる」のような表現）
- ⑩語順（主語、述語、対象語という文になっているか、特に因果関係について述べた場合、「因」と「果」の順序は自然かどうか、など）

付録 9

⑪ 尊敬・謙譲の表現 a) 尊敬語 b) 謙譲語 c) 不必要な敬語の使用 d) 不適切な表現の使用
(a は尊敬語を使用すべき部分での誤用 ; b は謙遜語を使用すべき部分での誤用 ; c は敬語を使用する必要がある部分での誤用 ; d は使用されている表現自体が不適切なもの)

⑫ 授受表現・恩恵の授受の認定 a) 授受表現の不使用 b) 敬意表現 c) 不適切な表現の使用
(a は利益や恩恵の授受を認めて受給表現を使用する必要があるのに使用していないもの ; b は受給表現は使用しているが尊敬・謙遜の形にできていないもの ; c は受給表現を使用すること自体が不適切なものを指す)

⑬ 自他動詞

⑭ 推測を表す「かもしれない」などの誤用

⑮ 名詞化の a. 欠如 b. 過剰

⑯ 使うべき動詞の誤用 (自他動詞以外、例えば「取り組む」を使うべきなのに、「取り込む」を使ってしまったケース)

⑰ 副詞

⑱ 中止形 (「て」形, 「～で」など)

⑲ 否定形の誤用 (名詞, 形容詞, 形容動詞, 動詞などの否定形を含む)

⑳ 「～たら, なら, ～ば」

言語行動様式に関する評定用マニュアル（説明資料）

1. 「丁寧さ」に関する定義及び注意点

ここで言う「丁寧さ」とは、相対的丁寧さの意味を指す。即ち「談話状況において、最も適切な表現が最も丁寧である」というように捉える。

★ポイント：談話状況とは、初対面の人に対する状況である。「ポライトネス」の視点から、

- ①「関係づくりへの配慮」：a. 不快感を与えるかどうか、b. 冷たくとられるかどうか、
c. 感情がうまく伝わるかどうか
- ②「言語形式への配慮」：a. 主語が抜かされるかどうか、b. 意味がはっきり分かるかどうか、
c. 相手に分かりやすく伝えるかどうか

評定は2つの対人配慮原則に分けて行うこと。各原則の a/b/c のいずれに違反した場合は丁寧さが欠けているとみなしてください。

具体的にどう評定していただきたいか、実際の例を見て評定してみる（配布資料 X）。

2. 「適切さ」に関する注意点

★基準：①質問に対する回答になっているかどうか。

②文前後の関係から、内容として論理性があるかどうか。

例えば、自分が質問者として、相手の回答を聞いたり読んだりして、納得できるかどうかを評定する。

「適切さ」の評定はまず答えになっているかどうかを最優先すること。

質問に対する回答にならないものは「全く適切ではない」と評定してください。なお、メール群の No. 17 の最後の質問（「日中の相互理解についてどう思いますか」）は日本人学生の質問の仕方が悪かったので、該当しない。

⇒例①「何故日本に留学しに来ましたか」という質問に対して、「まだない」（電話群 No.17 の問②）と答えたり、もしくは

②「今日はお疲れ様でした」に対して、「全然」と答えたり（メール群の No. 17 の最後）、

③「日本での生活についてどう思いますか」に対して、本来は「自分」の生活について回答すべきだが、全く無関連の回答をしたりする場合は（電話群 No.14 の問③、No.16 の問③）、「①全く適切ではない」などは「①全く適切ではない」と判断してください。

これ以外のものがあつた場合の評定方法は、配布資料の具体例を見てください。

言語行動様式に関する評定具体例（配布資料）

Example 1

Sj1：はじめまして、実験参加者です。さて、あなたの大学での専攻を教えてくださいか？

Sc：こんにちは！私の専門は生物材料科学です、現在大学院一年生です、よろしくお願いします

Sj2：こちらこそよろしくお願いします。生物材料専攻とのことですが、なぜいまの大学を選んだのですか？

Sc：自分は繊維に関する化学合成などの研究に興味があります、いまの研究室はこれを中心に取り込んでおり、レベルてきには高いと思いますので、ここに来たんです

Sj3：なるほど、知名度とか人気ではなく、研究水準で選んだのですね。では、今の学生生活はどうお考えですか？

Sc：結構充実だと思っていますね＝自分で今まで解明されていないものを研究するのは大変面白いです。しかもバイトもやっているんで、学校と違う世界も体験しているんです

Sj4：なるほど～研究やバイトは楽しいのですね。サークルや部活動はやってますか？

Sc：ちょっとやっていないですね、やはり時間のほうがきついです、いろんな趣味があるのに＝

Sj5：やはり忙しいですよ。話は変わりますが、ご家族の誕生日や母の日に何か(電話したりプレゼントを送ったり)していますか？

Sc：うん、電話は当然しますが、遠いからプレゼント贈るのは不便ですね＝その変わりますが、そのかわりに、帰国のにとき、必ずプレゼントしますので

Sj6：遠いと送るのも大変ですよ。ところで、将来のお仕事はどうしたいですか？やはり専攻の生物材料関係？職場も日本か中国か、あるいは他の国とか選択肢はたくさんあると思います。

Sc：日本の繊維関係の会社で研究職として働くのは一番良いと思います。チャンスがあれば、欧米の会社もチャレンジしてみたいです＝

Sj7：色々な目標があっていいですね。ところで、神様が何か一つ願い事を叶えてくれるとしたら何を願いますか？

Sc：友人及び家族が元気で生きていることだと思いますね

Example. 2

Sj1 : こんにちは。あなたは日本に来て何年目ですか？

Sc : はじめまして。日本に来て 2 年目です

Sj2 : ありがとうございます。どうして日本に留学してきたのか教えてください。

Sc : 大学のとき専攻は日本語だったのかもしれないので

日本に来て見ようとしたとおもいます

Sj3 : ありがとうございます。今日本での留学生活についてどう思っていますか？

Sc : たまに心の余裕がないなあと感じたりしますが

多くの時間は楽しいと思っています

Sj4 : その気持ちすごくよくわかります!よく中国のご家族の方に電話したりメールしたりしますか？

Sc : そうですね よくテレビ電話をします

Sj5 : 仲がよいですね。あなたは日本の大学システムについてどう思っていますか?中国の大学とは何か違いはありますか？

Sc : よく分かりませんが 日本の大学はわりと自由な感じがします

Sj6 : なるほど!それでは日本あるいは日本人の長所と短所は何だと思えますか？

Sc : 短所と言えるかどうか分かりませんが 日本は街でよくホンムレースの人を見掛けています

長所は病院のシステムの届いてます

Sj7 : ありがとうございます。それは重要な問題ですね。最後にお尋ねします。日本人と中国人の相互理解の現状についてどう思えますか？

Sc : ひとごとと言うと積極性がないと思います

どちらの人も考え方がメディアに大きく左右されて自分から真実を探そうとしないような感じがします

Sj8 : ありがとうございました。すごく参考になりました。

Example 3

Sj1: 本日はよろしくお祈いします。

早速質問させて頂いてよろしいでしょうか＝

Sc: よろしい

Sj2: 大変ありがとうございます。

じゃあ今から7つの質問をさせて頂きます。ご専攻を教えてもらえますか＝

Sc: 精密機械

Sj3: なるほど。なぜ今の大学に入学されたんですか＝

Sc: 博士号を取って、自分の興味の研究をします。

Sj4: それは大変そうですね。是非頑張ってください。

では現時点での学生生活はどう思いますか＝

Sc: 日本にきたばかりなので、日本語がききにくいです。今、入学に準備します。忙しいです。

Sj5: そうですね。日本語の勉強も大変そうですが早く日本に慣れるといいですね。

ではまだ大学の友達と部活やサークルなんかはやっていないのでしょうか＝

Sc: 研究のセミナーやシンポジウムやいろいろの活動を友達と一緒に参加します。

Sj6: なるほどもう研究は始まっているわけですね。

次は少しプライベートな質問かもしれませんが、あなたは家族の誕生日や母の日などに、家に電話したりプレゼントしたりしますか＝(?)

Sc: はい、必ず電話をします、時々プレゼントをします。

Sj7: それはとても家族思いなことだと思います。是非これからも続けてください。

それでは博士号を取った後、どのような職業に就きたいと考えていますか＝(?)

Sc: 医療会社で就職したいですよ。できるだけオリンパス。

Sj8: そこまでしっかり考えているとは驚きました。今から計画しているなら必ずできるはずです。頑張ってください＝(!)

それでは最後の質問です。色々と正直に答えてもらってありがとうございました。もし、神様がいて一つだけあなたの願いを叶えてくれるなら、何を願いますか＝(?)どんな願いも叶います。

Sc: 家族は健康で、寿命が長いです。

Example 4

Sj1: もしもし、こんにちは。あの、ではお願いします (Sc: はい)。質問させていただきま
すので、お願いします (はい)。

Sc: もしもし、はい、こんにちは。

Sj2: えっと、あなたは日本に来て何年目ですか。

Sc: えっと、四年目です。

Sj3: あ、そうなんですか。では、あなたは、なぜ日本に留学しに来ましたか。

Sc: まあ、特別な理由はないですね。はい。うん。

Sj4: あ、はい、そうですか (はい)。あなたは、今、日本での留学生活についてどう思いま
すか。

Sc: ええ、まあまあ (笑)、うん、まあまあだと思います。

Sj5: はい。では、あなたは、よく中国のご家族に電話したり、メールしたりしますか。

Sc: はい、うん、週、週一回、少なくとも、週一回します。はい。(うん)

Sj6: ああ、そうですか。えっと、あなたは日本の大学システムについて、どう思いますか。
中国の大学とは、何か違いがありますか。

Sc: うん、特に違いを感じられてないです。はい。

Sj7: ああ、では、日本の、ああ、ごめんなさい。日本、あるいは日本人の長所、短所は何
だと思いますか。

Sc: 日本人の長所は、根性あると思います (うん) , えっと、根性ある、うん (うん)。
短所は、冷たい、へへ

Sj8: (笑) 冷たいですか。えっと、じゃあ、日本人と中国人の相互理解の現状については、
どう思いますか。

Sc: 相互理解の現状？

Sj9: はい、相互理解の現状ですね。

Sc: 現状、相互…。ええ、やっぱりまだまだです。うん、まだまだです。両…

Sj10: まだまだですか。ああ、そうですか (Sc: はい、うん)。じゃあ、これでおしまいな
ので (Sc: はい)、今日はどうもありがとうございました。

Sc: ありがとうございます。

Sj11: では、失礼します。

Sc: 失礼します。

関連情報の有無に関する評定

1、資料 X (トランスクリプト化されたもの) の中、中国人留学生の各質問に対する回答 は下記の 12 項目 (表 1) に言及したかかどうか、当てはまると思われる得点を選んでください (評定は Sheet 1)。

表 1 参照項目

1、雄弁だ	2、情熱的だ	3、頭が良い	4、野心的だ	5、仕事に積極的だ
6、英語が上手だ	7、競争的だ	8、家族思いだ	9、親族の絆が強い	
10、自己主張が強い	11、勤勉だ	12、授業や研究に真面目だ		

	反対である	かなり反対である	やや反対である	どちらでもない	やや該当する	かなり該当する	該当する
回答①	1	2	3	4	5	6	7
回答②	1	2	3	4	5	6	7
回答③	1	2	3	4	5	6	7
回答④	1	2	3	4	5	6	7
回答⑤	1	2	3	4	5	6	7
回答⑥	1	2	3	4	5	6	7
回答⑦	1	2	3	4	5	6	7

メモリクイズの評定得点

まず、ターゲット人物の回答を読んだりしてください。そして、日本人参加者のメモリクイズを読んで、ターゲット人物の回答はどの程度再生できるか、当てはまると思われるところを選んでください。

例：回答は全く再生できなかつた場合：0点 ⇒ 「a.」を選んでください。

ある程度は再生できたが、不十分なところがある：1点 ⇒ 「b.」を選んでください。

完全に再生できた (キーワード)：2点 ⇒ 「c.」を選んでください。

問①： a. 0点 b. 1点 c. 2点

問②： a. 0点 b. 1点 c. 2点

問③： a. 0点 b. 1点 c. 2点

問④： a. 0点 b. 1点 c. 2点

問⑤： a. 0点 b. 1点 c. 2点

問⑥： a. 0点 b. 1点 c. 2点

問⑦： a. 0点 b. 1点 c. 2点

資料 X (メモリクイズ) の中、日本人学生の各記憶再生は下記の 12 項目 (表 1) に言及したかかどうか、当てはまると思われる得点を選んでください (評価は Sheet 2)。

表 1 参照項目

1、雄弁だ	2、情熱的だ	3、頭が良い	4、野心的だ	5、仕事に積極的だ
6、英語が上手だ	7、競争的だ	8、家族思いだ	9、親族の絆が強い	
10、自己主張が強い	11、勤勉だ	12、授業や研究に真面目だ		

	反対である	かなり反対である	やや反対である	どちらでもない	やや該当する	かなり該当する	該当する
再生①	1	2	3	4	5	6	7
再生②	1	2	3	4	5	6	7
再生③	1	2	3	4	5	6	7
再生④	1	2	3	4	5	6	7
再生⑤	1	2	3	4	5	6	7
再生⑥	1	2	3	4	5	6	7
再生⑦	1	2	3	4	5	6	7

評定方法と判断基準

1、評定方法について

資料①は中国人留学生の各質問に対するまとまった回答を対象とする。そして、各回答がそれぞれ 12 項目に言及したかどうか、表 1 を参考にしながら、当てはまると思われる得点を選んでください。よって、各留学生の回答は全部で揃えば 7 となる。

資料②と資料③はすでにユニット化されたから、資料②は各記憶再生、資料③は各記述、それぞれ、表記された番号通りに評定してください。

※ 注意点：

(1) 資料②のメモリクイズはあくまでも、中国人留学生が各質問に対してどう回答したかの再生なので、全部で再生できた場合は、7つしかないが、全部で再生できなかった場合はそれ以下になる。また、再生の順番は必ずしも留学生の回答した順番通りではないため、資料②の順番に従って評定してください。

(2) 資料③の自由記述は 7 つ以上なものもあれば、それ以下のものもあるため、一定していない。

2、判断基準

(1) 資料①について、留学生の各回答を読んで、表 1 のいずれの項目に言及する、もしくは関連すると思われるものであれば、当該項目に当てはまると判断してください。

(2) 項目の得点化する基準

以下は各項目をどう得点化する基準である：

①雄弁だ：「話術が優れていて、論理的な印象を人に与える」という意味を指す。

7点：国人留学生の回答は日本人学生の質問に対して、内容が明確で、しっかりと論理的に述べた場合。例えば、理由としては、「①、②。。。」などを挙げたりする。

5点：内容が明確で、はっきりと①、②などはないが、発話から論理性が読み取れた場合。

4点：どちらとも言えない。

3点：内容がやや明確だが、論理性はない場合。

1点：内容は不明確で、論理性も欠けている場合。

②情熱だ：「激しく高まった気持ち。感情が熱している（熱されている）心理状態」にあることを意味する。

7点：自ら相手に挨拶したり、相手と積極的に交流したり、相手の発言に対してコメントしたり、相槌を打ったり、積極的にコミュニケーションをしたりした場合。

5点：相手には積極的に挨拶したり、コメントしたりはしないが、相手の質問に回答する以外、相槌も打ったりした場合。

4点：相手の質問に回答しただけの場合。

3点：相手の質問にあまり回答したくなかったり、冷たく捉えられたりした場合。

1点：不気味に解釈された場合。

③頭が良い：「聡明」、「賢い」などと類義語。

学歴が高いことや、反応や回転が速いことなど。たとえば、自分の学歴や能力などをはっきりと示した場合は当該項目に当てはまると評定してください。

7点：学歴や、研究能力を示したり、どのような資格を持ったりすることを明示した場合。

5点：ある程度の能力がないと達成できないことを行う/行いたいと考えていることが示された場合。

4点：特に高能力や資格を持っていないが、劣ることはない場合。

3点：学歴や能力を示さず、やや劣った場合。

1点：能力が劣ったり、資格を持っていなかったりした場合。

④野心的だ：主としては「計画的」と「人的」の2つを指す。

前者は「大胆」、「チャレンジングな」、「困難を覚悟する」、「やり甲斐がある」などで、後者は「野心家」、「自信満々」、「上昇志向が強い」、「挑戦する志向が強い」、など。

中国人の各回答の中、上記のいずれに関連する、もしくは解釈されるものがあれば、「該当する」と判断してください。

7点：はっきりと自分の目標や計画を述べた場合。例えば、「研究者になりたい」「大学の先生になりたい」「～を目指して」のような表現が挙げられている。

5点：それほど強い表現ではないが、「たぶん/おそらく、銀行とかサービス業」のような表現をした場合。

4点：はっきりと今後の目標や計画を述べるのではなく、単に「たぶん仕事したい」のよう

な表現をした場合。

3点：まだ具体化せず、特にこだわりがない、のような場合。

1点：漠然とした表現をした場合。例えば「全く考えていない」、「今まで考えたことない」などのような記述

⑤仕事に積極的だ：「精力的」、「野心的」、「戦闘的」、「エネルギッシュに」、「前向きに」（取り組む）、「実行力のある」とは類義語である。中国人留学生の回答の中、これらのいずれに関連する、もしくはそう読み取れるものがあつた場合、「該当する」と評定してください。

※④との区別は、④は現在も将来も含めているのに対して、⑤は「現在形」が多いこと。

7点：「今、何を（積極的に/楽しく）やっている」のような記述をはっきりした場合

5点：直接ではないが、前向きに「何を体験している/やっている」などを述べた場合

4点：特に言及していない

3点：あまり仕事などを積極的に取り組んでいる姿勢が見られなかった場合

1点：仕事などをする意欲がないと明確に述べた場合

⑥英語が上手だ：文字通り、「英語」に得意だということである。おそらく直接言及することなく、何らかの形で示唆したものが多い。

7点：欧米で留学した経験があることや、将来、欧米で就職したいと考えているという形で示された場合。

5点：ある程度の英語能力がないと、このようなことが達成できないと暗示された場合。例えば、「博士課程の進学を目指したい」⇒ 英語の論文を読むのが要求されることを前提

4点：特に英語能力に問われないもの。

⑦競争的だ：「功名心」（にはやる）、「勝ち気」、「負けん気」、「負けづらい」、「上昇志向の強い」などが類義語である。留学生の発話の中、これらのいずれを含めた、もしくはそう解釈できると思われた場合、この項目に該当すると評定してください。④との違いは、④は「計画性」も含めているが、⑦は「何を目標として、争う」ことを意味する。

7点：はっきりと、争わなければ目標が達成できない意味が含まれている場合

5点：目標を達成するには、ある程度の競争が必要な場合（例えば、就職や進学、など）

4点：どちらの意味とも読み取れない場合

3点：あまり上昇志向がなく、やや消極的である場合

1点：上昇志向がなく、消極的な態度で、現状に満足している場合

⑧家族思いだ：文字通り、どこにいても、どこに行っても、家族のことを常に大事にする意味。これは様々な行動から表現する：「よく家族と連絡したり」、「家族にプレゼントをしたり」、「何かあったとき、家族と相談したり」、「常に家族の健康を願ったり」することなどが挙げられる。これらのものがあつた場合、これに該当すると評定してください。

7点：明確に、「家族」と関連したり、「家族」を対象にしたり言及した場合。

5点：ある程度「家族」と関連して、暗黙のうちに「家族」を対象にした場合。

4点：特に「家族」と関係しない場合。

3点：あまり家族と関係なく、特に家族を対象にする必要がない場合。

1点：家族と無関係で、個人を対象にした場合。

⑨親族の絆が強い：「親族」とは「家族」のみならず、「親戚」、「親友」なども含まれている。⑧より範囲が広いため、⑧に該当するものなら、⑨には必ず該当するが；逆に⑨に該当するものでも、⑧に該当するとは限らない。そのため、「親戚」や「友人」という範囲に及んだ場合は⑧、⑨にも該当すると評定してください。

7点：明確に、家族と親戚、友人を対象にした場合

5点：家族以外、親戚か友人のいずれかのみを対象にした場合

4点：特に家族や親戚、友人などを対象にしない場合

3点：あまり家族や親戚、友人と関係なく、基本的には自分を対象にした場合

1点：全く無関係である場合

⑩自己主張が強い：「押し付けがましい」、「無遠慮な」、「凶々しい態度」、「自己中心の考え」、「相手構わず」などとは類義語。留学生の発話の中、これらと関連する、もしくはそう解釈されるものがあると思われた場合、該当すると評定してください。

7点：はっきりとそうしなければならぬと主張した場合

5点：明確には言及せず、そうすべきという意味が暗示された場合

4点：どちらとも言えない

3点：自分の考えをあまり示さず、やや曖昧な場合

1点：全く自分なりの考えを示すことなく、極めて曖昧な場合

⑪ 勤勉だ : a. 「労働, 取り組みなどについて」: 努力, 精勤, (仕事) 熱心, 働き者, など ;
b. 「勤勉に～する」: 着実に, 一生懸命に, こつこつと, 根気よく, せっせと, などが類義概念である。留学生の回答の中, a. b.のいずれの項目に関連する, もしくはこれらの項目を表現する発話があった場合, 当該項目に評定してください。

7点 : 明確に, 何について, 積極的に取り組んでいると述べた場合

5点 : 明確ではないが, 着実に, 何かについて取り組んでいる/行っていると述べた場合

4点 : 何かについてやっているが, 特に勤勉さが必要だとはいえない

3点 : ある程度はやっているが, 熱心度や根気強さはあまりない場合

1点 : 消極的な姿勢で, 義務的に取り組んだと示された場合

⑫ 授業や研究に真面目だ : 「真面目」とは, 性格や態度, 行動, など様々があるが, ここでは, 「授業や研究」という「努力・取り組み」を軸とする。

この次元では, 「本気で」, 「真摯に」, 「一生懸命」, 「気張る」, 「よく (勉強する)」などが類義語である。評点は以下の通り :

7点 : 明確に何を勉強するか, 研究するかに言及した場合, 例えば

「毎日, 本や論文を読んで, 統計の授業にも出て勉強しています」

5点 : 明確に何を勉強するかには言及していないが, 授業に出たりして, 充実している/楽しいなどと述べた場合

4点 : 講義とかは取っているが, 楽しいか, 充実するかどうかは特に言及していない場合

3点 : あまり講義を取ったり, 研究する意欲がないと示した場合

1点 : 早く勉強生活を終わらせたいと明確に述べた場合

(3) 資料②について

日本人学生の記憶再生には, 表 1 の 12 項目のいずれに言及するか, もしくは言及したと解釈できると思われた場合, 当該項目に当てはまると評定してください。

※ 注意点 : 日本人学生の記憶再生は必ずしも留学生の回答をそのままに再生するとは限らないため, 言い換えたり, 短くしたりすることが多いので, 評定上は要注意。

※ 項目の得点化は上記の判断基準に従ってください。

(4) 資料③について,

a. 表 1 に記述されたまま, もしくは違う表現で同じ意味を表す場合, 得点を「7」にしておく

ださい。

例えば：「頭が良い」，「とても家族思い」（表 1 のまま）

「家族に対する思い」 / 「家族を大切に/大事にしている」（言い換えた場合）

b. キーワードのみの場合も「7」と評定してください。

例えば表 1 の項目 12 は「授業や研究に真面目だ」であるが、実際の記述には「真面目だ」というキーワードがあれば、当該項目に該当すると判断してください。

c. 直接ではないが、日本人と比較された場合、即ち、日本人はそうしない、中国人留学生の特性としてだと帰属された場合、当該記述の言及した項目は関連すると評定してください（即ち、得点が「7」となる）。

例えば：「一番印象にあるのは、最後の質問、神様へのお願いへの返事が、友人や家族が無事に生きていること、という点です」⇒ 「家族思い」、「親族の絆が強い」

d. 表 1 に示している項目と逆の記述があった場合、得点を①にしてください。例えば、下記のような場合：

「消極的で自己主張をするような感じではない」⇒「自己主張が強い」

「『あまり』を使うなど、物事をはっきり言うタイプの人ではなさそう」⇒「雄弁だ」

「日本に留学している理由についてもあまりはっきりしたことが述べられておらず、ぼく
ぜんとしている感じ」 ⇒ 「野心的だ」「仕事に積極的だ」に反した

e. 相手ではなく、日本人に関する感想や相手に対する印象ではないものは評定対象としな
いでください（「0」と表記してください）。

例えば：「おそらく、多くの日本人はこういう返答はしないのではないかと思うからです。」

この文は前の文の解釈であるが、この文自体は日本人に関して述べたものなので、評定対象から外すことになる。

B. 来日した後のケータイに関する使用状況について記入してください。

I. ケータイの**所持**及び**音声機能**に関する質問に教えてください：

(1) あなたはこれまで**何年間**ケータイを使用してきましたか？ ()

- ①1年未満 ②1年以上～2年未満 ③2年以上～3年未満 ④3年以上～4年未満
⑤4年以上～5年未満 ⑥5年以上～8年未満 ⑦8年以上

(2) あなたは以下の**いずれか**を主要目的として、ケータイの**音声機能**（以下「**電話**」と称する）を使用していますか？**複数回答可** ()

- ①緊急時の相談 ②待ち合わせの連絡 ③居場所の確認 ④学業や仕事の相談
⑤友人や恋人とおしゃべり ⑥バイト先との連絡 ⑦買い物や注文など ⑧その他

(3) あなたは、普段、**一日**どのぐらいケータイの**電話**を使っていますか？（**発信のみ**） ()

- ①ほとんどしない ②2～3日に一回程度 ③1回程度 ④2回程度
⑤3～5回程度 ⑥5～10回程度 ⑦10回以上

(4) あなたは、普段、**主として誰と**ケータイの**電話**で連絡していますか？（**発信のみ**）**複数回答可** ()

- ①恋人 ②友人 ③家族 ④バイト先の上司やスタッフ ⑤チューターや同じ研究室のゼミ生
⑥指導教員 ⑦大学の事務員 ⑧その他

(5a) あなたは、ケータイの**電話**を使用することは、**情報を伝達する**には有効だと思いますか？ ()

- ①全くそう思わない ②ほとんどそう思わない ③あまり思わない ④どちらとも言えない
⑤ややそう思う ⑥かなりそう思う ⑦非常にそう思います

(5b) あなたは、ケータイの**電話**を使用することは、**友情を深めることができる**と思いますか？ ()

- ①全くそう思わない ②ほとんどそう思わない ③あまり思わない ④どちらとも言えない
⑤ややそう思う ⑥かなりそう思う ⑦非常にそう思います

(5c) あなたは、ケータイの電話を使用することは、交際範囲を広げることができると思いますか？（例えば、日本人やほかの外国人留学生と友達なったりするとか）（ ）

- ①全くそう思わない ②ほとんどそう思わない ③あまり思わない ④どちらとも言えない ⑤ややそう思う ⑥かなりそう思う ⑦非常にそう思う

(5d) あなたは、ケータイの電話を使用する際、緊張したり、ストレスを感じたりすると思いますか？ （ ）

- ①全くそう思わない ②ほとんどそう思わない ③あまり思わない ④どちらとも言えない ⑤ややそう思う ⑥かなりそう思う ⑦非常にそう思う

言えない ⑤ややそう思う ⑥かなりそう思う ⑦非常にそう思います

(5c) あなたは、ケータイのメールを使用することは、交際範囲を広げることができると思いますか？(例えば、日本人やほかの外国人留学生と友達になったりするとか) ()

①全くそう思わない ②ほとんどそう思わない ③あまり思わない ④どちらとも言えない ⑤ややそう思う ⑥かなりそう思う ⑦非常にそう思います

(5d) あなたは、ケータイのメールを使用する際、緊張したり、ストレスを感じたりしますか？ ()

①全くそう思わない ②ほとんどそう思わない ③あまり思わない ④どちらとも言えない ⑤ややそう思う ⑥かなりそう思う ⑦非常にそう思います

III. ケータイのインターネットアクセスに関する質問に教えてください。

(1) あなたは普段、一日どれほどケータイのインターネットにアクセスしますか？ ()

①全くしない ②0分～20分未満 ③20分～40分未満 ④40分～1時間未満
⑤1時間～1時間20分未満 ⑥1時間20分～2時間未満 ⑦2時間以上

(2) 上記の質問に①以外を選んだ方は、以下のいずれかを主要目的として、ケータイのインターネットを使用していますか？複数回答可。()

①天気情報や路線を調べる ②eラーニングで日本語や英語を勉強する ③音楽を聴く
④参加する Web コミュニティを見る ⑤ニュースなどを見る ⑥ゲームをする
⑦暇つぶしなど ⑧その他

C. パソコンの所持・使用状況に関する質問に教えてください：

(1a) あなたはこれまでどれくらいパソコンを使用してきましたか？ ()

- ①1年未満 ②1年以上～2年未満 ③2年以上～3年未満 ④3年以上～4年未満
④4年以上～5年未満 ⑥5年以上～8年未満 ⑦8年以上

(1b) あなたは現在、自分専用のパソコンがありますか？ノートもデスクトップも結構です。() ①ある ②なし

(2) あなたは普段、一日どれほどパソコンのインターネットにアクセスしますか？ ()

- ①1時間以内 ②1～2時間 ③2～3時間 ④3～4時間 ⑤4～5時間
⑥5～6時間 ⑦6時間以上

(3) あなたは以下のいずれかを主要目的として、パソコンのインターネットを使用していますか？複数回答可 ()

- ①ニュースなどの社会情報を調べる； ②学業・仕事に関するものを調べる； ③音楽を聴く；
④興味のあることについて調べる； ⑤映画などを見る； ⑥eラーニングで勉強する；
⑦地域の生活情報を得る； ⑧買い物をする； ⑨ゲームをする； ⑩ブログを書く；
⑪Skype や msn などのメッセージャーで母国の家族と連絡する； ⑫その他

(4) あなたは以下のいずれかを主要目的として、パソコンの電子メールを使用していますか？複数回答可。()

- ①学業やアルバイトに関する連絡 ②おしゃべり・暇つぶし ③遊び・趣味などの話
④生活についての話 ⑤母国の家族や友人と連絡 ⑥買い物や注文など ⑦その他

(5) あなたは、普段、一日どのくらいパソコンの電子メールを使っていますか？(発信のみ) ()

- ①5通以下 ②5～10通 ③10～20通 ④20～30通 ⑤30～40通
⑥40～50通 ⑦50通以上

(6) あなたは、普段、主としてどなたとパソコンの電子メールで連絡していますか？(発信のみ) 複数回答可。()

- ①恋人 ②友人 ③家族 ④バイト先の上司やスタッフ ⑤チューターや同じ
研究室のゼミ生 ⑥指導教員 ⑦大学の事務員 ⑧その他

(7a) あなたは、パソコンの電子メールを使用することは、情報を伝達するには有効だと思えますか？ ()

- ①全くそう思わない ②ほとんどそう思わない ③あまり思わない ④どちらとも言えない
⑤ややそう思う ⑥かなりそう思う ⑦非常にそう思う

(7b) あなたは、パソコンの電子メールを使用することは、友情を深めることができると思えますか？ ()

- ①全くそう思わない ②ほとんどそう思わない ③あまり思わない
④どちらとも言えない ⑤ややそう思う ⑥かなりそう思う ⑦非常にそう思う

(7c) あなたは、パソコンの電子メールを使用することは、交際範囲を広げることができると思えますか？ (例えば、日本人やほかの外国人留学生と友達になったりするとか)
()

- ①全くそう思わない ②ほとんどそう思わない ③あまり思わない ④どちらとも言えない
⑤ややそう思う ⑥かなりそう思う ⑦非常にそう思う

(7d) あなたは、パソコンの電子メールを使用する際、緊張したり、ストレスを感じたりしますか？ ()

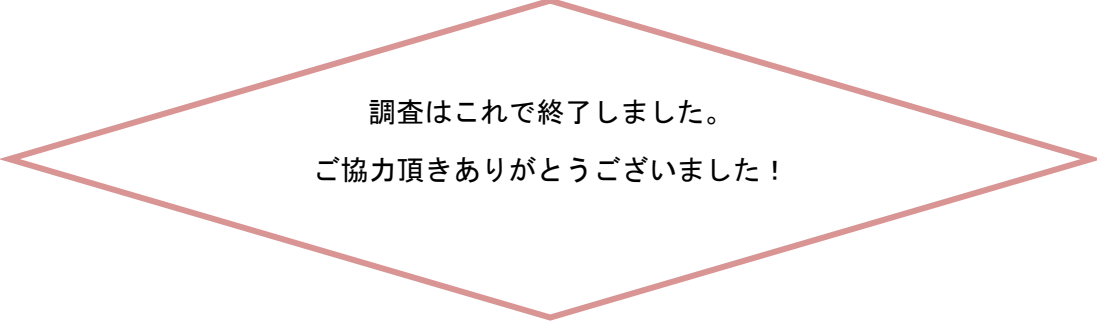
- ①全くそう思わない ②ほとんどそう思わない ③あまり思わない
④どちらとも言えない ⑤ややそう思う ⑥かなりそう思う ⑦非常にそう思う

D. あなたの留學生活の中、以下の項目について当てはまると思われるものに○を付けてください。

選択肢：

7. 非常に当てはまる； 6. かなり当てはまる； 5. やや当てはまる；
4. どちらでもない； 3. あまり当てはまらない； 2. 殆ど当てはまらない；
1. 全く当てはまらない

- a) 大学での研究や勉強が楽しい。 ()
b) 日本人の挨拶や礼儀が分からなくて困ることがある。 ()
c) 自分が外国人で目立つので、自分の行動が制限される。 ()
d) 日本に来てから感情の変化が激しくなった。 ()
e) 日本に来てから寂しくなることがよくある。 ()
f) 専門的知識を深めることができた。 ()
g) 研究方法や専門技術が学べる。 ()
h) 学位を取得する自信がある。 ()
i) いろいろな人と付き合っている。 ()
j) 外国人の友人がいる。 ()
k) 教員らとの交流が深まる。 ()
l) 日本の文化を体験することができる。 ()
m) 日本に関する知識・理解が深まる。 ()
n) 日本語が上達になった。 ()
o) 他の外国語も習得できた。 ()



調査はこれで終了しました。
ご協力頂きありがとうございました！

「日本語学習者のメディア利用」についてのアンケート

I : あなたご自身のことについて、☑してください。

性別	<input type="checkbox"/> 男性・ <input type="checkbox"/> 女性	年齢	満____歳____ヶ月	出身国・地域	
現在の大学における身分	<input type="checkbox"/> 学部生 <input type="checkbox"/> 大学院生（前期・後期） <input type="checkbox"/> 交換留学生 <input type="checkbox"/> 日研生 <input type="checkbox"/> 研究生（学部・大学院） <input type="checkbox"/> 科目等履修生（学部・大学院）				
専攻		これまでの日本滞在歴	満____年____ヶ月		
あなたは奨学金を受給されていますか？		<input type="checkbox"/> 有→それは <input type="checkbox"/> 文科省； <input type="checkbox"/> 民間奨学金； <input type="checkbox"/> 政府派遣等 <input type="checkbox"/> 無			
これまで何年間日本語を勉強してきましたか？		満____年____ヶ月			
日本語能力試験を受けたことがありますか？		<input type="checkbox"/> はい（19/20__年，__級__点）・ <input type="checkbox"/> いいえ			
成人日本人の日本語能力が100%だとしたら、ご自分の日本語はどれぐらいに相当すると思いますか？		聞く（ %）	話す（ %）	読む（ %）	書く（ %）

II. 日常生活におけるメディア利用について当てはまると思われるものに☑をしてください。

1-a. あなたは来日後から現在まで、ケータイもしくは iPhone/i-Pad を使っていますか？	<input type="checkbox"/> はい ⇒それは： <input type="checkbox"/> 一般ケータイ・ <input type="checkbox"/> スマートフォン <input type="checkbox"/> いいえ
1-b. 「はい」と答えた方は、今使っているのはどちらのキャリア（メーカー）ですか？	<input type="checkbox"/> ソフトバンク <input type="checkbox"/> NTT ドコモ <input type="checkbox"/> au(by KDDI) <input type="checkbox"/> ウィルコム <input type="checkbox"/> その他（ ）
2-a. あなたは今まで何年間日本のケータイを使ってきましたか？	<input type="checkbox"/> 8年以上 <input type="checkbox"/> 5～8年 <input type="checkbox"/> 4～5年 <input type="checkbox"/> 3～4年 <input type="checkbox"/> 2～3年 <input type="checkbox"/> 1～2年 <input type="checkbox"/> 1年未満 <input type="checkbox"/> 使用しない
2-b. あなたは、普段、一日どのぐらいケータイで電話を使っていますか？（発信のみ）	<input type="checkbox"/> 10回以上 <input type="checkbox"/> 5～10回 <input type="checkbox"/> 3～5回 <input type="checkbox"/> 2回程度 <input type="checkbox"/> 1回程度 <input type="checkbox"/> 2～3日に一回 <input type="checkbox"/> 殆どしない
2-c. あなたは、普段、一日どのぐらいケータイでメールを使っていますか？（発信のみ）	<input type="checkbox"/> 50通以上 <input type="checkbox"/> 40～50通 <input type="checkbox"/> 30～40通 <input type="checkbox"/> 20～30通 <input type="checkbox"/> 10通～20通 <input type="checkbox"/> 5～10通 <input type="checkbox"/> 5通以下

2-d.あなたは、普段、 <u>一日</u> どのぐらいケータイでインターネットにアクセスしますか？	<input type="checkbox"/> 2 時間以上	<input type="checkbox"/> 1 時間 20 分～2 時間					
	<input type="checkbox"/> 1 時間～1 時間 20 分	<input type="checkbox"/> 40 分～1 時間					
	<input type="checkbox"/> 20 分～40 分	<input type="checkbox"/> 0 分～20 分 <input type="checkbox"/> 全くしない					
2-e.あなたは、ケータイで日本語での入力（語彙表現やスピードなど）が上手だと思いますか？	<input type="checkbox"/> 非常にそう思う	<input type="checkbox"/> かなりそう思う	<input type="checkbox"/> ややそう思う	<input type="checkbox"/> どちらとも言えない	<input type="checkbox"/> あまり思わない	<input type="checkbox"/> 殆どそう思わない	<input type="checkbox"/> 全くそう思わない
2-f.あなたは、普段、 <u>一日</u> どれぐらいケータイのインターネットにアクセスして日本語を勉強していますか？	<input type="checkbox"/> 2 時間以上	<input type="checkbox"/> 1 時間 20 分～2 時間					
	<input type="checkbox"/> 1 時間～1 時間 20 分	<input type="checkbox"/> 40 分～1 時間					
	<input type="checkbox"/> 20 分～40 分	<input type="checkbox"/> 0 分～20 分 <input type="checkbox"/> 全くしない					
3-a.あなたはこれまで <u>どれ</u> ぐらいパソコンを使用してきましたか？	<input type="checkbox"/> 8 年以上	<input type="checkbox"/> 5 年～8 年	<input type="checkbox"/> 4 年～5 年	<input type="checkbox"/> 3 年～4 年	<input type="checkbox"/> 2 年～3 年	<input type="checkbox"/> 1 年～2 年	<input type="checkbox"/> 1 年未満
3-b.あなたは普段、 <u>一日</u> どれほどパソコンのインターネットにアクセスしますか？	<input type="checkbox"/> 6 時間以上	<input type="checkbox"/> 5～6 時間	<input type="checkbox"/> 4～5 時間	<input type="checkbox"/> 3～4 時間	<input type="checkbox"/> 2～3 時間	<input type="checkbox"/> 1～2 時間	<input type="checkbox"/> 1 時間未満
3-c.あなたは、普段、 <u>一日</u> どのぐらいパソコンの電子メールを使っていますか？（発信のみ）	<input type="checkbox"/> 50 通以上	<input type="checkbox"/> 40～50 通	<input type="checkbox"/> 30～40 通				
	<input type="checkbox"/> 20～30 通	<input type="checkbox"/> 10～20 通	<input type="checkbox"/> 5～10 通				
	<input type="checkbox"/> 5 通以下						
3-d.あなたは、普段、 <u>どれ</u> ぐらいパソコンのインターネット(e ラーニング)を使用して、日本語の学習をしていますか？	<input type="checkbox"/> 6 時間以上	<input type="checkbox"/> 5～6 時間	<input type="checkbox"/> 4～5 時間				
	<input type="checkbox"/> 3～4 時間	<input type="checkbox"/> 2～3 時間	<input type="checkbox"/> 1～2 時間				
	<input type="checkbox"/> 1 時間未満	<input type="checkbox"/> しない					

Ⅲ. 以下の項目について当てはまると思われるものに☑をしてください。

質問項目	評価						
	全くそう思わない	殆どそう思わない	あまり思わない	どちらでもない	ややそう思う	かなりそう思う	非常にそう思う
1.インターネットで新聞やニュースを見るのが好きだ。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

2.インターネットでアニメ、ドラマ、映画、音楽番組、スポーツなどを見るのが好きだ。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3.インターネットで語学番組、教育番組、教養番組などを見るのが好きだ。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4.図書館や資料室で必要な資料を探すのが上手だ。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5.インターネットで必要な情報を探すのが上手だ。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6.他の学生よりも情報を探す能力が高い。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7.インターネットを利用すれば、知りたい情報をほとんど得ることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8.紙版の新聞より、インターネット版の新聞をよく読む。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9.新聞やニュースは事実を客観的に伝えている。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10.インターネットを利用すれば、いいレポートや論文を書くことができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
11.カメラやテレビカメラで撮影した画像を編集して作品にし、他人に見せるのが好きだ。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
12. インターネットでブログを書く/書いてみたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
13.新聞(紙版)やインターネットの HP を作成して、様々な情報を発信している/発信してみたい。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
14.インターネット上のマナー(ネチケット)を守っている。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

ご協力ありがとうございました！
本調査に関して、何か思うところがありましたら、ご記入ください。
どのようなことでも構いません。